

図版16 赤須城遺跡横瀬No.6 東域造構全景、第2号住居址、柱穴址群。



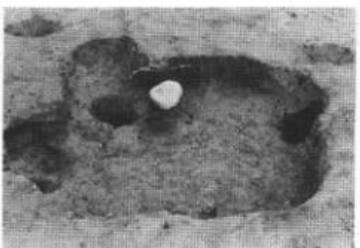
圖版17 赤須城遺跡横堀No.6 東城遺構1・2号焼石址及び2・3号集石址。



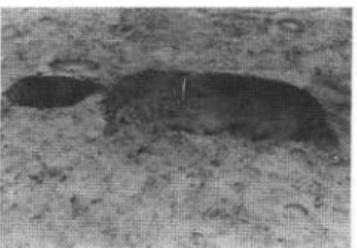
4号集石址



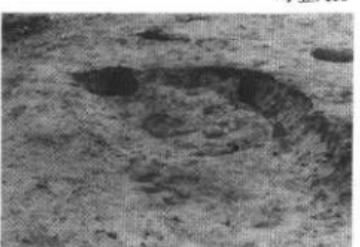
4号集石址



小竖穴14



小竖穴15

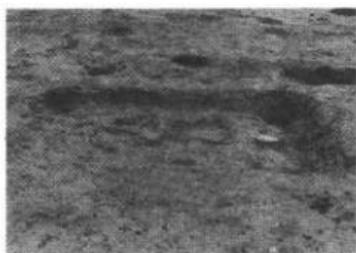


小竖穴16



小竖穴17, 18

図版18 4号集石址及び小竖穴14~18



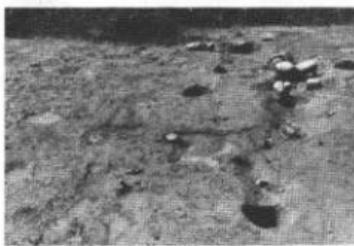
小竖穴19



小竖穴20



室状遗構2

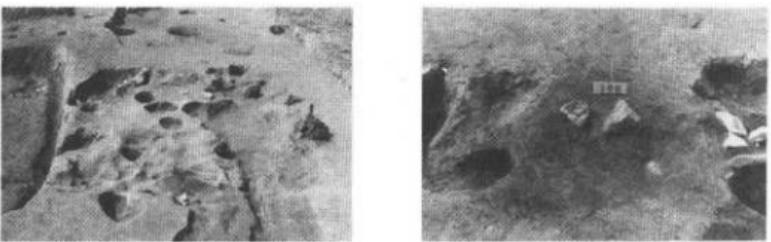
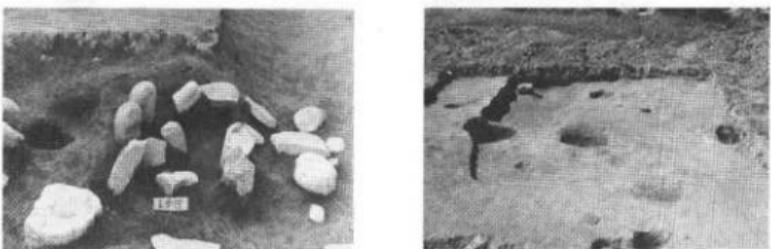
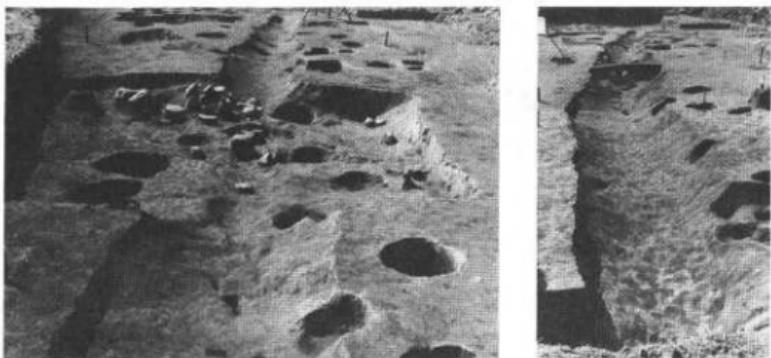


溝状遗構1

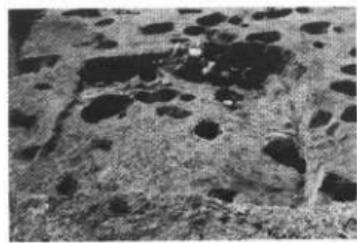
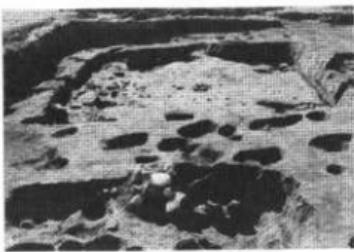


发掘参加者

图版19 小竖穴19·20号，室状遗構2号，溝状遗構，发掘参加者。



图版20 七免川A遺跡第1号住居址，溝状遺構1号（上段），第2号住（中段），第3号住（下段）。



図版21 七免川A遺跡、第3～5号住溝状遺構2号。

七兔川B遺跡

1980

駒ヶ根市教育委員会

凡　例

1. この報告書は、県営ほ場整備事業地区内のうち、農家負担経費分を文化庁補助事業として実施した七免川B遺跡のものである。
2. 本報告書は昭和54年度内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会にゆだねることとした。
3. 遺構の整図は気賀沢進が行い、土器・土製品の実測・図版作成は第1～8・11号住居址は気賀沢、9・12～15号住居址、土括関係は小原晃一が当たった。石器の実測・製図は宮下喜代子・宮下妙子が当たった。焼土はドットで表示し、埋甕はウメ、柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。
4. 土器の復元は小松原義人があたった。
5. 本報告書は気賀沢・小原が執筆し、各文末に文責を記したので参考されたい。
6. 遺物及び実測図類は駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

凡 例
目 次
挿 図 目 次
図 版 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1 節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2 節 調査会の組織.....	1
第3 節 発掘作業経過.....	2

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1 節 位置及び地形.....	3
第2 節 歴史的環境.....	3

第Ⅲ章 発掘調査

第1 節 調査概要.....	7
第2 節 遺構と遺物.....	7

第Ⅳ章 まとめ.....	89
--------------	----

挿 図 目 次

第1図 七免川B 遺跡位置図.....	4
第2図 七免川B 遺跡地形図.....	5
第3図 七免川B 遺跡遺構全測図.....	6
第4図 第1号住居址実測図.....	8
第5図 第1号住居址カマド実測図.....	9
第6図 第1号住居址出土土器.....	9
第7図 第2号住居址実測図.....	10
第8図 第2号住居址炉、埋甕断面図.....	11
第9図 第2号住居址出土土器.....	12
第10図 第2号住居址覆土出土石器.....	13
第11図 第2号住居址覆土出土石器.....	14

第12図	第2号住居址出土石器	15
第13図	第2号住居址床面出土石器	16
第14図	第2号住居址覆土出土石皿	17
第15図	第2号住居址出土石器	18
第16図	第3・4号住居址実測図	20
第17図	第3号住居址出土土器	21
第18図	第3号住居址覆土出土石器	22
第19図	第3号住居址覆土出土石器	22
第20図	第4号住居址床面出土土器	22
第21図	第5号住居址実測図	23
第22図	第5号住居址カマド実測図	24
第23図	第5号住居址出土土器	25
第24図	第5号住居址出土土器	26
第25図	第6号住居址実測図	28
第26図	第6号住居址カマド実測図	29
第27図	第6号住居址出土土器	30
第28図	第7号住居址実測図	32
第29図	第7号住居址炉址実測図	32
第30図	第7号住居址出土土器	33
第31図	第7号住居址床面出土石器	34
第32図	第7号住居址床面出土石器	35
第33図	第7号住居址床面出土石器	35
第34図	第8号住居址実測図	36
第35図	第8号住居址カマド実測図	37
第36図	第8号住居址出土土器	38
第37図	第9号住居址出実測図	39
第38図	第9号住居址出土土器・土製品	39
第39図	第9号住居址覆土出土石器	40
第40図	第9号住居址覆土出土石器	41
第41図	第10号住居址実測図	43
第42図	第10号住居址床面出土遺物	44
第43図	第11号住居址実測図	44
第44図	第11号住居址出土土器	45
第45図	第12号住居址実測図	46
第46図	第12号住居址床面出土土器	46
第47図	第13号住居址実測図	47

第48図	第13号住居址炉址実測図	48
第49図	第13号住居址床面出土土器	49
第50図	第13号住居址床面出土土器・石器	50
第51図	第13号住居址床面出土石器	51
第52図	第14号住居址実測図	52
第53図	第14号住居址床面出土土器	53
第54図	第14号住居址床面出土上器	53
第55図	第15号住居址実測図	54
第56図	第15号住居址床面出土土器	54
第57図	土塙実測図	70
第58図	土塙実土図	71
第59図	土塙実土図	72
第60図	土塙実土図	73
第61図	土塙出土土器	74
第62図	土塙出土土器	75
第63図	土塙出土土器	76
第64図	土塙出土土器	77
第65図	土塙出土土器	78
第66図	土塙出土土器	79
第67図	土塙出土土器	80
第68図	土塙出土土器	80
第69図	土塙出土石器	81
第70図	土塙出土石器	82
第71図	遺跡出土石皿	83
第72図	1号火葬墓及び人骨集中1～4区実測図	84
第73図	1号火葬墓実測図	86
第74図	1号火葬墓及び人骨集中1～4区出土遺物	87
第75図	古线拓影図	88

図版目次

図版1	遺構全景及び第1号住カマド・第2号住.....	93
図版2	第2号住・3号住・4号住及び遺物出土状態.....	94
図版3	第5号～8・10・15号住.....	95
図版4	第8号・9号・13号住.....	96
図版5	土塁1～3・6・7.....	97
図版6	土塁群Vと土塁11・13・41・47・68・72.....	98
図版7	土塁83・97・104・106・107.....	99
図版8	第5・6・8号住出土遺物.....	100
図版9	第2・3・13・14号住及び土塁1・7出土遺物.....	101
図版10	土塁40・77・88出土遺物.....	102
図版11	1号火葬墓及び人骨中区.....	103

第一章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の経費のうち、農家負担分については、文化財保護担当部局において負担することとなっており、当該対象遺跡のうち七免川B遺跡の一部を七免川B遺跡として文化庁補助事業として市教育委員会で実施することとした。

昭和54年1月12日補助事業計画書を県教育委員会へ提出する。4月24日補助金の内定があつたため、5月14日予算1,925,000円の補助金交付申請書を提出するとともに必要な予算措置を行った。

事業は市教育委員会を中心とした七免川B遺跡発掘調査会へ委託して事業を行うこととし、7月9日市長と会長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取り交わし、8月2日から発掘調査を開始した。

第2節 調査会の組織

●七免川B遺跡発掘調査会

会長	木下 衛	(市教育長)
理事	有賀 勤	(市教育次長) (会長代理)
・	下村 忠比古	(市文化財審議会副委員長)
・	宮下 一郎	(市文化財審議会)
・	松村 義也 ()	
・	伊藤 和正	(市博物館館長)
監事	池上 庫司	(市文化財保存会会长)
・	佐藤 雪洞	(駒ヶ根郷土研究会会长)
幹事	松崎 勝治	(市教委社会教育係長)
・	北沢 吉三 ()	後任 (S 54.8.6~)
・	原 寛恒	(市教委社会教育係)
・	気賀沢 進	(市博物館)
・	福沢 房美 ()	
・	小原 晃一 ()	

●調査団

團長 友野良一(日本考古学协会会员) (発掘担当者)
調査員 気賀沢 進(　　・市博物館) (発掘担当者)
タ 小原晃一(長野県考古学会会員・タ)
タ 小松原義人(　タ)
タ 北沢雄喜(　タ)
タ 吉沢文夫(　タ)
タ 田中清文(　タ)
調査補助員 小町谷元
タ 宮下喜代子
指導専丸山敏一郎(県指導主事)
タ 関孝一(　タ)
タ 桶口昇一(県専門主事)
タ 伴信夫(　タ)
タ 笹沢浩(　タ)
タ 青沼博之(　タ)
タ 小林秀夫(　タ)
タ 林茂樹(日本考古学协会会员)
タ 桐原健(県史編纂室)
タ 神村透(日本考古学协会会员)
タ 会田進(　タ)

第3節 発掘作業経過

8月2日、赤須城址の現場から器材運搬を行うとともに、小原調査員・小町谷調査補助員によってグリット設定を行う。

8月3日から調査を開始したが、埋土が厚くまた遺構が複雑に切り合っていて非常に手間取り、大方のめどがついたのは8月末であった。主力は西の七免川A遺跡の調査を行うようにし約10日間実測及び最後の補足調査を行い、すべて完了したのは9月10日であった。

調査団長・調査団員・県教育委員会・土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方々を始め多くの関係者のご協力・ご指導をいただき、また長期間の発掘に常に歓心的に作業に従事していただいた地元の皆さまのご協力・ご配慮によってここに初期の目的を果たし、調査を終了することができましたことについて心から感謝の意を申し上げる次第であります。

(気賀沢 進)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形(第1・2図)

当遺跡は駒ヶ根市赤穂市場割宮の前に所在する。国鉄飯田線小町屋駅より1.8km、古式ゆかしい大御食神社の南東に位置している。標高は632~635mにあって南斜面となっている。

遺跡の南側を流れる七免川は下流にて小鍛治沢と呼ばれ、当遺跡付近より深いV字谷を形成している。遺跡はこの左岸低位段丘上にあり、北側は丘陵となっていてその南傾斜に位置している。

現況は水田で畦畔の高さからして旧地形はかなりの傾斜を示していたことは明らかで、発掘によっても20°前後のローム面の傾斜のあることがわかった。

当遺跡の地層は水田のため、ノーマルな状態は示していない。耕作土(客土)を第Ⅰ層とし、地場下に埋土部分では第Ⅱ層の黒色土(旧表土)、さらに暗褐色土(第Ⅲ層)の漸移層があり、第Ⅳ層が軟質ローム層となっている。一枚の田をとってみても、開田時の破壊が第Ⅳ層にまで及び遺構の壁を削っているところもある。埋土は厚いところでは1.2mを超えるところもあり、傾斜の強さを物語っている。

第2節 歴史的環境

昭和28年に行った赤穂地区の遺跡分布調査によると、遺跡数77箇所、遺物出土地点230箇所となっており、最近の分布調査によって遺跡数は100を超えている。

赤穂地区における遺跡の分布状態をみると大部分が東流する小河川に沿っている。

当遺跡付近の遺跡について簡単にふれておく。

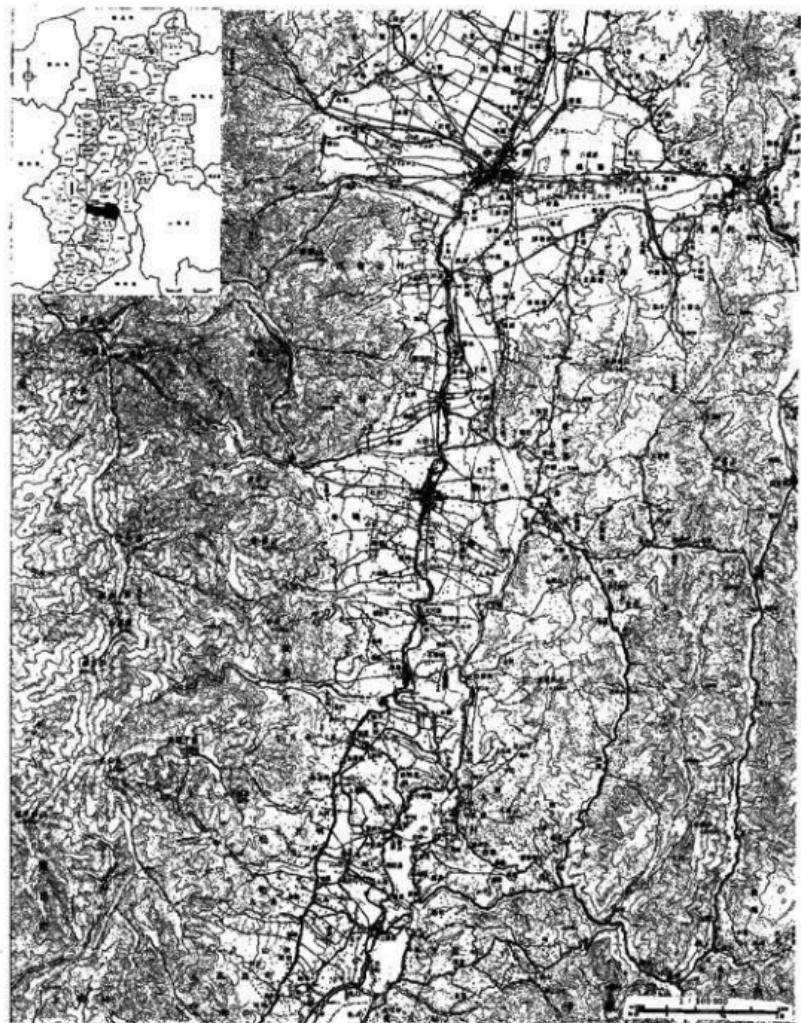
当遺跡の北側丘陵上には御射山遺跡があり、広く考えれば当遺跡も含まれるであろう。昭和50年に遺跡の東部分の調査を行い、平安時代の住居址9軒を確認している。丘陵が切れた天竜川段丘面には、小鍛治古墳群と上の原遺跡がある。小鍛治古墳群は大正15年の鳥居龍藏博士の「先史及原始時代の上伊那」によると9基の古墳が確認されているが、その後の開墾により破壊され、現在完全な形で残るのは4基のみである。すべて円墳である。

古墳群の一角に上の原遺跡がある。故下村修氏が桑畑の深耕されたロームブロック中より御子柴形尖頭器5点と若干離れた所よりブレイドを探集している。

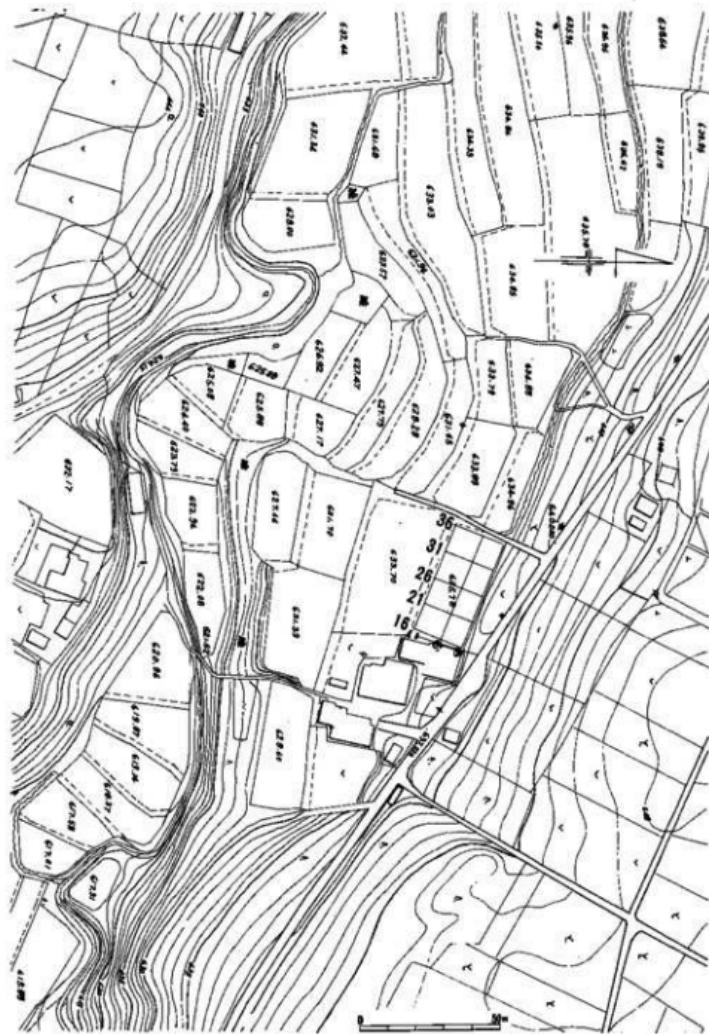
これらの3遺跡の北側は深いV字谷を成し、宮沢川が東流している。対岸小宮沢川をこえた天竜川段丘面には中世の城郭址赤須城がある。本年調査を行い多くの成果をもたらしている。

七免川B遺跡の対岸は細長い丘陵地形をなし、大きな遺跡がある。当遺跡の南西対岸に原垣外・赤穂高校遺跡がある。

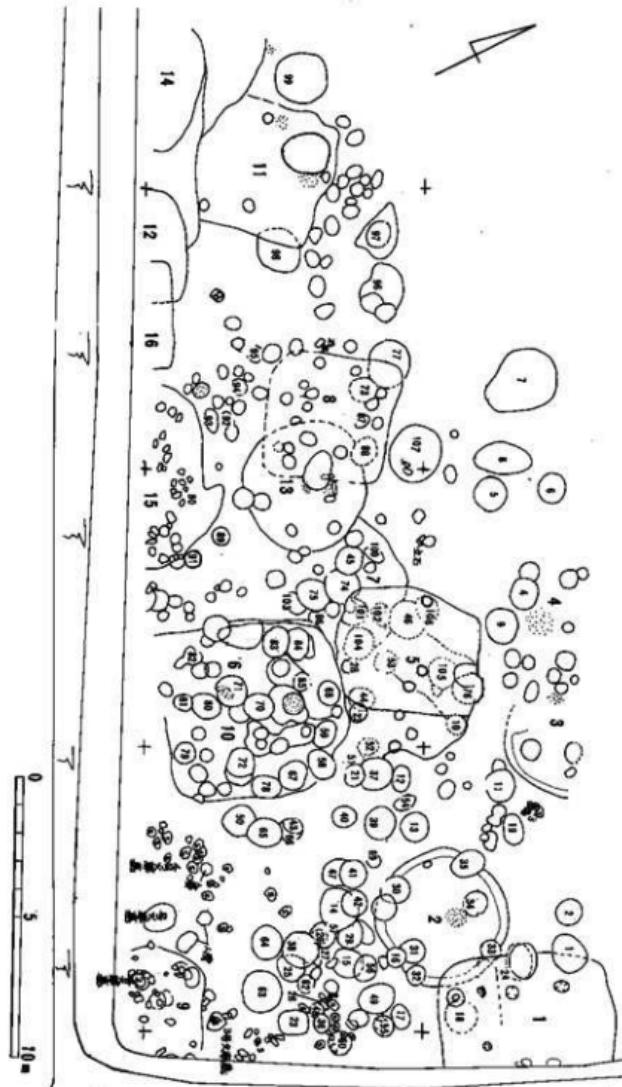
原垣外遺跡は南側にねずみ川が流れ丘陵上から南斜面に位置しており、西側には道路をへだてて赤穂高校遺跡が続いている。昭和52年に発掘調査を行い繩文時代中期の住居址30軒、奈良



第1図 七免川B 逃路位置図 ($S = \frac{1}{200,000}$)



第2図 七免川B遺跡地形図 (S = $\frac{1}{2000}$)



第3図 七免川B遺跡遺構全測図 (S - $\frac{1}{200}$)

から平安時代にかけての住居址13軒、さらに大半が縄文時代中期に属すると思われる土塙300基あまりが確認されている。遺跡の中心は丘陵尾根部にあると思われるが半分ほど住宅となつており調査は不能な状態である。またかつてこの中に3基の円墳があったとされているが、すでに煙滅しており詳細は不明である。

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要

市道町、小銀治線に近い水田の東側北隅（除外地を基点として）に10mグリッドを設定してほぼ南北方向に、あ・い・う……とし、東西方向は調査区域の拡大を考え16のラインとしそれより西に向かって17・18・19……と2mグリッドを設定した。先にも述べたように埋土が厚く又遺構が複雑に切り合っていたため、予定していた区域の半分しか調査できなかつた。しかし今回調査した地点より南の部分はほ場整備事業によって埋土される所のため、いずれかの折に調査できる可能性を残していることは幸いであった。

調査方法はグリッド方式を採用し、遺構確認によって拡張する方法を行い最終的には全面発掘となつた。

今回の調査によって明らかとなつた遺構は縄文時代中期の住居址10軒、古墳時代から平安時代の住居址6軒、土塙107基、中世と思われる火葬墓1基である。

第2節 遺構と遺物

1. 第1号住居址（第4～6図、図版1）

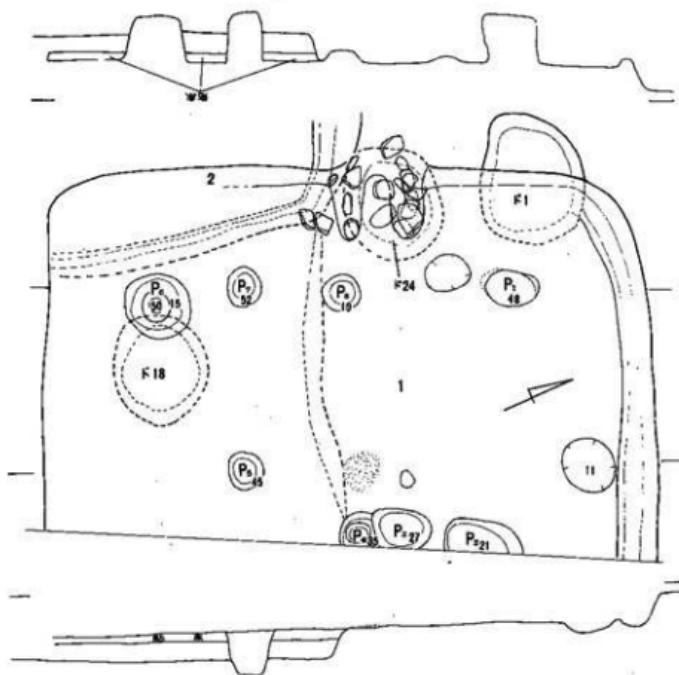
遺構（第4・5図）

本住居址は調査区域の北東隅に位置し、東側は除外地倉庫の下となつてゐる。南側は貼床しており、南西部は第2号住居址をわずかに切つてゐる。住居址の床面は南側が貼床で壁はなくローム面につづいており、定かでないが、南北は6.5mを測る。

コーナーは隅丸を呈し、東西がやや長くなると思われる。壁は開田時に大分割されたと思われ現況は北側及び西側で40cm前後を測る。壁の立ち上がりはややゆるやかである。

北側は周溝がみとめられる。幅は15～20cm、深さは5～8cmである。

床面は中央より北側はローム面を固くたたきしめ堅ちである。南側部はロームブロックと黒色の貼床となっている。貼床下は平担であるがたたきはみられず、又第2号住居址を切つた様



第4図 第1号住居址実測図 (S-no)

子もなく、浅い溝状をなすものである。

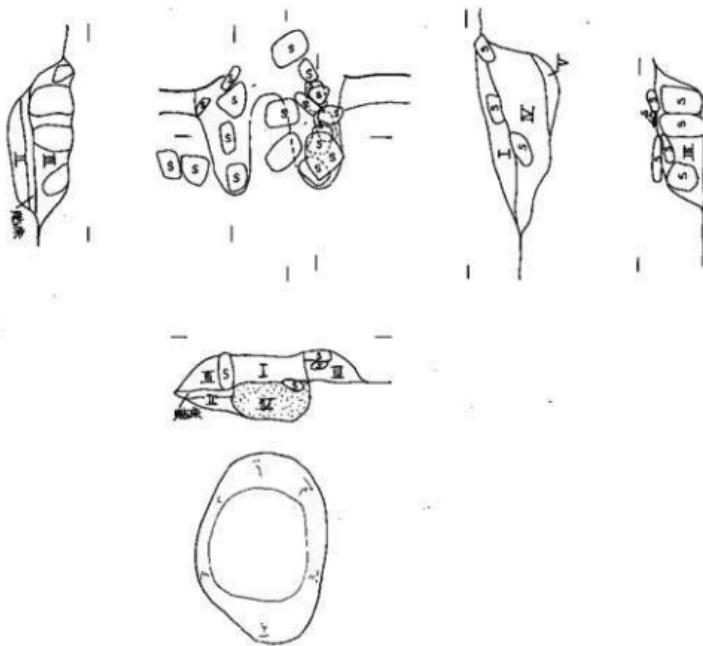
主柱穴はP₁・P₆と思われ、4本が基本で2本は東側にあるものであろう。P₅・P₇ともに深いピットがみられ、主柱穴の可能性もある。

P₅・P₆・P₇は貼床面に明瞭に認められたものである。

西壁カマドの北側に土塙1、貼床下部に土塙18、カマドの下に土塙24があり、明らかに当住居址より以前のものである。

カマドは西壁中央よりやや北側にあり、石心ローム造りで残存状態は良い。

床面を楕円形に掘り込んで構築されており、奥へ行くほど掘り込みは深くなっている。壁上面は斜めに削る程度で大きな抉りはみられない。カマドの石は花崗岩を用いており外側はロームブロック(Ⅲ層)で固めている。内部は上面をローム粒を含んだ黒褐色土(Ⅰ層)が覆い、焼土と灰の混土層(Ⅳ層)、底部に灰(Ⅴ層)がわずかにみられる。



第5図 第1号住居址カマド実測図 (S-2)

カマドの南袖部は第2号住居址の覆土を削ってつくられている。

遺物 (第6図)

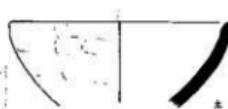
出土土器は少ない。器形を知り得るものは第6図の壺のみである。土師器の壺が主体を占め、須恵器は2片のみである。

第6図は土師器の壺で、丸底に近いと思われる。内湾ぎみに外反する口縁は口唇部にて直立しわずかに稜をもたせている。

外面にはヘラ削り痕が部分的にみられ、内面はナデ仕上げである。砂粒を含む焼きは甘く、黄褐色を呈し、内面は黒ずんでいる。

時期は7世紀代と思われる。

(気賀沢 進)



第6図 第1号住居址
出土土器(寸)

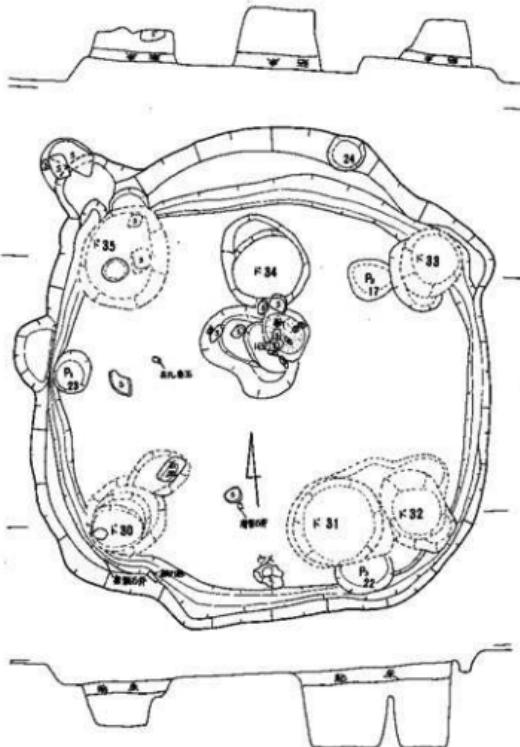
2. 第2号住居址（第7～15図、図版1、2、9）

遺構（第7・8図）

本住居址は、調査地区の東側より発見され、北西には第3・4号住居址があり、東壁は第1号住居址によって切られているものの壁底は残存している。

プランは南北5.2m、東西4.9mの隅丸の方形とも受け取れる円形である。壁は南側に向かい低くなっていて、東壁で7cm、南壁で37cm、西壁で27cm、北壁で最上段との差61cm、中段との差34cmを測る。周溝は壁にそってほぼ全周し、深さ7cmから13cmを測り南壁に向かい深くなっている。床は堅ちで平坦である。

炉址は、中心軸よりやや北に寄っており、炉石は15～20cmの小さなものである。第8図の断



第7図 第2号住居址実測図 (S-15)

面を参照していただければわかるように、二度にわたって使用したものである。炉底は真赤に焼けただれ、ボロボロになっていたが、炉の層位は下層よりIV層（暗褐色土—ロームブロック、炭化物を含む）—III層（黄褐色土—ロームブロック、炭化物を含む）と堆積していた。さらに中央を花崗岩でしきり、新しい炉を旧炉の北側に構築したものと考えられる。そのためII層（焼土ブロック）—I層（焼土・炭化物）と整層をなして堆積したのである。

炉の変遷は旧炉の焼土をかき出しその後、暗褐色土—黄褐色土が堆積し、時間的経過が推測されると同時に炉を再使用した人為的作用を考えられる。

この新旧の炉とともに、柱穴（一部土塙として残っているが）が貼床されていることも注意される。

主柱穴は当初の時点では、土塙30・32・33・35が考えられ、その深さは55cm・93cm・66cm・44cmである。

住居の構造を変える時点で、柱穴を貼り床し上屋を再度構築したならば、その新しい柱穴が存在しても良いと考えられるが、そのプランはなかった。

先にも述べたが、この新旧の炉、柱穴の貼床の有無、北壁の有段の状態より、二度目の住居使用の時には上屋がなかったとも推測できる。

遺物（第9～15図）

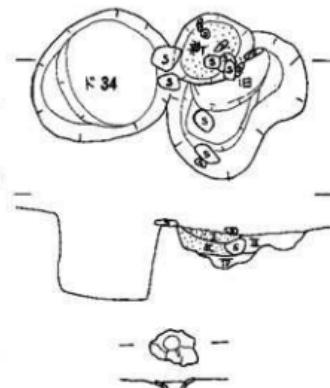
住居址床面直接の出土遺物は少なく、第7図にみられるように磨製石斧2点、敲打器1点、土器数点と埋甕だけである。その外は、住居址床面より4cm以上の位置の暗褐色土層中に集中していた。

出土遺物は土器量よりも石器数の方が個体的には多く、石器では打製石斧と黒曜石（石鐵・リタッヂのある剝片）が主を占めている。

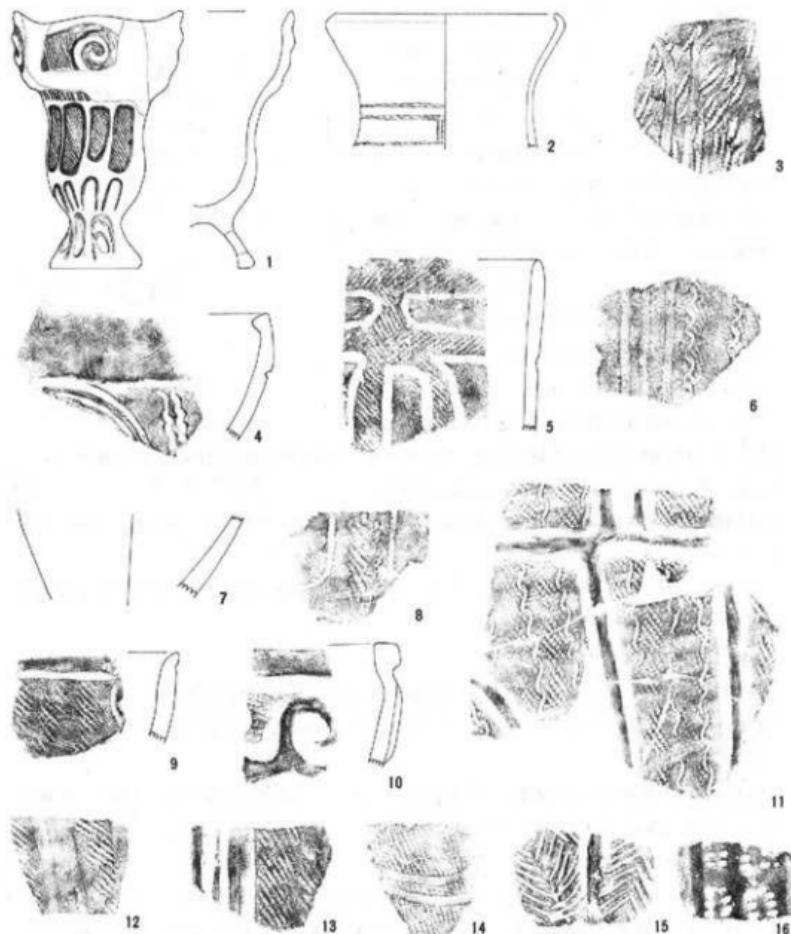
土器は深鉢形のものが多い。

第9図1は、台付きの小形深鉢形土器である。器高27.4cm、口径17.5cm、胴径10.5cm、台底径9.2cmを測る。色調は茶褐色で胎土には長石・石英粒が多く含まれる。口縁は山形口縁をなし文様は隆帯による渦巻文を頸部で連結させて貼り付け単節の斜繩文を施す。頸部には幅の広い列点文をわりと粗くつけ、下半胴部には沈線で縦の楕円文をつけ、中を単節斜繩文でうめている。台上端の胴部は同じく沈線で逆U字状の文様をつけるのみであり、台は隆帯で厚みをつける4個の孔を持つ。孔の周りにはヘラ先で刻み目をつけ、孔と孔の間には溝をほり込んでいる。同器形のものとしては、駒ヶ根市赤穂富士山遺跡より2例出土している。

2は深鉢形土器の口縁部であり、口縁部は無文で頸部に横走する2条の列点文と縦2条の列点文がつけられている。胴部にかけても1条の列点文がみられるので、同様に底部にかけて文

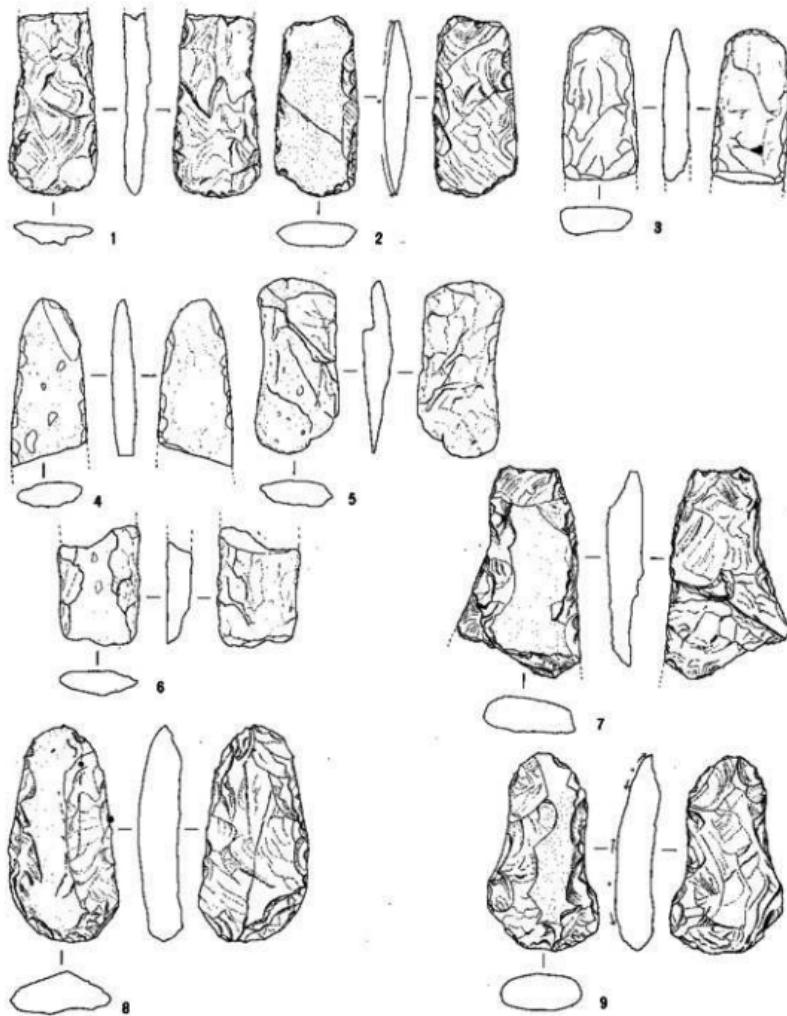


第8図 第2号住居炉(上)と埋甕(下)
断面図(S-4b)

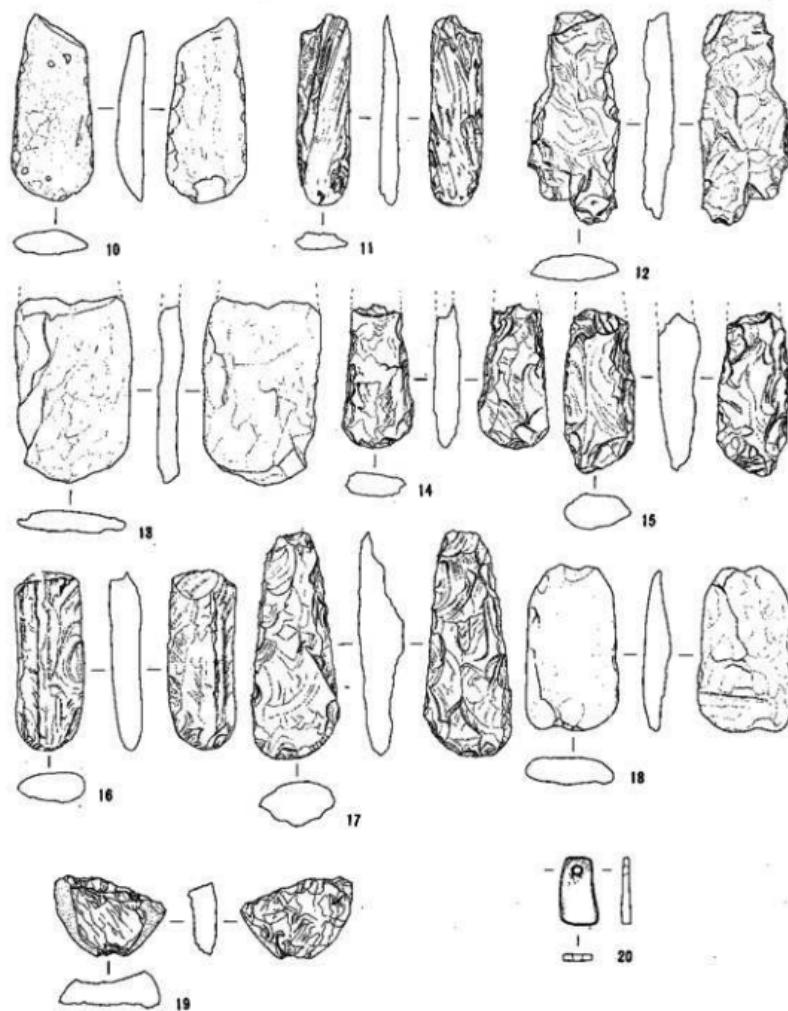


第9図 第2号住居址出土土器

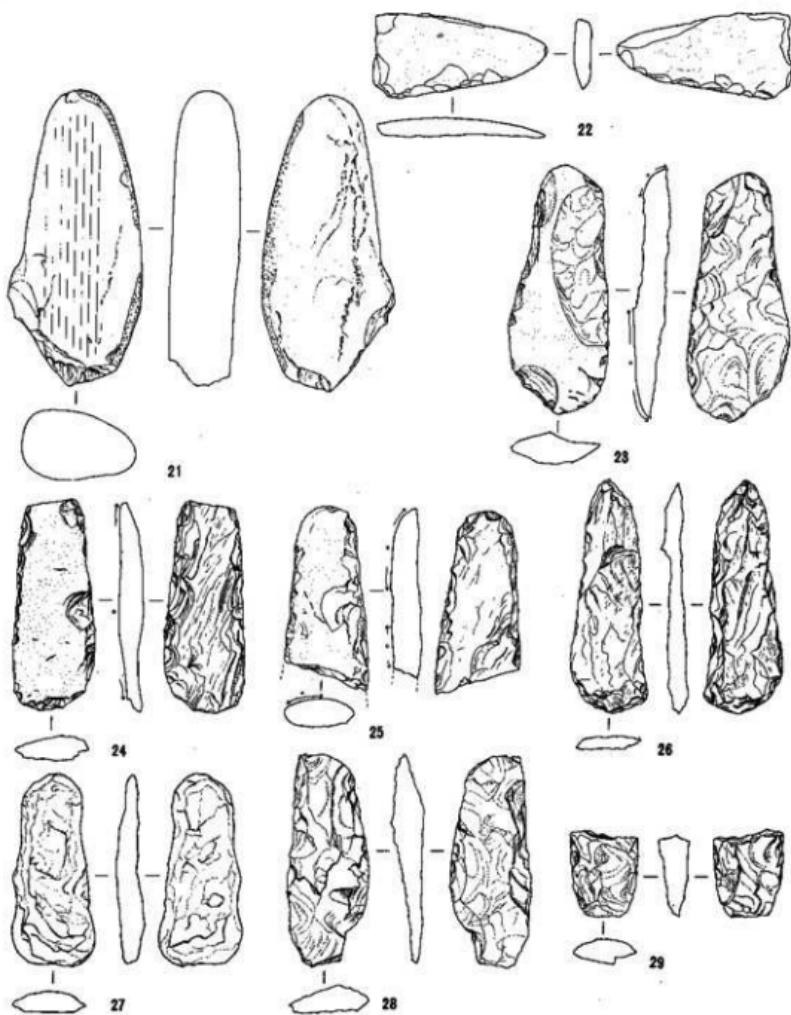
(1・2・7は壺他は甌, 1~6は覆土, 7~16は床面出土, 7は埋甌)



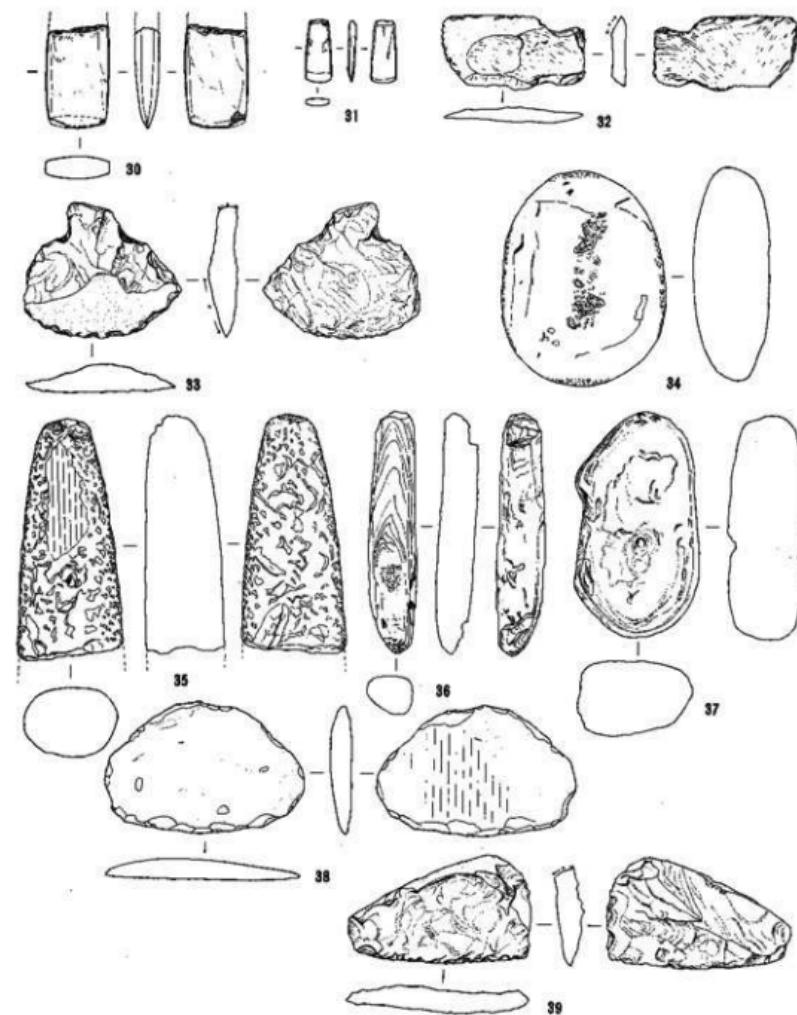
第10図 第2号住居址覆土出土石器(上)



第11図 第2号住居址出土石器 (上)



第12図 第2号住居址出土石器（21は覆土、他は床面出土）



第13図 第2号住居址床面出土石器（寺）

様構成がなされるかもしれない。

口縁部破片としては、外に4・5・9・10がある。

4は山形口縁を持つもので、口縁部を肥厚させ、文様は沈線で梢円を示すと思われる文様と2条の縦の蛇行文がつけられている。この沈線による蛇行文は、他の土器に多い結節繩文の凝似化とも思える。5は中期的土器様相の範囲に入るかは疑問で、後期初頭の称名寺系のものと考えられる。文様は沈線で区画し、区画内をヘラ削りして、やや浮かび上がった部分に単節斜綱文を縦横に転がしている。9・10は同じ形態の土器と言える。9では沈線による渦巻文と縄文を組み合わせ、10では隆帯貼り付けによる渦巻文と縄文を組み合わせている。

胴部破片としては、3・6～8、11～16がある。

3は頸部から胴部にかけての破片で、粗い単節斜綱文の上に、おそらく梢円文を示すであろう沈線がひかれている。6は縦3条の沈線による懸垂文と2条の結節回転縄文がみられる。7は2号住南寄りに発見された埋甕で胴下半部で底部を欠き無文である。

8は沈線で区画をつけ、その中に粗い結節縄文と思われる施文をしている。11はおそらく頸部より連結するであろう隆帯の貼り付けを行い、その区画の中に3条の縦の結節回転縄文を施している。大形深鉢の胴部片である。12・13は同類の形態のものであり、12では縦の沈線と斜綱文、13では縦の隆帯懸垂文の貼り付けと斜綱文という構成である。14は斜綱文に連結するとと思われる沈線の渦巻文をついている。15は縦の懸垂文を貼り付け、その両側にV字・綾杉状の条線をつけている。16は沈線による懸垂文と、ヘラ先の刻目によって梢円形を表現している。

1～6は覆土出土のものであり、7～16は床面出土のものである。時期的には、中期後葉から末葉にかけてのものであり、関東編年加曾利EⅠ～Ⅱ式、諏訪地方曾利Ⅰ～Ⅱ式に比定され両Ⅱ式末からⅢ式にかけてのものと言える。5は称名寺系のものとらえておきたい。

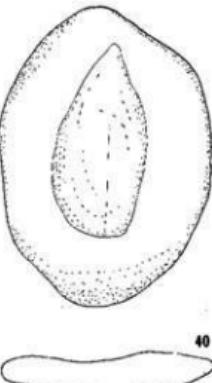
石器は打製・磨製石斧をはじめ、多量の出土を見せており、打製石斧では短冊形が20点と多い量であり、石鏃7点、リタッチのある剝片13点と黒曜石製石器も多くを占めている。

打製石斧は第10図1～6・8、第11図10～17、第12図23～29まで、主として短冊形である。大きさは長さ12cm前後、幅5cm前後で、厚さ3cm前後である。完形のもの9点、頭部欠損6点、刃部欠損5点であり、11のみが半磨製石斧である。石器面に自然面を残すものが12点であり、石質は硬砂岩製のものが主で、11が緑泥片岩、14が雲母ホーンフェルス、15が砂岩がホーンフェルス、24が両輝石安山岩、25が緑泥片岩、26が両輝石安山岩である。

撥形の打製石斧は7・9で共に硬砂岩製である。

磨製石斧は第13図30・31で、30が滑石片岩、31が泥板岩で共に定角形をなし、31は小形のものである。

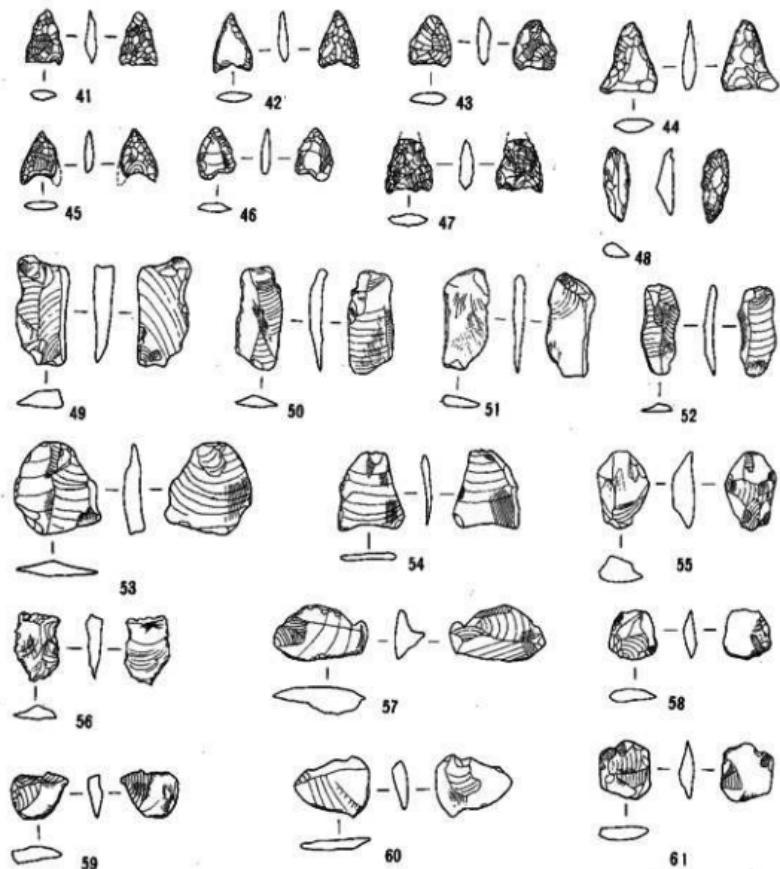
横刃形石器は、第12図22、第13図38・39で3点とも硬砂岩製の剝片を使用している。



第14図 第2号住居址覆土
出土石皿(左)

石匙は第13図32・33で、32は横型で頁岩、33は縦型で硬砂岩製である。

敲打器は第13図34～36で、34は円形、35・36は棒状であり、34は硬砂岩製で平面・側面を使用しており、35は砂岩ホーンフェルスで先端部を欠き、敲打によって整形し、一部磨ってある。乳棒状磨製石斧の加工途上とも考えられる。36は片麻岩で、先端部を敲打している。



第15図 第2号住居址出土石器（上）

磨り石は第12図21で硬砂岩製のもので、平面は両面磨ってあり、側面は敲打している。

石錐は2点出土していて第11図18・19である。18は硬砂岩製で剝片使用、19は輝緑凝灰岩製で半分に割れている。

凹石は、第13図37が1点出土していて輝石花崗岩製で1箇所の凹みをもつ。風化が著しいが器面を磨ってある。

石皿は第14図40で花崗片麻岩製である。

石鏃は7点（第15図41～47）で41・42・43・46は完形、44は未製品、45は脚を46は頭部を欠く。41・42・45・47は調整は良いが、他は粗いものである。すべて黒曜石製である。

石錐は第15図48の1点で黒曜石製である。

第15図49～61は、それぞれリタッチの確認できる搔器ないし削器と思われるもので、すべて黒曜石製である。

石製石として第11図20の滑石製の有孔垂玉がある。床面より5cm浮いて出土したものである。

大きさは、長さ36mm、幅20mm、厚さ5mmで、孔径4mm、重さ8gである。形態は撥形に近似する。表面には斜めの整形痕が認められる。このような有孔垂玉の出土例は、栃木県湯津上新潟県長者ヶ原、秋田県船川町、同北浦町、同玉城目町等を数えるにすぎない。（「日本考古学事典」1962年、日本考古学会—玉斧参照）。硬玉製のものを玉斧と呼ぶらしく、本遺物は滑石製であり、有孔垂玉とすべきであろう。

注目すべきことは、上記した各遺跡が縄文時代中期に属するもので、同じく流行した硬玉製大珠と共に、このような稀有な遺物の出土は、本遺跡の古代人相互間の特殊な権威関係を暗示するものかも知れない。

（小原 晃一）

3. 第3号住居址（第16～19図、図版2、9）

遺構（第16図）

第3号住居址は、第2号住居址の北側に発見されたが、北側は調査区域外の土手下の為、北半分は調査が不可能であった。

また壁は検出できず、西側の第4号住居址と切り合い関係をもつと思われるが、その切合關係はつかむことができなかった。開田時に壁は削られたものと思われる。

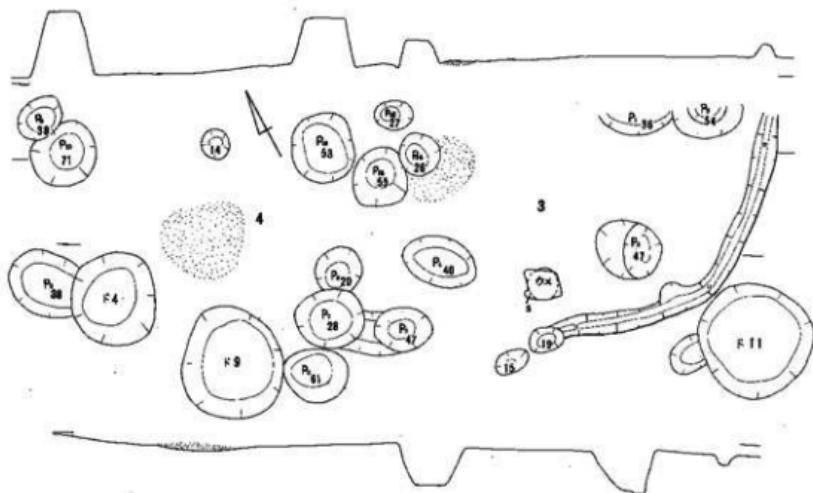
床面は堅ちで、周溝が、東南で確認され、深さは11～12cmを測った。この周溝より住居址のプランを推定すると、直径5m前後の円形を呈するものと思われる。

柱穴は第16図中のP₂・P₃・P₄・P₁₂が想定される。

炉址は石囲い炉であるか、地床炉であるか判別しにくいが、焼土が4cm前後堆積していた。

住居址の南床面に、第17図12の埋甕が正位で設けられ、盤状石が置かれていた。

本住居址の南東近くに土坑11が検出されたが、直接的な関係はつかめなかった。



第16図 第3・4号住居址実測図 (S - N)

遺物 (第17~19図)

開田時の削り取りによって遺物が移動したと考えられ、出土遺物は少なかった。

土器は深鉢形のものが主である。

第17図1は深鉢形土器の口縁部で、口縁を肥厚させ、縦にのびる渦巻隆帯の貼り付けを行い、横にも隆帯をついている。さらにヘラ先で斜めの条線を施している。2は口唇部から口縁部にかけて無文であり、頸部にいたって、ヘラ先で蛇行隆帯の退化とも思われる蛇行文をついている。3は胴部破片で、上端にはヘラ先による刻み目がみられ、X字状の貼り付けを中心にして左右に斜めの隆線が付されている。曾利Ⅰ式に比定されよう。5と13は同じような文様を示しともに口縁部破片で、5は口縁にそってヘラ先でくの字状の刻み目をつけ、沈線で区画し斜繩文をついている。13は口縁部を肥厚させ、横の溝をへだてて隆線で区画し、沈線による再区画をして斜繩文を施している。6は地文は無地で、横位の沈線が2条つけられている。7は隆帯の貼り付けによって幅の広い渦巻文をもち、渦の中をヘラ先で刻み目をつけ、その周りに斜繩文を施している。8・9・16は、同形態の文様であり、8は綫の3条の沈線と条線、9は綫の3条の沈線で地文が斜繩文、16は9の胴部が底部に行くにつれてみられる沈線が消え、斜繩文が残るものである。10・11・14・15は主に曾利Ⅱ式の深鉢形土器の胴部にみられる文様で、連続する隆線による渦巻文と条線で構成されるものである。12は埋甕で、口縁部と底部を欠く深

鉢形土器であり、現器高37cm、胴径28cmを測る。淡褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含んでいる。胴上半部はすすけている。文様は地に斜条線をつけ、その上に4単位と思われる連結する渦巻文と2条の縦の懸垂文と1条の蛇行懸垂文を沈線で施している。

総じて曾利Ⅱ式に比定されるが、3はやや先行するものと思われる。



第17図 第3号住居址出土土器 (12は弓他は弓、1~11は覆土、12は埋甕、13~16は床面出土)

石器は第18図1の棒状敲打器と2の磨製石斧、第19図3～6は黒曜石の剥片にリタッチを持つものだけである。

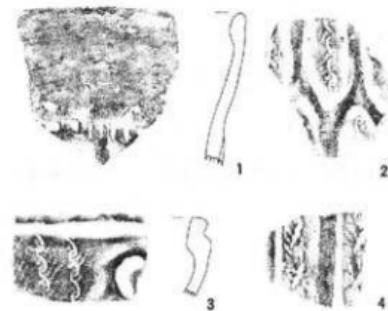
1は片麻岩製で、2は頁岩製である。

(小原 晃一)



第9図 第3号住居址覆土出土石器(1)

第18図 第3号住居址覆土
出土石器(2)



第18図 第3号住居址覆土
出土石器(2)

4. 第4号住居址(第16・20図、岡版2) 遺構(第16図)

本住居址は、第3号住居址の西側にあり、切り合い関係をもつものと考えられるがその痕跡は確認できず、床面はほぼ中央に8cm前後の焼土の堆積と柱穴が確認できただけである。柱穴はP7・P9・P11が同じ位の深さのため推測できるが、確証はない。

遺物(第20図)

出土遺物は、第20図の土器のみである。

1は深鉢形土器の口縁部破片で、頸部に隆起の貼り付けと列点文がみられる。3は1同様に口縁部破片で、口縁部を肥厚させ、連結すると思われる隆線による渦巻文の貼り付けを行い縫の結節回転繩文を施している。2・

4はともに隆帯をもつ胴部破片で、2は原体の縮まった結節回転繩文、4は粗い同繩文を施す。
総じて曾利Ⅱ式・加曾利EⅡ式に比定される。

(小原 晃一)

5. 第5号住居址 (第21~24図、

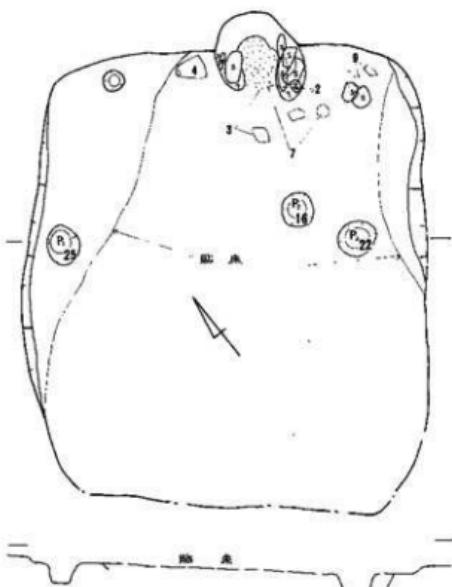
図版3, 8)

遺構 (第21~22図)

本住居址は第3・4号住居の南にあり、南側は第6・10号住居址と接し、南西部は一部第7号住居址に貼り床している。

壁は西側中央部から北壁・東壁中央にかけてみられ、壁高は5cm前後と非常に浅いものである。住居址の床面の大半以上は貼り床からなっており、北半部の西側が直角三角状にまた東側は三日月状にロームの床があるのみで、南側はすべて貼り床となっている。そのため、住居址の規模は南北は推定4.8mほどを測るものと思われ、東西は4.3mの隅丸長方形を呈すと思われる。

床面はやや東に傾斜しており、ローム部の床にはあまりタタキは認められない。また貼り床は黒色土にわずかロームブロックを混ぜたもので明瞭ではない。



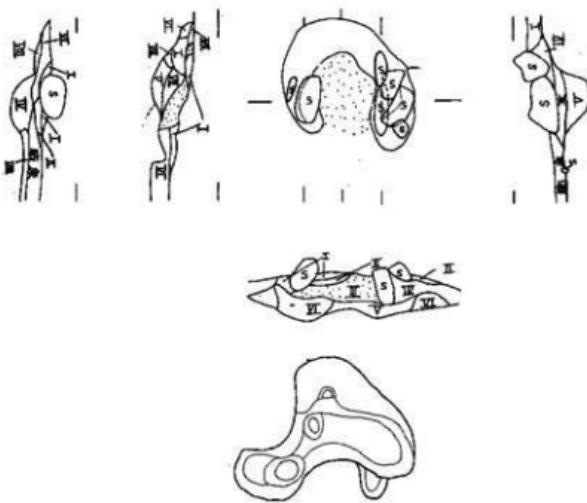
第21図 第5号住居址実測図 (S-5)

柱穴と考えられるものはP1-P3であるがやや中に入る傾向をみせている。貼り床の下は浅く掘られた盆状を呈し多くの土抜が検出され、貼り床の土には繩文土器が無造作に放り込まれている。

カマドは北壁中央よりやや東に寄っており、石心造りの簡単なものである。カマドの石は抜かれたとも考えられる。

カマドは貼り床の上にあり、壁を35cmほど半円形に抉ってつくられ、基底部は深い所で20cmほど掘られ、基底部の平面形は整っていない。貼り床を掘り込んでいる関係もあって不明瞭な点もあったことも一因であろう。

カマドに用いた石は河原石で抽石と思われるものは東袖部の2個だけで、袖部は暗褐色土(IV層)を主体にしたものである。



第22図 第5号住居址カマド実測図 (S = 砂)

カマド内は図示する如く複雑な堆積をみせている。層位は以下のとおりである。

I層—黒褐色土, II層—砂, III層—焼土と灰層, IV層—暗褐色土（炭化物、焼土をわずかに含む）, V層—灰褐色土（灰と炭化物）, VI層—暗黄褐色土, VII層—黄褐色土（ロームブロックを含む）, VIII層—ローム腐乱土。

遺物（第23・24図）

出土土器は第23・24図に示すとおり、器形を知り得るものが多い。須恵器は5のみで他はすべて土師器である。

出土状態はカマド燃焼部より多く出土しており、1・5・6・8はカマドより、2・3・7・9はカマド出土のものと付近のものが接合されたものである。4はカマドの西袖わきに出土したものである。

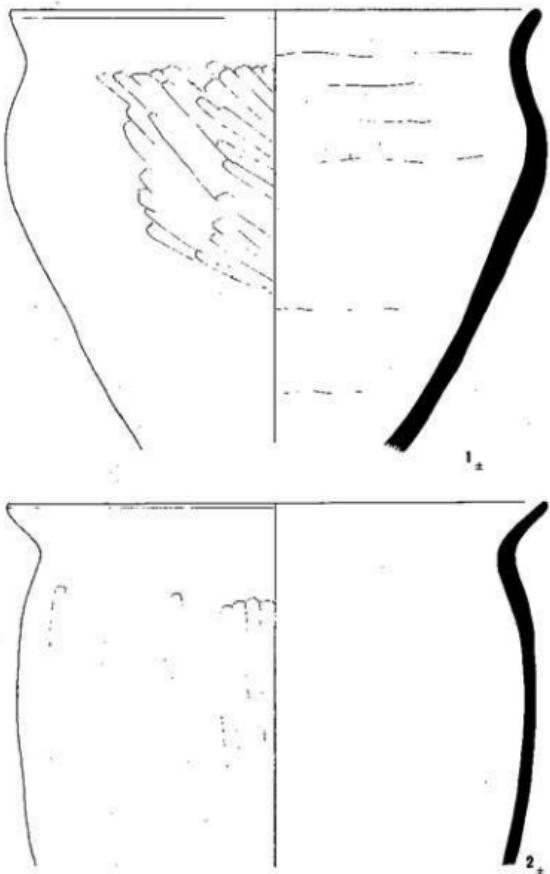
土師器は大形の甕が主となっている。1・3は胴部の短かいもの、2・4はいわゆる鳥帽子形を呈すものである。

1は厚手の甕で、胴部はやや内湾ぎみに外に強く張り、胴上半部に最大径を持って肩部をつくり、内屈したのち口縁は短かく外反する。口唇は丸味を持つ。口縁部は器厚を減じている。胎土には大きな長石・石英が所々にみられるが、全体に堅ちに焼かれている。外面はつやのある明黄褐色、内面は黄褐色を呈している。口縁内外は横の小さみなヘラミガキが施され、外

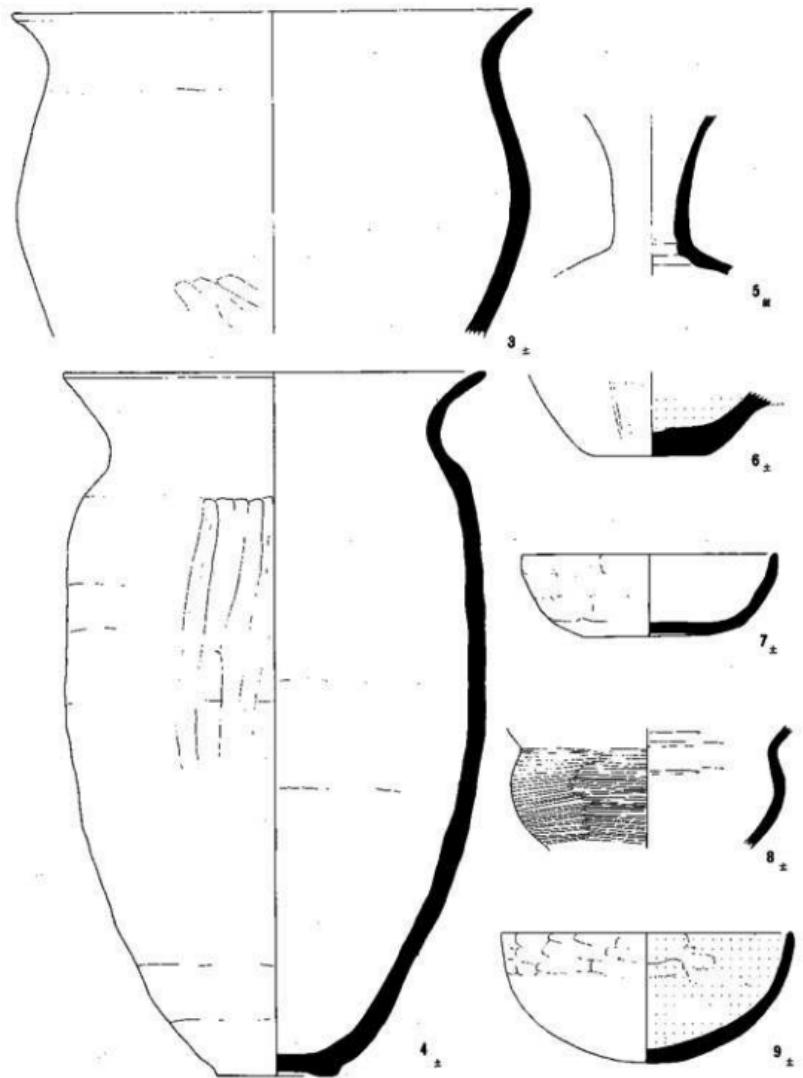
面胴部には斜位のヘラ削り痕がみられる。内面胴部はナデ仕上げを行うが輪積み痕を残している。約半分ほど残っている。2は口縁部に最大径を持つもので、かなり急に屈曲したのちで肩で胴部に至る。器厚はほぼ一定するが、頸部がやや肥厚している。胎土にわずかな砂粒を含み、焼きは甘い。色調は内外面とも黒褐色を呈している。

調整は全体にナデ仕上げで胴部外面には縱方向のヘラ削り痕を残している。約4分の1ほどの残存である。3は1に比べるとやや肩の下がつたもので最大径は口縁を持つ。器厚は口縁が器厚を除々に減じる外は、ほぼ一定している。胎土中には細かい砂を含み、焼きはあまり良くなくもろい。全体にナデ仕上げを行う。外面胴上半部にヘラ削り痕みられる。4は口縁は4分の1ほど他はほぼ残っていて變の中では器形を知り得る唯一のもので

ある。上げ底の小さい底部から屈曲して立ち上がる体部は内湾ぎみに強く外に張り、中央にてほぼ直に近くなつて頸部下に肩部をもたせている。屈曲する頸下部はヘラ削りによって明瞭な段を持たせ口縁は強く張り出し最大径となる。底部から頸部下にかけてはやや厚目で凹凸が激しい。口唇は丸味を持つ。胎土はち密で内外面とも黒褐色を呈し光沢がある。口縁内外とも横



第23図 第5号住居址出土土器(1)



第24図 第5号住居址出土土器 (上)

方向のヘラ削りがみられる。胴部内外ともミガキがかけられ、外面には縦方向のヘラ削り痕が残る。内外面とも輪積み痕を残している。木の葉底である。

5は唯一の須恵器で長頸壺の一部と思われる。直立した頸部から強く口縁は張り出すものである。胎土は黒灰色で外面には自然釉がみられる。

6は把手部の痕跡を残しており、1個の把手を持つ鉢と思われる。底部からほぼ直線的に張り出し厚手である。胎土には砂をわずか含み、外面は赤褐色、内面は黒色研磨される。外面には縦方向のヘラ削りがみられる。底部は手持ちのヘラ削りを行っている。

7・9は壺である。7は約4分の1ほど欠くもので底部は上げ底で、体部は明瞭な立ち上がりをせず内湾ぎみに外に張り出し、口縁部はほぼ直立する。胎土中に、砂・長石をかなり含んで黄褐色を呈し、焼きは甘い。外面には横のヘラ削り痕が残り、内面はナデ仕上げである。底部はヘラで削っている。9は丸底の壺で3分の1ほど残している。厚目の底部からやや内湾ぎみに張った体部はやがてほぼ直立して口縁に至る。口縁は丸味を持つ。胎土中に砂をわずか含み、外面は黒褐色で内面は黒色研磨されている。内外ともヘラ削りの後、小きざみなヘラミガキを行っている。

8は鉢と思われ、3分の1ほど残すものである。外に強く張り出した体央部上位にて内屈して頭部に至り再び外反して口縁を作る。胎土中には砂がわずかに含まれ、内外面とも赤褐色を呈している。外面口縁と内面はナデ仕上げである。胴部外面は細いヘラの削りが横方向に行われている。

これらの土器であるが鬼高期の前半6世紀代のものであろう。

(気賀沢 進)

6. 第6号住居址 (25~27図、図版3, 8)

遺構 (第25・26図)

本住居址は第5号住居址の南にあり、第10号住居址に全面貼り床で構築されている。北壁・東壁・南壁は第10号住居址と共有し、西壁は第10号住居址よりわずか内側につくられている。

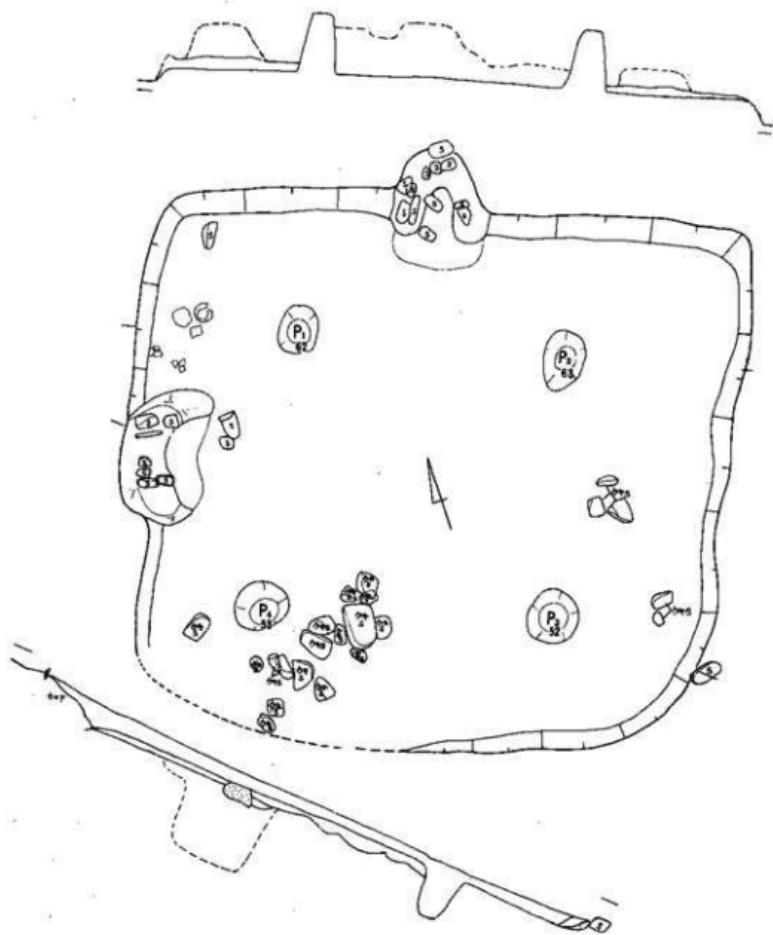
南壁西側は壁がなくなっているが、規模は南北6m、東西6mで北壁がやや長くなるが隅丸方形を呈している。

貼り床はロームと黒褐色・暗褐色土の混合土からなり良くなたきしめられており、明らかに貼り床とわかるものである。床面はほぼ水平である。

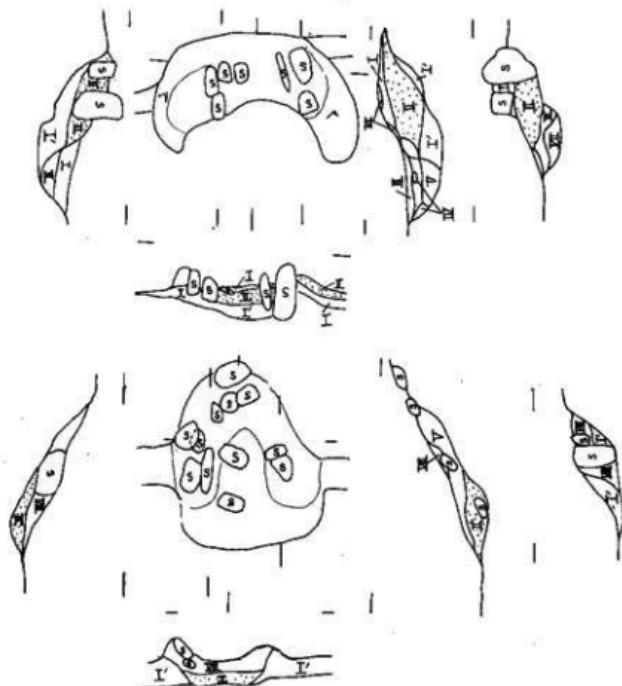
主柱穴はP1~P4の4本で整然としており明瞭に判別できた。住居址覆土上層、南西部と南東部にかなりの浮き石がみられた。

カマドは西壁と北壁のほぼ中央に1箇所ずつ計2箇所にある。同一住居址内に2つのカマドを持つ例は知る限りではなく、重複する可能性も考えられるが、プラン・柱穴さらに床面の状態からはその可能性は薄いものである。特異な例として参考に供したい。

西壁のカマドは壁を10cm掘り凹め基底部はほぼ円形を呈し、深さは最も深い所で30cmを測る。カマドは第10号住居址の覆土中に構築され基底部は同住居址の床面まで掘り凹めている。袖部は短く両わきに大小2個の河原口をするが、周りには特別なブロックはみられない。



第25図 第6号住居址実測図 (S-6)

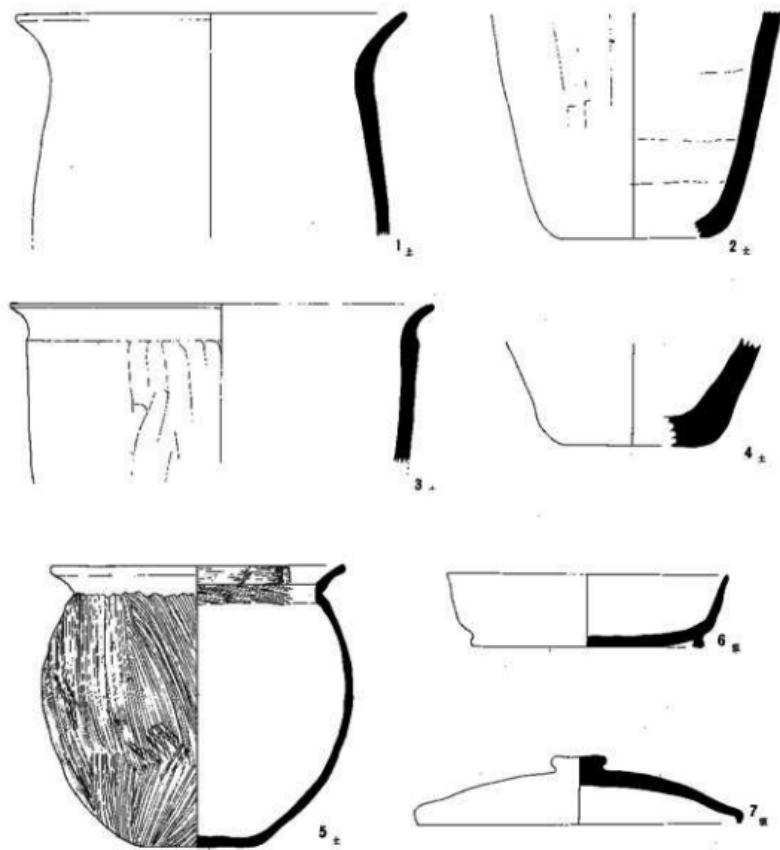


第26図 第6号住居址カマド実測図 (S-あ, 上は西壁, 下は北壁)

北壁のカマドは西壁に比べて奥行の長いもので、壁を50cmほど約30°の角度で削り煙道部をつくっている。基底部の掘り込みは5cm前後で楕円形を呈している。袖部は簡単な造りで、大きな河原石を1個ずつ、周りをロームブロックで固めている。両袖の1個ずつの石を除けば小さな河原石を簡単にすえたものである。

カマドの層位は以下のとおりである。

I—暗褐色土（炭化物含む—覆土）、II層—焼土、III層—黒褐色土（ロームブロック・焼土・炭を含む）、IV層—ロームブロック、V層—黒色土（炭化物・焼土・ローム粒）、VI層—砂層、VII層—ローム腐乱土、VIII層—ロームブロック（焼土・粘土わずかに含む）



第27図 第6号住居址出土土器（土）

遺物（第27図）

土器は二つのカマドを結ぶ北西コーナーを中心に出土している。1はカマド(西壁)内の出土である。量はあまり多くなく第27図のうち、完形に近いものは5・6・7で1~4はすべて3分の1ほどからの図上復元である。須恵器は6・7の外に壺蓋の破片3点と甕の破片が数片みられるのみで土師器が主体を占めている。土師器は壺の破片が2点みられるのみで甕が多い。

1～5は土師器の甕で5を除き大形の長胴形のものと思われる。1は口縁部に最大径を持ち頸部からなだらかな曲線で胴部に至る。砂粒を含み、赤褐色を呈している。口縁部内外は横ナデ、胴部はナデ仕上げである。2・4は甕の胴下半部である。ともに底部からの立ち上がりは明瞭でない。2・4ともナデ仕上げで2の外面にはヘラ削り痕が残り、内面には輪積痕を残す。3は短かい口縁が強く内屈して外反し、頸部下に明瞭な稜をもたせ胴部は内傾する。胎土は、ち密で赤褐色に焼かれている。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はナデ仕上げ、外面はヘラ削りが施される。

5は小形甕で胴部は球状にふくらみ、外反する口縁は内面に明瞭な段をもたせている。器厚はほぼ一定した薄手づくりで、胎土に細かい砂粒を含んで白黄褐色に焼かれるが、全体に炭化物が付着し黒褐色を呈している。木の葉底である。口縁外面は横ナデ、内面は頸部まで横方向の棒状工具によるカキ目、胴部外面は同工具の縦方向を主としたカキ目がみられ、一部底部まで及んでいる。

6・7は須恵器で6は坏、7は坏蓋である。ともにゆがみが生じている。6は厚手の底部は下げ底となり体部の立ち上がりははっきりしないが、内面には屈曲点をもたせている。体部は除々に器厚を減じながらほぼ直線的に広がり口唇にいたる。外面には明瞭なロクロ痕を残す。ロクロは右回りのものを利用している。回転ヘラ切りの後、周囲を回転ヘラ削りして高台をつけ、測面は回転利用のナデを施している。高台は台形に近いものである。灰白色を呈し、胎土にわずか砂粒を含んでいる。7は天井部にやや丸味を持たせ、除々に器厚を減じて一端内屈したのち口縁はやや内傾する。紐は中央部の凹むものである。右回りのロクロを利用し、天井中央部まで回転ヘラ削りを行っている。紐の側面は回転利用のナデがみられる。

時期は奈良時代前半に位置すると思われる。

(氣賀沢 進)

7. 第7号住居址（第28～32図、図版3）

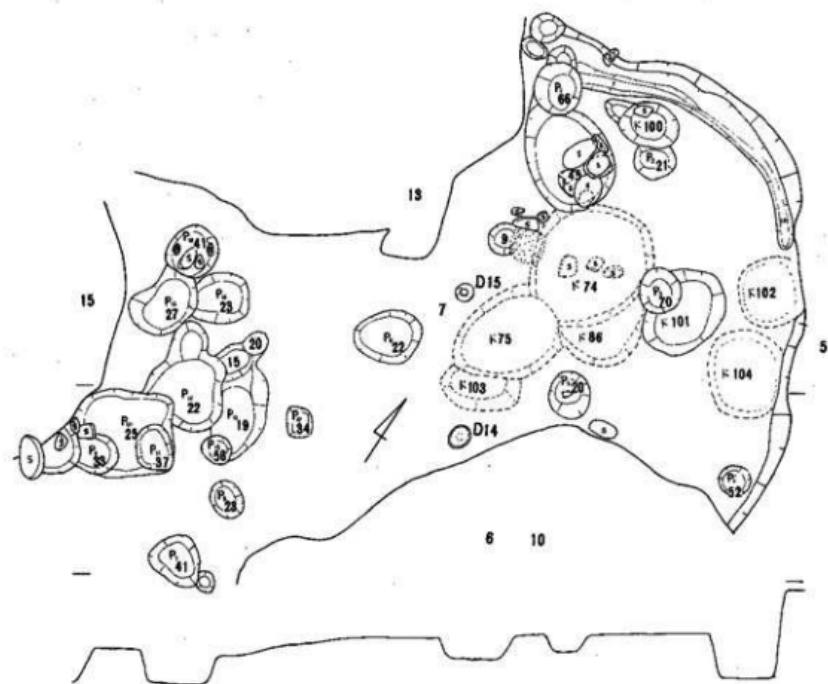
遺構（第28・29図）

本住居址は、北東壁を第5号住居址に、南東壁を第6・10号住居址に、南西壁を第15号住居址に、北西壁を第13号住居址によって切られている。壁の状態を確認できるのは、北壁のみであり、西より東に向かって壁は高くなっている。

プランは、北東壁の残存状態と南西側のピット群の存在より、およそ長軸（S-N）7m、短軸（E-W）6m前後の楕円形を呈していたと推測できうるが確証はない。床面は北側は堅ちであるが南側はやや軟弱である。

柱穴は、P₁・P₃・P₁₂・P₁₈が想定できうる。炉址は、第29図に示す如く、直径35cm位の円状に焼土が10～12cm堆積し、炉石と思われる石が北側に3点みられたが、焼けてはいなかった。

また第2号住居址のように、床面下に存在した土塙74・86・101～104号を貼り床している。土塙74の貼り床の上に、炉址が一部かかっていることは、両者の関係を物語るものであろう。床面北側の土塙45は、盤状の石が7個投げ入れられた状態を示している。周溝は北壁にそって設けられているが、東端は完全に終結した状態を示し、深さは東端で13cm、西端で7cmである。



第28図 第7号住居址実測図 (S - 北)

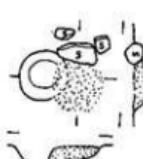
遺物 (第30~32図)

床面よりの遺物の出土量は、土器よりも石器の方が多く、炉址を中心とした区域に遺物は集まっていた。

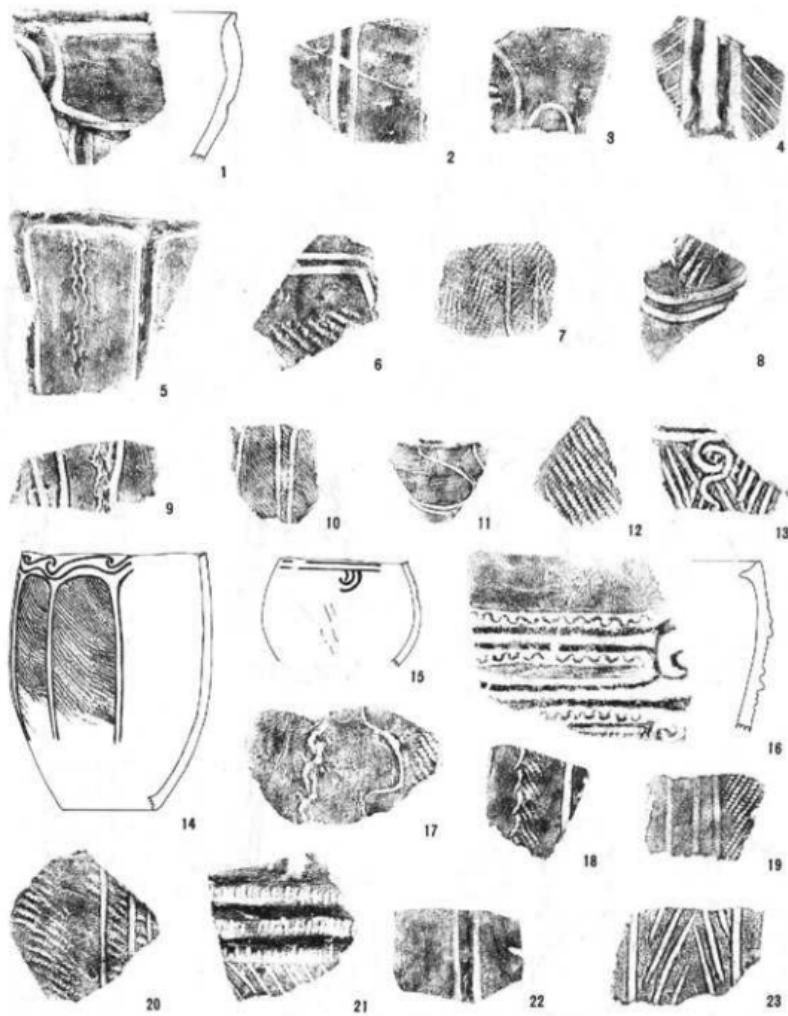
出土土器の特徴的なものは、第30図に示したもので、1~13は覆土、14~24は床面より出土したものである。深鉢形土器片が主を占めている。

1は深鉢形土器の口縁部片で口唇部がやや外反し、やや薄くなっている。隆線による渦巻文がみられ、頸部の横走隆帯と連結する。文様はなくヘラ削りがされている。2・22は無地の胴部に懸垂文を貼り付けたものである。

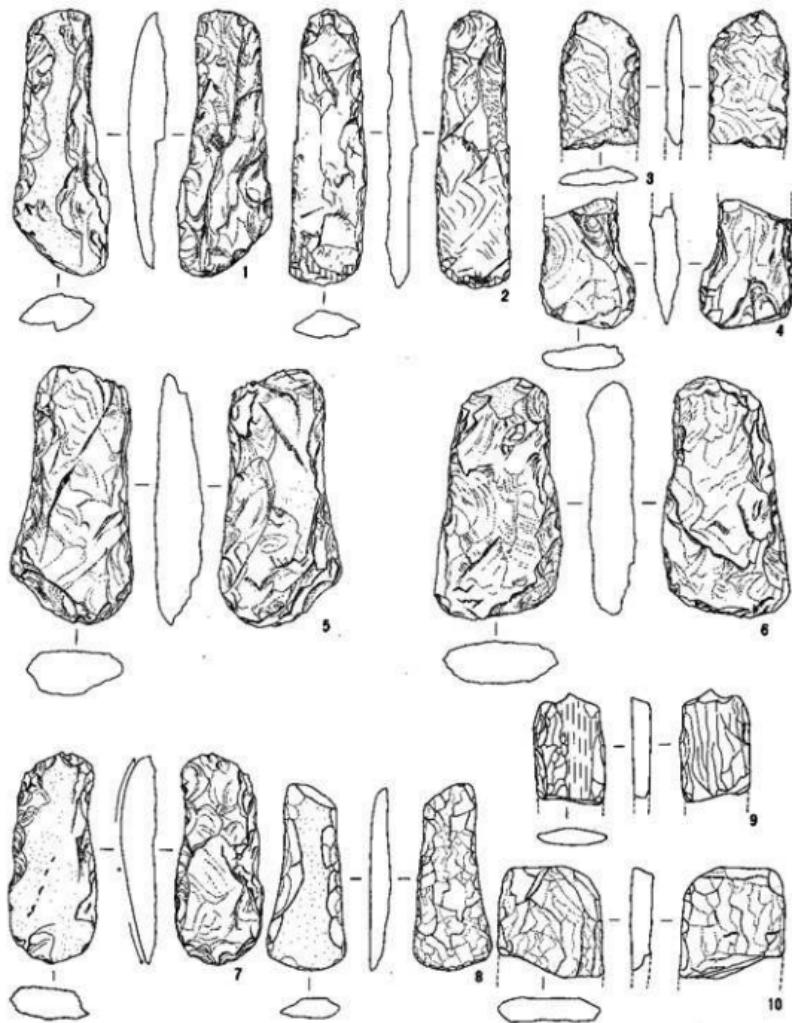
3は無文地に沈線で蛇行文をひいている。4は2条の隆帯の懸垂文を貼り付け連続部でおそらく渦巻文を呈すると思われ両側に斜条線をつけている。



第29図 第7号住居址炉址実測図 (S - 北)



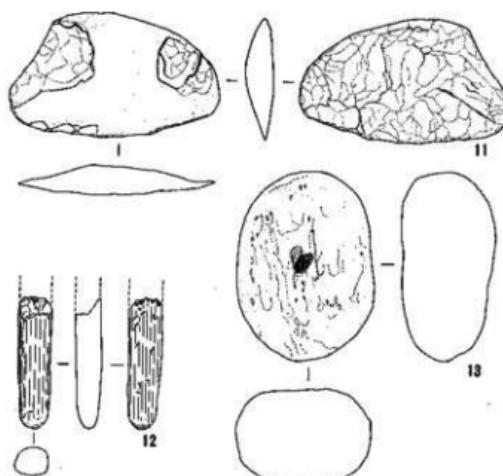
第30図 住居址出土土器 (14・15は壺, 他は甌, 1~13は覆土, 14~23は床面出土)



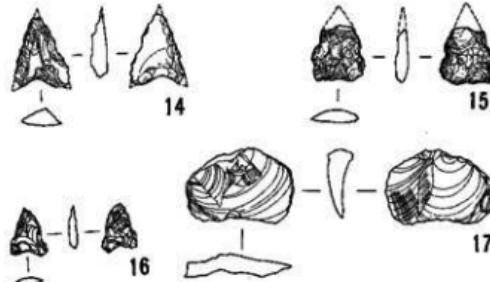
第31図 第7号住居址床面出土石器（上）

5・9・18は結節回転繩文を
縦に施した胴部破片である。5
は隆帯による区画の中に施し、
結節部文様以外を磨り消してい
る。9は結節繩文の上に粗雑な
沈線による懸垂文を施し、18は
沈線区画の中に繩文を施したもの
のであろう。17は一見すると結
節回転繩文と判断できるが、原
体結束の回転繩文であろう。さ
らに沈線の蛇行文と斜繩文が施
されている。

地に斜繩文を施し、その上に
沈線で、渦巻文・区画文・U字
文・懸垂文をつけたものとして
は6~8、10・11・20がある。
12・19は沈線か隆帯で区画した
中に、斜繩文を施したものであ
り、19は沈線の懸垂文がみられ
る。13・21・23は斜条線と沈線
を主体にした文様を持つ胴部破
片で、13は渦巻文が、21は2条
の横走隆帯をはさんで3条の列
点文が、23は綾杉状文が施され
ている。16は無頸斐の口縁部破
片で、口唇部は無文である。隆
線の貼り付けによる渦巻文と横
走隆帯が連結し、隆帯の両側に
はヘラ先を交互に押捺してでき
た蛇行隆帯がみられる。胴部下
半部には条線と渦巻文が施され
るものであろう。



第32図 第7号住居址床面出土石器(上)



第33図 第7号住居址床面出土石器(下)

14は本住居址の東域、第6号住居址寄りの床面より出土したもので、頸部上端と底部を欠く
深鉢形土器である。現器高27.2cm、胴径21.4cm、推定底径9.8cmを測る。色調は淡褐色を呈し、
胎土には長石・石英を多く含む。文様は頸部下端に渦巻文と波状文を沈線でひき、逆U字状文
を同じく沈線で底部上端まで垂下させ、単節の斜繩文で間をうめている。

15は炉址の南付近床面より発見されたもので、器形は胴部の張る深鉢形土器であり、頭部の上端と底部を欠く。色調は赤褐色を呈し、胎土中には長石粒が多い。2次的な焼成を受けたためか、土器表面の剥落著しく、ヘラ先による横走沈線と渦巻、それとわずかに斜縞文が確認できるのみである。胴径は16.8cmを測る。

総じて曾利I式末～II式に比定され、関東編年では加曾利E I式末からII式に比定されよう。

石器は打製石斧が主で10点、横刃形石器1点、棒状磨り石1点、石礫3点、リタッチ剝片1点である。

打製石斧のうち、短冊形のものは第31図1～3、7～10である。特に2は刃部の一部を磨っており、半磨製とも言えるが、全体的な観察から打製石斧の範疇であろう。石質は黄岩他はすべて硬砂岩である。

横刃形石器は11で硬砂岩製である。

12は片麻岩製の棒状磨り石である。13は凝灰岩製の凹石である。14～16は石礫で全体的に調整はそれほど良くない。すべて黒曜石である。17はリタッチのある黒曜石の剝片である。

(小原 晃一)

8. 第8号住居址

(第34～36図、図版3、4、8)

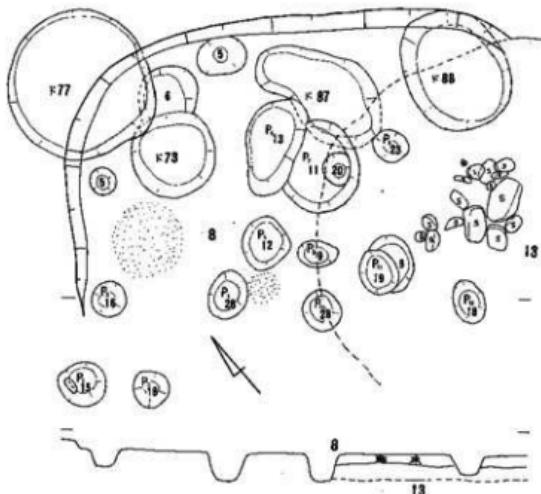
造構

本住居址は第13号住居址の北西にあり、東半分は第13号住居址に貼り床している。

壁は西壁中央から北壁にかけてのみみられ、南側はない。また第13号住居址との複合部では上部からは壁は確認できず、貼り床とカマドの存在から住居址の区画がわかったものである。

カマドの位置からして、住居址の大きさは、東西4.5m、南北4.1mを測り、隅丸長方形を呈すと思われる。

北西コーナーに土塙77を、北東コーナーに土塙88がある。切り合関係は不明である。



第34図 第8号住居址実測図 (S-north)

壁はゆるい立ち上がりをみせ、
壁高は7~10cmと低いものである。
中央よりやや東側は貼り床となっ
ていて、それ以外のロームの床面
は固くタタキしめられて良好であ
る。貼り床は8~11cmほど認めら
れ、ロームブロックを混ぜて固く
たたいている。

多くのピットがみられるが、主
柱穴と決定できるものはない。Ps
P4・P10・P12が直線的に並ぶが、や
や内側すぎるくらいがある。

内部には土塗73・87がある。住
居址との切り合い関係は不明である。

カマドは石心でつくられ、東壁にあり第13号住居址の覆土の上にある。小じんまりとしたも
のである。両袖は主となる石を2個ずつえ、北袖はロームブロックで南袖は暗褐色で固めて
いる。

基底部はほぼ円形をなし、舟底形を呈し15cmほど掘りくぼめられている。支石はみられない。
カマドの奥に大きな平らな石をおき燃焼部と煙道部を分けている。

カマド内の層位は以下に示すとおりである。

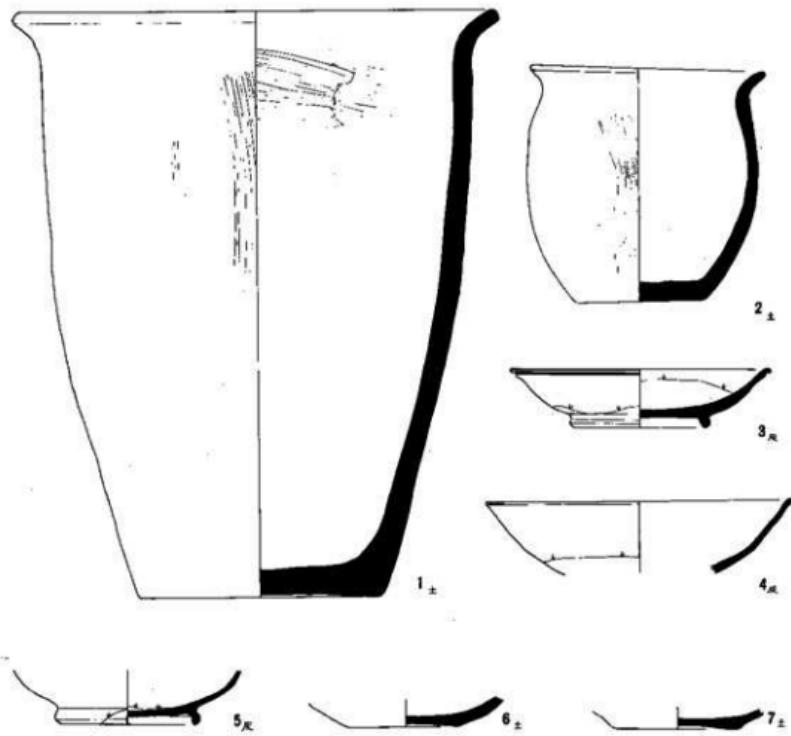
I層—暗褐色土（炭化物・ローム粒含む）、II層—焼土（炭化物含む）、III層—ロームブロッ
ク、IV層—焼土・灰の混合土層。

なお、P4・P5の南東と西壁ぎわ中央付近に焼土の堆積がみられた。

遺物（第36図）

土器は多い方である。土師器が主体を占め、灰釉陶器と続き、須恵器は壊の破片が一点ある
のみである。土師器では甕が多く、他には壺がある。灰釉は図示したものの外に甕の破片がみ
られる。

1・2は土師器の甕でともにほぼ完形に近いものである。1は厚手づくりの大形のものである。
上げ底の底部から明瞭な立ち上がりをみせる胴部はほぼ直線的に外傾し、央部にてほぼ直
に向きをかえ、短かい口縁は強く張って最大径をもつ。器厚は口縁に行くに従いやや減じて
いる。胴部外面には縱方向の内面にはほぼ横方向のハケ目が部分的にみられる。胎土には長石
砂粒を含み全体に黒褐色に焼かれている。2は小形のものである。明瞭な立ち上がりを示す胴
部は内渦しながら強く張って央部にて内に角度を向けて短かい口縁は強く外反する。器厚は胴
央部と口縁にて薄くなっている。口唇は外傾する。口頸部内外面は横なで、胴部内面はナデ仕
上げ外面は縱ないしやや斜めのハケ目がみられる。大粒な石英をわずかと細かい砂をかなり含
んで赤褐色に焼かれている。



第36図 第8号住居址出土土器(古)

3～5は灰釉の环で、3・5は高台付きである。4も多分高台を持つと思われる。高台は付け高台である。3は体部を5分の2ほど欠くもの4・5はともに3分の1ほどのは破片による図上復元である。高台はともに外形するものである。体部は内湾ぎみに強く外に張ったのちやや角度を内に向けて口縁をつくるもので、3・4からすると口唇は外反する。また高台の端部も外傾するのが特徴である。釉は全面にかかるものはない。4は外側のみである。3は口唇下に1条沈線が施されている。3は黄白色の胎土で、釉は白色である。4は黒灰色の胎土で釉は淡黄色、一部淡緑色をなす。5は灰白色の胎土釉は3同様白色である。

6・7は土師器の环の底部破片である。ともに右回りのロクロを用い、回転糸切り痕がみられる。ともに上げ底である。わずかの砂粒を含み6は黄褐色、7は黄白色を呈す。

灰釉陶器からして平安時代後期のものであろう。

(気賀沢 進)

9. 第9号住居址（第37～40図、図版4）

遺構（第37・38図）

本住居址は調査区域の東南隅の傾斜地から発見されたが、遺構部分の4分の1までしか調査ができなかった。また土手が床面より2.5mの高さに及び開田時の痕跡が、東・南の層序にみられた。

プランは北と南の壁の状態よりおおよそ1辺6m前後の隅丸方形を呈するものと推測できる。床面は堅ちで、全体的にタタキ床であった。

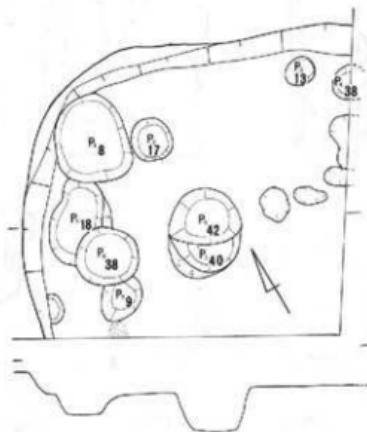
壁の高さは北壁で52cm、西壁で31cmである。

柱穴はP6が考えられるが、P4・P8も深いものであるが判別はつかない。

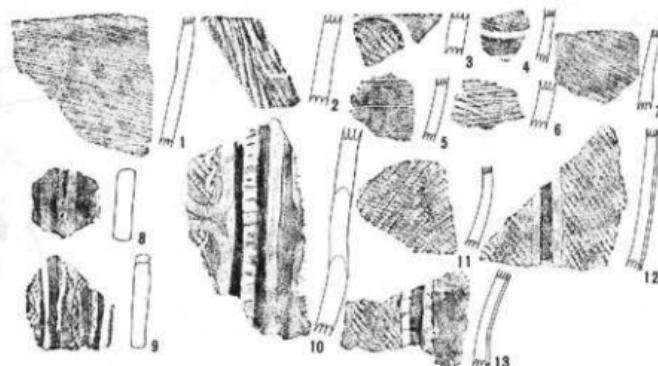
西壁寄りの床面に焼土が3～5cm堆積していたが炉址とは認められなかった。

遺物（第38～40図）

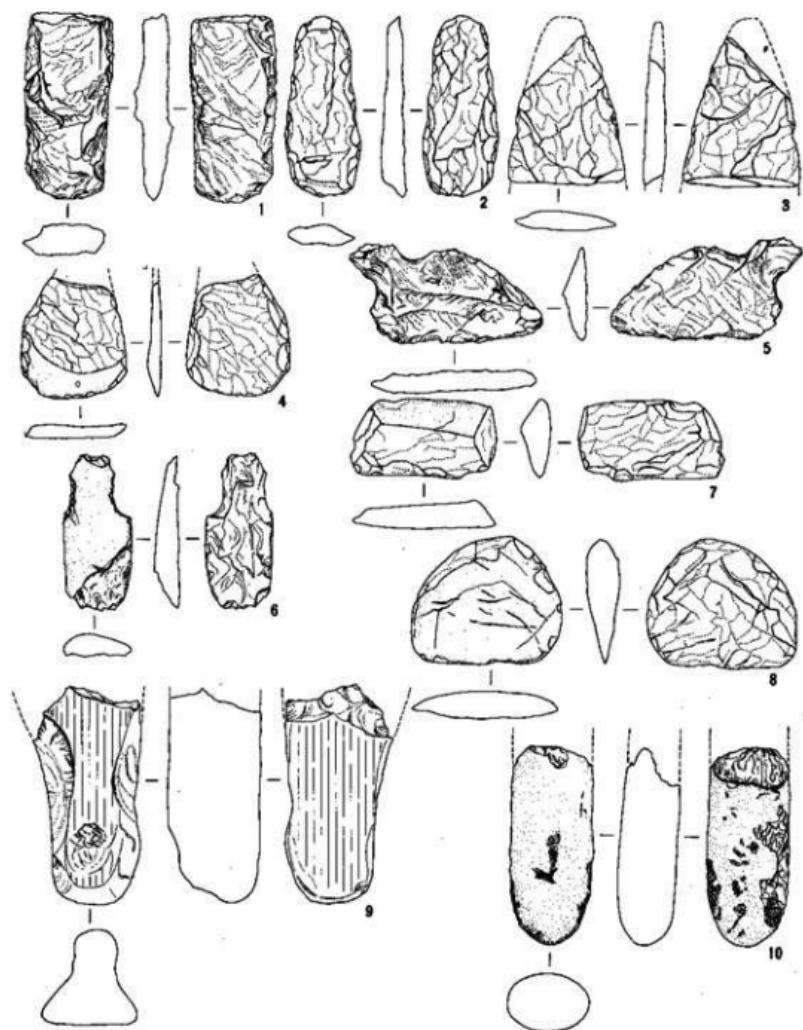
本住居址の北・西侧に平安時代以降の火葬墓が黒褐色土中より発見され、それに伴う須恵器



第37図 第9号住居址実測図 (S - 66)



第38図 第9号住居址出土土器・土製品 (1～7は覆土、8～13は床面)



第39図 第9号住居址覆土出土石器(上)

の流入が覆土上層にみられた。

出土土器で、器形を復元できるものではなく、胴部破片が大半を占めている。また縄文後期・晩期から弥生時代初頭にかけての土器が覆土より検出された。

1～7は覆土より検出された土器であり、1～2、5～7は東海地方の五貫森式土器に併行するもので、細かい長石・石英・雲母粒を含み、赤褐色ないし茶褐色を呈する。文様は、貝殻条痕を縱・横・斜めに施すもの(1・2・6・7)と柔線・平行沈線を施すもの(5)がある。

市内では昭和53年に調査された赤穂小町屋にある荒神沢遺跡から縄文晩期から弥生初頭の遺構及び遺物が多量に発見されている。

3・4は地文にていねいにヘラ磨きした後に、沈線で区画し、単節縄文をその中に施している。縄文の磨り消しはみられないが、時期的には縄文時代後期堀ノ内式系に含まれると考えられる。

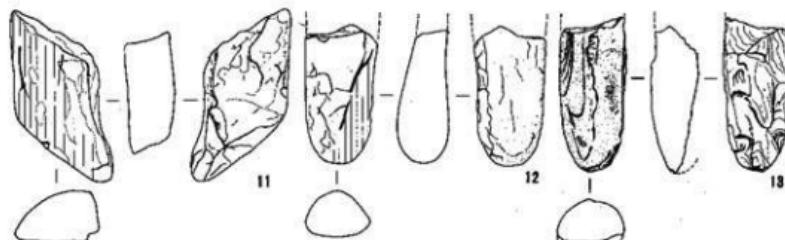
8・9は胴部破片を使用した土製円板である。8は直径3.8cm、9は5.0cmであり、側面は特に磨ってはなく、たたき割りのものとして観察できる。8には縱の沈線懸垂文と結節縄文、9には隆線による懸垂文と結節縄文がみられる。

10はやや大型の深鉢形土器の胴部破片で、縱の2条の隆帶懸垂文とその間に施されたヘラ先による刺突文を中心に脩円文の区間に回転縄文がつけられている。11は内面をていねいにヘラ磨きをしていて、外面には燃条文が施されている。表面にはすすぐが付着する。12・13はともに縱の隆帶懸垂文と無筋の縄文が施されており、13は懸垂文にそって刺突文がつけられている。ともに表面にすすぐが付着する。

床面出土土器は総じて関東の加曾利E II式の土器に比定される。

石器はすべて覆土出土のもので打製石斧4点、石匙2点、横刃形石器2点、敲打器2点、磨り石3点である。

第39図1・2は短骨形の打製石斧で1が砂岩ホーンフェルス、2が硬砂岩製である。3・4は撥形の打製石斧でともに硬砂岩製である。



第40図 第9号住居址覆土出土石器(古)

5・6は石匙で5はていねいな調整をしたもので、6はくびれ部のみていねいな調整をしている。5が硬砂岩、6は頁岩製である。

7・8は横刃形石器で7は刃部を調整してあるが、8は剝片使用のものである。ともに硬砂岩製である。

9・11・12は磨り石で9はつまみ部をもうけている。11・12は自然面をやや磨った状態でありすべて硬砂岩製である。

10・13は敲打器で10は敲打により先端部、側面の欠損が著しい。10は頁岩、13は片麻岩製である。

(小原晃一)

10. 第10号住居址（第41・42図、図版3）

遺構（第41図）

本住居址は、第6号住居址の床レベルより下に重複して発見されたものである。南壁は第7号住居址を切っている。

プランは南北6.6m、東西6.2m位のやや楕円形を呈するものと思われる。壁は北側半分に確認され床面との差は18cmを測る。南側半分は確認できなかったが第6号住居址にこわされたものか、または自然傾斜地のためもともとなかったものかは判断しにくいが後者と思われる。

周溝は北壁に沿って半方位確認され、深さは4~6cmで西壁に向かうほどやや低くなっている。

柱穴はP₃・P₇・P₈・P₁₀が想定されるが、東部分に位置すべき、2本の柱穴は見あたらない。第6号住居址の柱穴と重複しているものと考えられる。

炉は北壁寄りに設けられており、1.5×1.3mの大きさで中心部が床面より40cmの深さである。焼土は5cm前後堆積していた。炉石は小さなものの2個のみであったが、壁には炉石を抜き取った痕跡が確認された。焼土が土塙58・71に確認されたが、炉址との直接な関係はつかめなかつた。

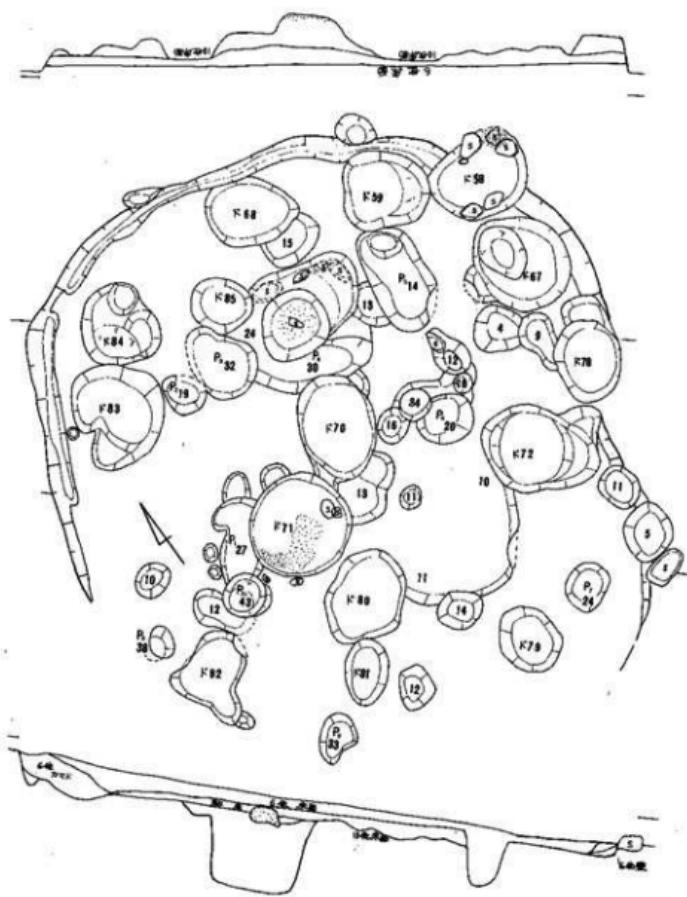
床は堅ちであったが、一般的に多くの重複する下位の住居址にみられるように凹凸がはげしく平坦な部分は少なかった。

また住居址の形にそって、内部に58・59・67・68・70~72・78~85の土塙15基が発見された。このことは空間一住居址内での土塙の性格を位置付けることかもしれない。

遺物（第42図）

出土遺物は数える程度しか発見されなかった。第42図はその代表的なものである。

1は口縁部破片で隆帯の貼り付けにより、口縁部を肥厚させ渦巻文を呈するであろう区画の中に斜繩文を施すものである。2・3は斜繩文の地にヘラ先で蛇行沈線をつけたものである。3は表面にすすぐが付着している。4は単節の斜繩文をつけたもので、側面の状態より土製図版と考えられる。磨ってはなくたたき割りで作ったものであろう。大きさは4.2×3.4cm、厚さ0.9cmである。5は台付き土器の台の部分の破片である。同様なものが、第2号住居址から出土している。2条の隆帯を貼り付け、その間にヘラ先で斜めの刻み目をつけている。孔をもつら



第41図 第10号住居址実測図 (S-d6)

しく、縁の部分がみられる。

6は黒曜石のリタッチのある剝片で、交互に調製しているところをみると、皮はぎ等に使用したものかもしれない。

以上これだけの遺物より時期的考察を加えるのは危険かとも思われるが、大体繩文中期後葉から末葉にかけての曾利Ⅱ式に比定されよう。



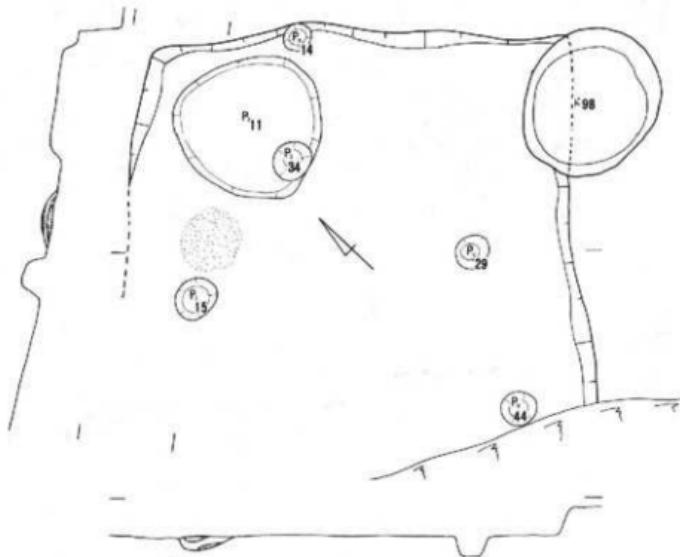
第42図 第10号住居址床面出土遺物 (+)

(小原 晃一)

11. 第11号住居址（第44・45図）

遺構（第43図）

本住居址は第12・14号住居址の北東にあり、南西部分は削られている。また北西壁も一部しかなく、プラン・大きさは定かではない。確認できるところで幅4.5~4.7mを測る。



第43図 第11号住居址実測図 (S - d₀)

壁の立ち上がりはやや急で、壁高は25~40cmを測り南に行くに従い低くなっている。床面は若干のタタキがみられるが、全体に軟弱である。

東コーナーで土塙98と切り合うが関係は不明である。

主柱穴はP₃・P₆がそれと思われるが北東・南西側には検出されていない。

カマドではなく、北西壁より60cmほど内に入ったところに床面を掘り凹めて焼土が堆積している。間に炭化物を含んだ暗褐色土をはさんで焼土がある。カマドの代用であろうか。

住居址の覆土上には開田時の埋土が厚くみられ、縄文中期の土器に混じって打製石斧を中心とした石器が多くみられ、開田時の破壊を物語っている。

遺物（第44図）

土器は焼土を中心にみられ、土師器と須恵器がある。主体は土師器で甕が多い。須恵器は図示したものの外には、甕と壺蓋の破片がある。

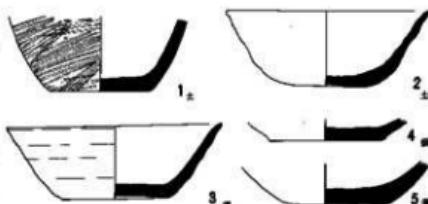
1は土師器の小形甕である。大きな長石を含み、赤褐色に焼かれている。外面には細いカキ目が施され、内面はナデ仕上げされる。

2~5はともに壺で、2は土師器、3~5は須恵器である。2は胎土ち密で外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈している。体部の立ち上がりははっきりせずほぼ直線的に伸びて明瞭なロクロ痕を残し、口唇はわずか外反する。回転糸切りであるが回転方向ははっきりしない。

3は2と同様な器形を持ち左回りの回転のロクロを利用し糸切り底である。砂を含み黒灰色を含む。4・5は底部破片で5は回転糸切りである。ロクロの回転は4は不明、5は右回りである。ともに砂粒をわずかに含んで、4は灰色、5は灰白色に焼かれている。

これらは奈良時代に属するとと思われる。

（氣賀沢 進）



第44図 第11号住居址出土土器（+）

12. 第12号住居址（第45・46図）

遺構（第45図）

本住居址は調査区域の西端寄りに位置し、東に第13・15号住居址が、西に第14号住居址がある。傾斜地の下端にあり、2m以上もある土手の下に発見されたため、南側は調査できなかつた。さらに東壁については、第16号住居址が黒褐色土層に構築され、本住居址の覆土を切るため、プランの確認はできなかつた。

プランはおよそ隅丸方形を呈すと推測できるが定かではない。北壁・西壁の一部が確認でき、壁高は北壁で40cm、西壁で36cmを測る。

柱穴らしきものは2本（P₁・P₂）が確認され、深さは32cm・29cmである。

床は堅ちで平らであったが、やや南に向かい傾斜するものと思われる。

遺物（第46図）

住居址の調査範囲から言って当然遺物の出土は少なく、土器のみで石器は出土していない。

1・2・5は同形態の土器の破片であり、1は山形口縁を持つ口縁部破片で、隆線の貼り付けにより口縁部を肥厚させヘラ状の施文具で渦巻文を形づくり、その間には単節の斜繩文を施し、やや繩文を磨り消している。

2・5は器面に単節の繩文を施したのち、2では一定の幅で縦の磨り消しを行い、5では沈線の懸垂文を引き、やはり磨り消す状態をみせている。3・4は隆線による渦巻文と条線で構成される土器の胸部破片である。6も3・4同様の土器片であると考えられるが、最初に器面に斜条線をつけ、後に隆線を貼り付けたものである。7は底部片であり、粗雑な結節回転繩文を縦に転がし、沈線文をついている。

総じて曾利II式の土器に比定されよう。

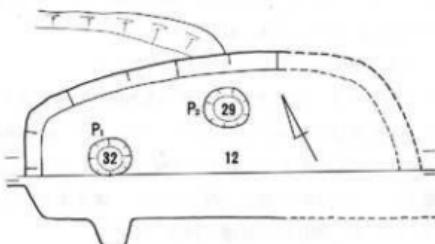
(小原 晃一)

13. 第13号住居址（第47～51図、図版4、9）

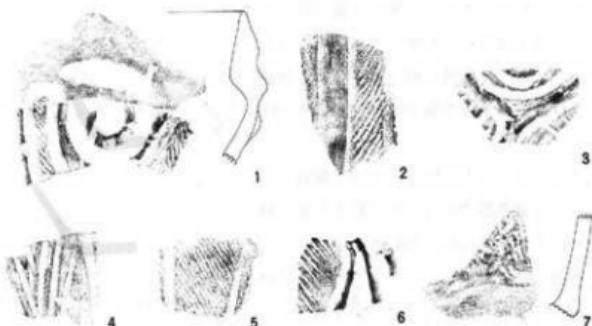
遺構（第47、48図、図版4）

本住居址は、調査区域のほぼ中央に発見され、東側の第7号住居址を切り、西側の第8号住居址に貼床されている。

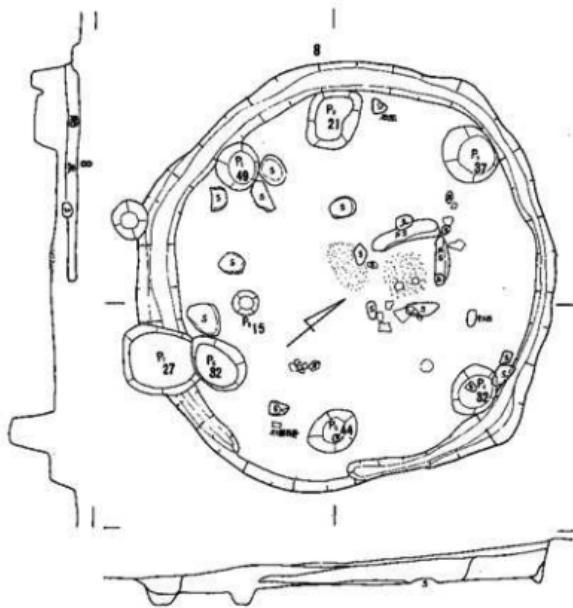
プランは直径4.0mの円形を呈する。壁は北側で高く40cmを測り、南壁では6～14cmを測る。周溝は南壁の一部で切れているが、他かは壁にそって、巾20～30cm、深さ15～25cm前後を測る。



第45図 第12号住居址実測図（S-12）



第46図 第12号住居址床面出土土器（上）



第47図 第13号住居址実測図 (S = 8)

炉底に暗褐色土（炭化物、焼土を含む）が堆積している状態は、もともと原形を保っているのか、または二次的な利用をした形跡なのか問題があったが、炉底上位に焼土の堆積が確認されなかったことと、炉底自体が焼土ブロック化していなかったことより原形のままの遺存状態として判断した。

床面南西域に多くの盤状の自然石が置かれ、特にP1の周辺は、柱穴を囲むような状態を示していた。なお、北東P4柱穴の周辺も同様である。

埋蔵等の施設は検出されなかった。

遺物（第49～51図、図版 9）

出土遺物は土器片が主体で床面および床面上からその多くが出土した。石器は打製石斧が主で、磨り石（敲打してある）と磨製石斧と黒曜石の剝片が少し出土した状態である。

土器（第49、50図、図版 9）

床面は平らで、堅致である。

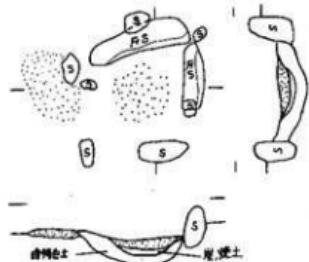
柱穴はP1からP6までの6本で、P2を除く5本は30～50cmの深さである。

炉址は床面中央よりやや北側にあり、東、西、北の三面に大きな長い炉石を設け、南側はたきだし口のように炉底に向かって傾斜している。また南側にはかき出したかのように焼土が5cm前後堆積していた。

炉内の堆積状態は第48図のように、炉底部には暗褐色土が堆積しその上層に炭・焼土そして焼土の順に堆積している。

第8図に示した第2号住居址の炉址と同じような形態を示している。

出土土器は深鉢形土器片が主で、變形を呈すると思われるものもある。



第48図

第13号住居址炉址実測図(S=10) とその中に斜条線が見られる。口唇部には横走沈線とヘラ先による刻み目がつけられている。

6は内湾する口縁部をもち、S字状の突起とも言える貼り付けをし、口縁にそって、蛇行隆線と隆帶を貼り付けている。頭部にかけては斜条線を施している。

7は外傾する口縁部に粗雑に隆線を貼り付け、その両脇に渦巻沈線をついている。

8は口縁部が内傾する無頭甌と思われる。図面ではやや内傾しそうな感があるが、だいたいこの傾きに近い。7同様、口縁部には渦巻線文をつけ、下位に隆線を貼り付け区画し、渦巻文の貼り付けと斜条線を施している。

9は極端に内湾した口縁部で、浅鉢を呈すると思われる。連続爪形文で渦巻文を作り出している。

10は鼻状の突起部で、ヘラ先によって沈線と刻み目を重複して施している。

11～15は隆線や隆帶の貼り付けを中心として、縦横の条線や綾杉文を施すものである。14は特に斜めの蛇行沈線を条線の上につけている。

16、17はともに頭部片で、16は横走隆帶で区画し列点文を隆帶の上につけその上、下位に斜繩文を施す。17は口縁部が無文を呈すると考えられ、頭部の横走隆帶には斜めの刻み目をつけて頭部にかけて粗い斜繩文と蛇行沈線文を施している。

18、19、22は斜繩文の上に懸垂する沈線や蛇行線や蛇行沈線文をつけるものである。

20は結節回転繩文を斜めにつけ、ややヘラ削りによりその周開を磨り消し、蛇行沈線文をつけている。

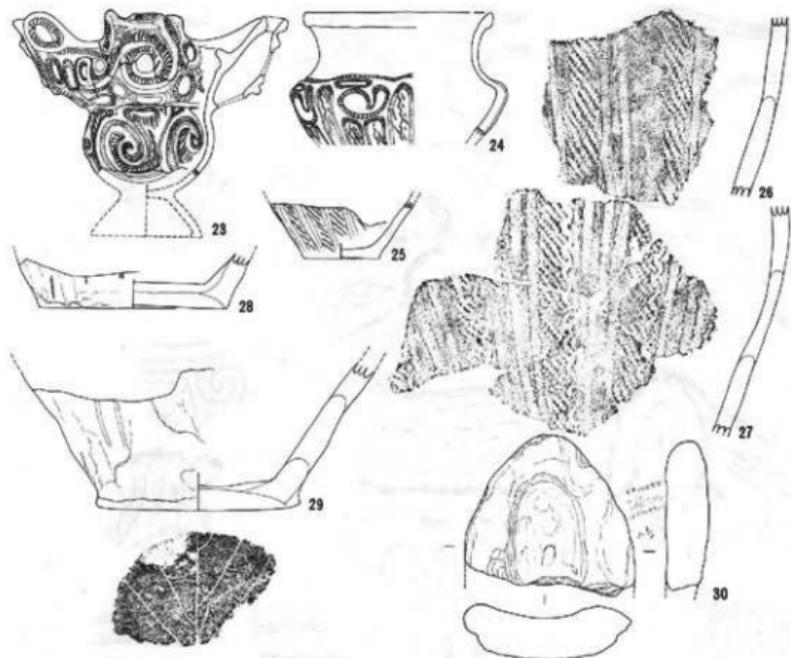
21は幅広い沈線を指で引くことにより隆線をうかび上がらせ、その両脇に斜繩文をつけている。

25～27は斜繩文や結節回転繩文を施した上に、その繩文を磨り消す形で、縦の幅広の沈線文をつけている。25は底部片で、底径8cmを測る。

28、29はともに底部片で、縦の沈線の懸垂文の末端が見られる。28は底径10cm、29は11cmを測る。29の底部には木葉痕がつけられており、底部の外郭はやや丸味を帯び、くびれをもつものである。



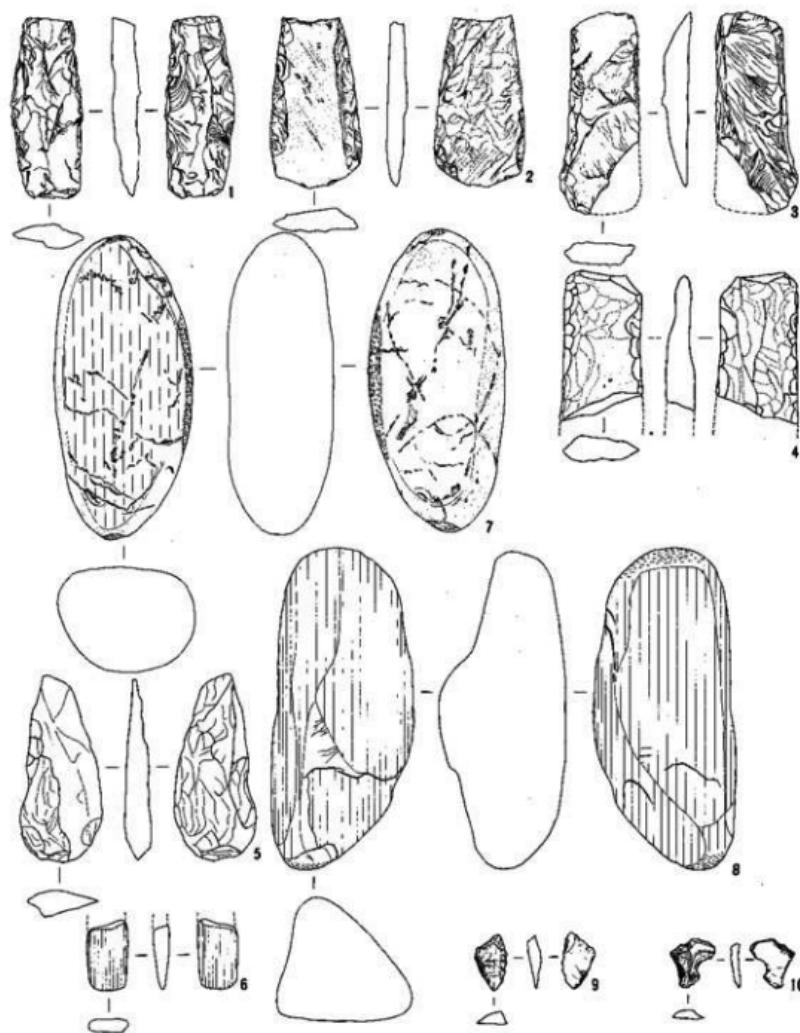
第49図 第13号住居址床面出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



第50図 第13号住居址床面出土土器、石器 (23-25, 30は \pm , 他は \pm)

23は台付と考えられる土器で立体把手を4単位もつものである。色調は暗褐色を呈し、胎土にはこまかい長石、石英粒を多く含む。残存部位は口縁部把手2単位半と胴部全体であった。口縁部は、舌状に突き出る貼り付けをおこない、口径は14cmを測るが、やや橢円形を呈する。口縁部に装飾された把手は、内側が空洞であり、数多くの孔があけられている。全体的に連結する渦巻状を呈し、ヘラ先で刻み目がつけられている。胴径は口径と同じ14cmを測る。胴部の文様は頸部と連なり、さらにそれぞれが胴下半部で連結すると考えられる渦巻文を貼り付け、その周りをヘラ先でなで、斜めの条線を粗く施している。台付き土器として図面には表わしたが胴下半部のまとまりが急であり球状を呈するものと判断したからである。近似例は少ないが、同市富士山遺跡第2号住居址出土のものに類似する。

24は胴部がくびれた壺形を呈する土器である。口径19.8cm、胴径23.2cmを測り、色調は黒褐色を呈し、胎土には長石が多い。文様は口縁部が無文帶をなし、頸部下半にはヘラ先で横の沈線文区画をし、縦・横の橢円文とくびれたハート形をつけ刻み目をつけている。橢円文の間に結節繩文を縱に転がしている。総じて曾利立式一加曾利EⅡ式に比定されうる。



第51図 第13号住居址床面出土石器 (S = 1)

石器（第50, 51図）

1～4, 5は打製石斧で短骨形を呈する。1, 3は粘板岩、2は砂岩ホーンフェルス、4は硬砂岩、5は片麻岩である。

6は磨製石斧で定角形である。頭部を欠く。滑石製で、擦切技法によって作られたものでその痕跡が側面に残っている。

7, 8はともに磨り石であるが、側面および両端を敲打している。7は硬砂岩、8は片麻岩製である。

9, 10は黒曜石製の搔器と思われる。

14. 第14号住居址（第52, 53図、図版14）

遺構（第52, 53図）

調査区域の南西端の台地の傾斜地より発見され、土手下2.5mの深さに位置していたため、充分な調査が出来なかった。

北壁のみ確認でき、立ち上がりは30cmを測る。床面および柱穴等の精査はできなかった。

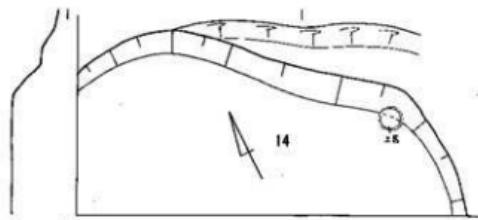
遺物（第53, 54図）

土器

出土遺物は深鉢形土器片が主体で復元できうるものはなかった。なお、第52図中の「土器」は、第53図中の1, 6が一緒になって発見されたが、それぞれ破片であった。

1は深鉢形というよりは菱形を呈すると思われる。口縁部はやや外反し、無文帶である。頸部下半に連結する楕円文の貼り付け、さらにそれにそって列点文をつけ、楕円文の間には、繩文を施している。繩文は結節回転繩文を呈する可能性もある。

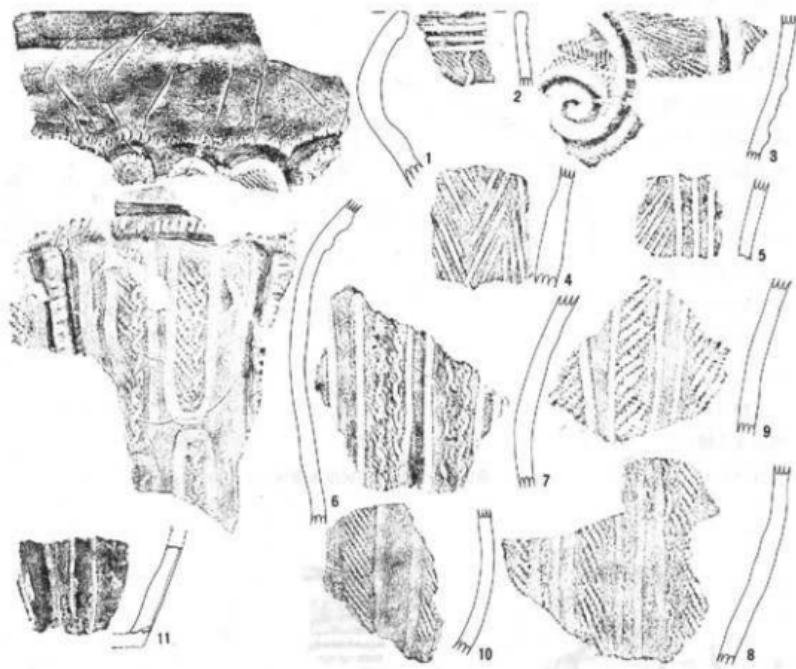
2は小型の甌を呈すると思われ、口縁部にそって3条の横走沈線をつけ、下位には斜繩文と蛇行沈線文を施している。



第52図 第14号住居址実測図 (S = 40)

3は深鉢形土器の頭部片と考えられ、隆線によって渦巻文を表わしその満巻文にそって繩文をころがしている。内面は割りといねいなヘラ削りを施している。

4, 5は条線文や沈線の懸垂文がみられ、4は綫杉文を呈している。



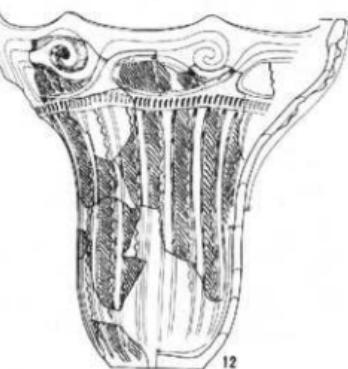
第53図 第14号住居址床面出土土器 (S = +)

6～8は深鉢形土器の頸部 (6, 7) および胴部
片である。6は頸部に縦帯を貼り付け、列点文
を施している。胴下半部は縦の懸垂文を貼り付け
その間隙に列点文をつけ、さらに連結するH字の
微隆起をつくり出し結節回転繩文を施し幅広のヘ
ラ先で再区画している。

9, 10は地に斜繩文を施して、9は深い沈線で
区画しながら磨り消し、10は幅広い沈線で磨り消
している。

11は底部の上端で、やや盛り上がった懸垂文と
磨り消された結節回転繩文が見られる。

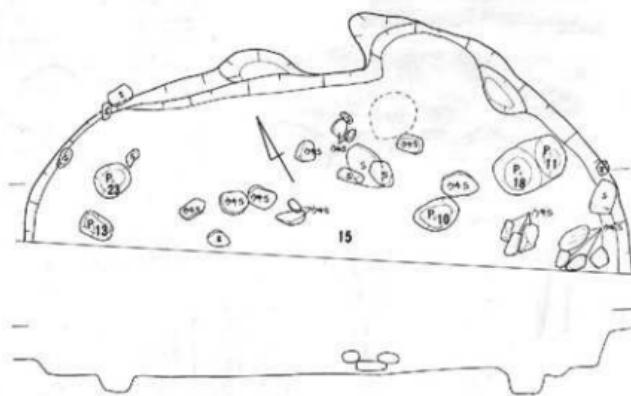
12は(第54図)本住居址の北東壁に正位の状態
であった深鉢形土器である。口径37.5cm, 脇径19



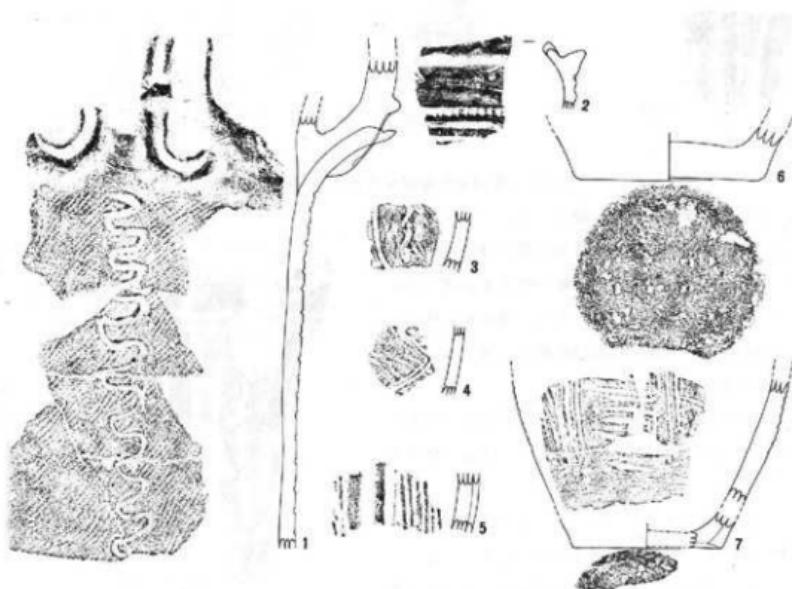
第54図
第14号住居址床面出土土器 (S = +)

.4cm, 底径10cm
を測る。色調は
淡褐色を呈し、
胎土には砂粒が
多く含まれ、焼
成は良好である。
外面胴上半から
口縁部までおす
が付着し、内面
は胴下半から底
部にかけておこ
げが付着してい
る。

文様は頸部の
列点文を境にし
て分けられ、口



第55図 第15号住居址実測図 (S = $\frac{1}{6}$)



第56図 第15号住居址床面出土土器 (S = $\frac{1}{6}$)

縁部は山形口縁をなし渦巻文が、隆起縁帶として6単位施されている。その間隙には結節回転縄文が施されている。頸部下半から底部にかけては結節回転縄文を施した上に、沈線で懸垂文が引かれ、縄文を磨り消している。縄文と2条の懸垂文を一对として16単位くらい施されると考えられる。

出土土器は総じて曾利II式一加曾利E II式に比定されうる。

15 第15号住居址（第55、56図、図版3）

遺構（第55図、図版3）

本住居址は第13号住居址の南南西1.5mに発見された。第12、14号住居址同様に土手のすぐ下から発見され土手の除去が困難であったため住居プランのおおよそ3分の1弱しか調査できなかった。

北壁の状態よりプランはやや大きめの隅丸方形を呈するかとも推測できうる。壁は北東で40cm前後、北西で20cm前後を測る。

床はやや軟弱であり、北壁は凹凸が著しい。床面より焼土・灰等は検出できなかった。柱穴と考えられるものは明確に判別できなかったがP₂、P₄が相当するかもしれない。

遺物（第56図）

出土遺物は総て土器片で深鉢形土器が多い。

1は文形の耳状突起もつ円筒形土器で、耳状突起はT字状に口縁部まで発達させている。口唇部は二重口縁をなす。文様は斜縄文を地としヘラ先で太い蛇行沈線と細いジグザグ文を平行して施す。

2は波状口縁をもち突起を有するものかもしれない。口縁直下に舌状の貼り付けを行ない、3本の沈線と刻み目をついている。

3は沈線で楕円状に区画しその間に結節縄文を縦に転がしている。

4は斜縄文を地とし平行沈線でギグザグ文を施している。5は懸垂文と条線で構成される。

6、7は底部片で、ともに底部に綱代の圧痕がみられる。

総じて曾利II式が加曾利E II式に比定されうる。

16 第16号住居址（第3図）

遺構・遺物

本住居址は第12号住居址の覆土上層の黒褐色土中に設けられていたが、調査を充分にできなかつた。掘り込みは12号住居址上ではっきりと確認できた。プランは方形を呈すると思われる。未調査のため出土遺物は検出できなかつたし周辺からも出土はしなかつた。時代的には判別しがたい。

本遺跡からは107基に及ぶ土塙が発見された。土塙の空間的位置から分類すると、住居址内、住居址周辺、単独土塙に分けられ、住居址内では第2号住・第4号住・第7号住・第10号住、第15号住（以上、縄文時代）、第5号住・第8号住（以上、平安時代）にある。住居址周辺では、第2号住を核としてI～V群、第13号住を核としてVI・VII群、単独土塙は、西城でI～IVに分けられる。さらに、平安期の単独では土塙40が該当しVIとして、第1号住内の土塙18をVとして分けた。

分析基準

1. 土塙番号は、検出順序に従って付加したものである。
2. 群は一定の集合とみなされるものを対象として、I～VII群、単独はI～VIに分けた。
3. 平面形は、円形・椭円形・長円形・隅丸方形・長方形・卵形・不整形に分類し、円形は長径と短径の差が10cm以下のもの、椭円形は10cmを越え20cm以内のものとした。そのほかの大きいものや小さいものはこの基準によらない。なお、平面形は開口部、床面形は床部の形である。
4. 断面形は、すり鉢状・クライ状・皿状・孤状に分けた。
5. 壁は外傾するもの、直立するものに分け、直立するものは「直壁」として扱った。
6. 床は丸底、平底、凹凸、斜底に分けた。
7. 口径・底径は両方ともに、ほぼ直交する最大値で示し、深さは土塙の開口部より床面までの計測値である。口径・底径・深さは図面から再計測したものである。
8. 土塙の中の小さな穴は「小穴」として示した。
9. 配石を伴うものは、その検出場所より「開口部」「覆土中」「床面」とした。
10. 土塙と土塙、土塙と住居址等の切合関係は「一>一」（「一が一を切る」）で示した。
11. 出土遺物は土器石器とともに図版番号で載せ、ないものは「比定型式名」を載せた。
12. 堆積状態の分類であるが、I層—褐色土（ローム粒・炭化物含む）、I'層—灰褐色土（炭化物含む）、II層—暗黃褐色土（ローム粒・ロームブロック・炭化物含む）、III層—暗褐色土（ローム粒・炭化物含む）、III'層—暗褐色土（ロームブロック・炭化物含む）、III''層—暗褐色土（ローム粒・炭化物・焼土含む）、IV層—黒褐色土（炭化物含む）、IV'層—黒褐色土（ローム粒・炭化物含む）、IV''層—黒褐色土（ローム粒・炭化物・焼土含む）、V層—黑色土（炭化物含む）、V'層—黑色土（ローム粒含む）、V''層—黑色土（ローム粒・炭化物含む）、VI'層—ロームブロック、VI''層—ロームふらん土、VII層—焼土、VII'層—焼土とローム粒の混土と分けた。

1. 土塁一覧表

住居址内より検出された土塁（縄文期の住居址内）

辨別	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	底面	口 径	底 径	深さ	小穴	配 石	遺 物	総 合	地 標
56	16	2住南壁	円 形	タライ状	外傾	円 形	平底	82×75	66×61	26				16>2住	D-1
壁・床ともに掘り込みはやや粗い。2住の南壁を後から掘り込んだものである。															
*	30	2住南西壁	円 形	すり跡状	外傾	円 形	平底	88×81	58×50	46	覆土中				
2住南面の柱穴を貼り床している。壁に段が設けられており柱穴の移動を忌ませる。															
*	31	2住南壁	円 形	すり跡状	外傾	円 形	平底	94×92	74×76	82					
土塁32と隣り合せであり、柱穴の移動により設けられたものである。貼り床が、上塁31・32を12cm前後、覆っている。															
*	32	2住南東壁	楕円形	円筒状	直壁	円 形	平底	80×62	58×49	36			82-13, 14		
31同様に貼り床がされている。															
*	33	2住北壁	楕円形	すり跡状	直壁	円 形	平底	72×65	58×50	34					
2住北東の柱穴であり、貼り床はされていない。															
*	34	2住北南壁	楕円形	すり跡状	外傾	円 形	平底	102×90	74×72	60			82-34		
南側は2住が址と接する。貼り床が13cm前後されている。															
*	35	2住北壁	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	110×96	80×76	31	1	木 面			
床面中央に28×24の小穴をもつ。床面に2個の自然石が置かれていた。															
*	4	4 住 内	円 形	すり跡状	外傾	楕円形	平底	98×88	62×54	35					
北西に(80)×68の張り出しピットをもつ。															
*	9	4 住 内	円 形	円筒状	直壁	円 形	丸底	108×108	84×76	32			82-2, 82-5~7		D-4
やや北西に向かって土塁が傾いている。															
*	45	7住床北	円 形	円筒状	直壁	円 形	平底	56×53	46×42	68	覆土中	中用未	82-9		D-3
大きな盤状の自然石が5個と小さい石が4個、計9個が覆土中に存していた。また周辺にも自然石が置かれていた。															
*	74	7住床中央	円 形	タライ状	外傾	円 形	平底	130×127	116×114	55	覆土中	82-11, 12, 82-1~4	78×86	A-1	
貼り床が8cm前後され、覆土中床面寄りに自然石が3個存していた。															
*	75	7住床中央	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	122×109	102×72	56			82-5, 6		75-103
74同様、貼り床が10cm前後なされている。															
*	86	7住床南			外傾		平底			35					C-5
土塁74に切れられ形状はつかめない。															
*	100	7 住 北	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	60×46	38×39	16	開口部				
北壁に接し開口部に自然石が置かれていた。															
*	108	7住床南	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	84×(80)	54×(46)	24					

		土塁75に切られ約半分くらいしか残存しないが、だいたいの形はつかめる。貼り床が10cm前後なされている。											
56	58	10住北壁	楕円形	直 状	外傾	楕円形	平底	115X 95	85X 64	14	床 面		C-1
覆土上部に配石と焼土が存在していたが、直接本土塁と関係するとは考えられない。													
*	59	10住北壁	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	丸底	85X 80	75X 60	35		中期末(普利系)	C-1
丸底を呈し東側はなだらかである。床面やや軟弱である。													
*	67	10住北壁	楕円形	直 状	外傾	楕円形	凸凹	113X 95	85X 72	24	1	中期末(加曾利系)	E-1
北壁に58×44cm、深さ5cmの小穴をもつ。床はやや軟弱である。													
*	68	10住北壁	楕円形	ナリ株状	外傾	楕円形	丸底	96X 72	80X 57	50		中期末(普利系)	C-2
南京壁は凹凸が著しく軟弱である。													
*	70	10住床半央	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	111X 85	85X 72	22		63-9, 70-15	
土塁71と接し、さらに伊址とも接する。													
*	71	10住床半央	円 形	円錐状	直底	円 形	平底	111X 105	100X 95	85	覆土中	63-10	A-5
開口部より上に10cm前後の貼り床をし6住の床となっている。貼り床内及び下には焼土がブロック状に16cm前後堆積していた。西壁に不整形のピットをもつ。													
*	72	10住東壁	楕円形	ナリ株状	外傾	楕円形	丸底	127X 92	85X 74	50		中期末(加曾利系)	A-4
東壁が凹凸していくやや軟弱である。段を有している。													
*	76	10住東壁	楕円形	直 状	外傾	楕円形	平底	85X 76	65X 54	9			
北側に浅いピットを張り出す。													
*	79	10住南壁	円 形	ナリ株状	外傾	円 形	平底	70X 62	55X 42	27	開口部		
開口部にひし形の自然石が置かれ、立っている。													
*	80	10住床南	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	100X 82	85X 65	30			
土塁81に南西壁がやや切られている。													
*	81	10住床南	楕円形	ナリ株状	外傾	楕円形	平底	85X 64	55X 28	49			B-30
壁は直に近いが外傾と言える。													
*	82	10住西壁	不整形	タライ状	外傾	不整形	平底	85X 65	75X 56	24		中期末(普利・加曾利系)	
北壁ではやや袋状をなす。													
*	83	10住北壁	不整形	タライ状	外傾	不整形	丸底	105X 82	85X 50	32		中期末(加曾利系)	
丸底で西壁は張り出しピットが設けられている。													
57	84	10住北壁	円 形	ナリ株状	外傾	楕円形	平底	85X 60	75X 60	30	2	64-7	
東壁に深さ10cm前後の小穴を2個もつ。床面はやや軟弱である。													
*	85	10住炉北	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	平底	85X 55	75X 43	25		中期末(加曾利系)	
西壁が高くなってしまおり東壁が炉壁に接する。													
*	90	15住床北	円 形	ナリ株状	外傾	楕円形	平底	55X 54	35X 28	23			F-1
15住覆土中に存在した床面は掘り込まれていた。													

住居址周辺より検出された土塙（縄文時代）

I群（第2号住北東域）

探査番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口径	底径	深さ	小穴	配石	遺物	切合	堆積	
ST 1	2住北東域	楕円形	凸状	直壁	楕円形	凸凹	100×100	104×95	110			60-1, 60-1~4	1住>1	C-4	
1号住によって東壁は貼り床されている。床面・壁ともにやや凹凸がありであるが堅致である。															
*	2	*	円形	凸状	外傾	円形	丸底	100×100	70×70	50			60-2~4		C-3
床面は弧状を呈すが堅致である。															
*	24	*	楕円形	円筒状	直壁	楕円形	平底	127×72	92×53	88				1住>24	C-7
1号住のカマド基底部より下に検出された土塙で西壁はカマドの煙出部にある。															

II群（第2号住北域）

探査番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口径	底径	深さ	小穴	配石	遺物	切合	堆積	
ST 3	2住北域										配石				
6個の自然石がやや乱れた長方形に置かれていた。															
*	11	*	円形	円筒状	直壁	円形	手底	122×121	94×91	110					
床・壁ともにしっかりしている。															
*	19	*	楕円形	タライ状	外傾	楕円形	丸底	(30×15)	14×40	25					
2個の土塙が重なり合ったもので西侧のものは深さ45cmを測る。															

III群（第2号住西域）

探査番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口径	底径	深さ	小穴	配石	遺物	切合	堆積	
ST 12	2住西域	楕円形	タライ状	外反	楕円形	丸底	90×70	68×51	15			62-3, 4		E-1	
北壁は張り出し部があり傾斜している。															
*	13	*	円形	すり鉢状	外傾	円形	丸底	101×94	80×79	34			62-5		B-2
北壁は張り出し部があり傾斜している。															
*	21	*	楕円形	タライ状	外傾	円形	平底	91×80	68×66	36			62-6, 67-11, 12	21>37, 58	E-5
東南壁は2重の壁をもつ。															
*	37	*	円形	すり鉢状	外傾	円形	平底	113×100	107×90	54			66-1, 2, 13-16		
土塙21によって切られ土塙51と接する。															
*	39	*	楕円形	すり鉢状	外傾	楕円形	平底	105×100	78×60	44					C-3
開口部は外側している。平面形はやや隅丸方形に近いが整っていない。															
*	41	2住西域	円形	すり鉢状	外傾	円形	平底	105×100	76×71	52			62-1~3, 67-8~10	41>47	
床面・壁ともに堅致である。															

57	47	2住南壁(内側)(タライ状)外板(横)平底 南西壁は軟弱である。	108×100	81×80	32						
*	51	2住西壁 横円形 すり鉢状 外板 横円形 平底 (55)×41 (44)×30 土塀21によって切られ5号住に貼り床されている。貼り床は15cm前後である。									C-1
*	52	* 円 形 すり鉢状 外板 横円形 丸底 60×60 45×39 26 南壁がややゆるやかである。平面形は隅丸方形と言えるかもしれない。									C-1
*	54	* 円 形 直 状 外板 横円形 丸底 60×61 36×32 11 全体的になだらかな壁をもつ。									B-2
*	69	* 四方形 すり鉢状 外板 四方形 平底 60×81 60×61 32 床面・壁ともに堅致である。									

IV群（第10号住東域）

番号	番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 検	底 棱	深さ	小穴	配 石	遺 物	寸 合	地 墓
57	43	10住東域	横円形	円筒状	直壁	横円形	平底	60×50	55×39	62			中层末(骨粉系)	43>66	C-12
土塀66に含まれる土塀である。															
*	50	*	券 形	すり鉢状	外板	券 形	平底	112×90	75×60	58					C-2
床面・壁ともに凹凸が著しく軟弱である。															
*	65	*	隅丸形	すり鉢状	外板	隅丸形	丸底	150×130	112×110	72				65>66	B-1
壁はやや丸味を帯びている。															
*	66	*	(横円形)	すり鉢状	外板	(横)溝	平底	(100)×100	(80)×80	48					C-12
横円形を呈すると考えられるが西壁を土塀65により切られているため確証はない。															

V群（第2号住南域）

番号	番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 棱	底 棱	深さ	小穴	配 石	遺 物	寸 合	地 墓
58	14	2住南壁	円 形	タライ状	外板	円 形	凹凸	124×124	122×97	24			漆刷	14>42	D-5
床面は凹凸が著しく軟弱である。															
*	15	*	円 形	すり鉢状	外板	円 形	丸底	124×91	122×87	44			漆刷		D-9
開口部南西壁上に自然石が置かれていた。															
*	17	*	長円形	タライ状	外板	長円形	溝	135×131	132×105	60					D-2
床面・壁ともに堅致であるが底が西にかけて傾いている。															
*	20	*	円 形	すり鉢状	外板	円 形	丸底	80×76	60×56	37				20>57	D-8
土塀57を後から土塀20が張り込んだもので暗褐色土中に黒褐色土の落ち込みとして確認できた。															

探査	番号	位置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口径	底径	深さ	小穴	配石	遺物	切合	堆積
56	23	2 住居場	丸方形	すり鉢状	外縁	楕円形	平底	80×80	50×45	45			中輪車(骨糸)		
南・北壁は壁が2重になっている。床・壁ともに堅致である。															
*	25	*	楕円形	タライ状	外縁	楕円形	新底	117×92	50×37	22			62-7~9	B-38	D-1
土塙38を後から土塙25が切り込んだものである。															
*	26	*	長方形	タライ状	外縁	長円形	平底	80×45	70×25	25					C-2
*	27	*	円形	タライ状	外縁	円形	平底	75×45	44×39	20			62-10~12, 63-8		
*	29	*	円形	すり鉢状	外縁	円形	平底	90×84	50×56	37			中輪車(骨糸)	14>29	C-2
土塙14によって西壁を切られている。後から14が掘り込まれた痕跡が断面に見られる。															
*	36	*	円形	すり鉢状	外縁	円形	平底	75×70	50×32	40			62-15, 16	B-48	
*	38	*	円形	すり鉢状	外縁	楕円形	丸底	148×142	124×107	55			62-3~7		C-2
壁・床ともに堅致である。															
*	42	*	円形	すり鉢状	外縁	円形	凸凹	92×89	80×76	38					C-7
壁開口部は外反する形である。土塙14に北壁を切られている。															
*	48	*	楕円形	すり鉢状	外縁	楕円形	平底	64×(50)	43×(30)	25			63-6		
*	49	*	長方形	タライ状	外縁	長円形	斜底	140×100	113×67	40					
壁・床ともに堅致であるが底は北に向かって傾斜している。															
*	55	*	円形	タライ状	外縁	円形	凸凹	97×87	57×51	30		開口部			C-7
なだらかな壁をもつ開口部に2個の自然石が置かれていた。															
*	56	*	楕円形	すり鉢状	外縁	楕円形	凸凹	107×85	88×62	64					C-1
土塙15によって後から掘り込まれている。															
*	57	*	長方形	すり鉢状	外縁	長方形	凸凹	162×146	140×115	62				22>57	C-6
平面形は楕丸の長方形を呈し壁はしっかりしている。後から土塙22に掘り込まれている。															
*	60	*	円形	タライ状	外縁	円形	丸底	85×96	71×71	33		開口部			C-1
開口部に自然石が3個置かれていた。															
*	61	*	円形	すり鉢状	外縁	円形	平底	110×100	78×70	45			63-7, 8,		C-8
*	62	*	楕円形	タライ状	外縁	楕円形	丸底	106×90	82×53	30					
*	63	*	円形	タライ状	外縁	円形	平底	143×137	113×100	22		開口部	70-13, 14		B-4
開口部に自然石が2個置かれていた。															

58	64	2住南城 円 形 直 状 外傾 円 形 平底	106×106	65×82	18		中期末(晩利点)		C-7
----	----	------------------------	---------	-------	----	--	----------	--	-----

VI群 (第13号住北城)

構図	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 径	底 径	深さ	小穴	配 石	遺 物	想 合	堆 積
57	5	13住北城 楊円形	タライ状	外傾	楊円形	平底	136×119	114×100	28				6-5~7		B-3
*	6	*	楊円形	直 状	外傾	楊円形	丸底	155×94	95×72	15			關口語		C-13
*	7	*	楊円形	タライ状	外傾	楊円形	平底	262×216	228×200	60					
*	8	*	長円形	直 状	外傾	楊円形	凹凸	236×155	192×102	10					

土壇層上層に焼土が巾30cmくらいの円形で厚さ6cm程度堆積していた。その南側には自然石が置かれており
ファイヤービット的性格を持つかもしれない。

本遺跡の中で最大規模の土壇である。壁・床とともに堅致である。

浅く直状を呈し壁・床ともにやや軟弱である。

VII群 (第13号住南・西城)

構図	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 径	底 径	深さ	小穴	配 石	遺 物	想 合	堆 積
58	89	13住南城 円 形	すり鉢状	外傾	円 形	平底	84×83	57×52	44						C-12
*	91	*	円 形	タライ状	外傾	円 形	丸底	80×76	65×62	23					C-1
*	92	13住西城 楊円形	すり鉢状	外傾	楊円形	平底	70×52	55×30	40					93>92	C-9
*	93	*	不整形	直 状	外傾	不整形	丸底	130×94	110×61	25					D-1
*	94	*	円 形	すり鉢状	外傾	円 形	斜底	56×52	35×29	45					E-3
*	95	*	楊円形	タライ状	外傾	楊円形	丸底	115×82	95×50	25				64-8, 70-15, 17	

壁・床面ともに堅致である。

北東壁のビットを切る形で土壇94がつくられた状態を示す。

床面は軟弱である。

単独Ⅰ（第11号住北東壁）

辨認	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 難	底 障	深さ	小穴	配 石	遺 物	切 合	地 横
58	96	11住北東壁	不整形	直 状	外傾	不整形	圓凸	180×140	160×134	18	3		64-9, 10		
床面に小穴が3個あり74×54, 60×50, 48×45を測る。深さは30cm前後である。															
*	97	*	円 形	ナリ鉢状	外傾	円 形	圓凸	186×100	86×68	46			中間末, 70-15		C-II
土塁の壁にそってピットが4個張り出している。															

単独Ⅱ（第11号住東壁）

辨認	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 難	底 障	深さ	小穴	配 石	遺 物	切 合	地 横
58	96	11住東壁	橢円形	ナリ鉢状	直壁	橢円形	平底	160×137	132×129	50		床 面	64-II~13		A-4
11住の東壁を切る形で作られている。床面・壁とともに堅致であり床面西隣に自然石が1個置かれていた。															

単独Ⅲ（第11号住西域）

辨認	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 難	底 障	深さ	小穴	配 石	遺 物	切 合	地 横
58	95	11住西域	円 形	ナリイ状	外傾	橢円形	平底	192×182	170×150	58			64-14-16, 65-1-15		特-1
短斜地にあるため壁高の差が大きい。壁・床ともに堅致である。層序は整層をしており中間層に焼土が12cm前後堆積している。															

単独Ⅳ（第8号住北東壁）

辨認	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 難	底 障	深さ	小穴	配 石	遺 物	切 合	地 横
58	107	8住北東壁	橢円形	ナリ鉢状	外傾	橢円形	平底	153×128	122×97	95			65-6-13, 66-1, 2		特-2
壁・床ともに堅致であり壁は直壁に近い。層序は整層をなしU字状に堆積している。石器は第70区-19の短冊形打石斧刃欠が1点出土。															

単独Ⅴ（第1号住南床面）

辨認	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 難	底 障	深さ	小穴	配 石	遺 物	切 合	地 横
58	18	1住南床面	円 形	ナリ鉢状	外傾	円 形	平底	112×104	87×79	95					C-3
1住に12cm前後ローム土で貼り床されている（覆土上層）。さらに西側のピットによって切られている。床・壁ともに堅致である。															

単独VI (第2号住西壁)

測定	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 間	底 長	深さ	小穴	配 石	遺 物	組 合	堆 積
58	40	2 住西壁	円 形	ナリ体状	外傾	円 形	平底	77X 73	56X 48	31			60-1		C-7
土塁基群の中のほぼ中央に位置する。床・壁ともに堅致である。															

住居址内より検出された土塁 (平安期の住居址内)

測定	番号	位 置	平面形	断面形	壁	床面形	床面	口 間	底 長	深さ	小穴	配 石	遺 物	組 合	堆 積
58	10	5 住東壁	円 形	ナリ体状	外傾	楕円形	凸	111X 105	60X 43	34					D-1
壁・床ともに堅致である。															
*	22	5 住南壁	椭円形	ナリ体状	外傾	椭円形	凸	95X 75	80X 60	58			中粗末(砂利系)	22-44	D-2
床面はやや軟弱である。															
*	28	*	円 形	タライ状	外傾	円 形	丸底	92X 73	44X 39	22					C-2
*	44	*	楕丸形	ナリ体状	外傾	円 形	平底	94X 76	75X 73	62					C-2
壁・床ともに堅致である。後から土塁22によって東壁が切られている。															
*	46	5 住西壁	円 形	タライ状	外傾	円 形	平底	103X103	114X113	24	■	■	■	33-4, 5, 70-10-12	46-105
東壁は二重の壁となっている。裏土中に3個の自然石が存していた。															
*	53	5住中央壁	椭 形	タライ状	外傾	椭 形	凸	98X 78	86X 59	23					C-3
床面は凹凸で軟弱である。															
*	76	5 住北壁	円 形	タライ状	外傾	円 形	平底	103X 98	84X 83	25	■	■			C-3
5住カド東そで部の下より発見された土塁である。貼り床はなく開口部に7個の自然石が置かれていた。															
*	101	5 住南壁	椭円形	タライ状	外傾	椭円形	平底	100X 77	74X 53	30					
壁・床ともに堅致である。北壁はピットによって切られている。															
*	102	5住西壁	椭円形	ナリ体状	外傾	円 形	平底	85X 65	58X 50	46	■	■	■	中期末(砂利系)	D-5
壁・床ともに堅致である。開口部に自然石が1個置かれている。															
*	104	5住南壁	楕丸形	タライ状	外傾	楕丸形	凸	128X115	95X 94	38	■	■			D-7
北壁開口部に4個の自然石が置かれていた。															
*	105	5住北壁	楕丸形	タライ状	外傾	円 形	丸底	103X103	87X 82	20	■	■			C-7
壁・床ともに堅致である。開口部に2個の自然石が置かれていた。															
*	106	5 住西壁	円 形	円錐状	直壁	円 形	丸底	79X 71	53X 50	55					C-10
土塁46に切られる。															

構造	番号	位 置	平面形	新 正 形	壁	床面形	床面	口 径	底 高	深さ	小穴	配 石	造 勉	切 合	堆 積
99	73	8住西壁	円 形	タライ状	外傾	円 形	平底	86×85	68×62	20			68-2, 3		E-2
床・壁ともに堅致。															
*	77	8住西壁	円 形	すり鉢状	外傾	円 形	丸底	155×149	136×132	75			67-17, 18, 68-4~6		A-2
8住により土坡77が切られた形をとるが貼り床はされていない。壁は段をもっており外反している。															
*	87	8住北壁	不整形	タライ状	外傾	不整形	平底	148×84	133×84	34					E-1
壁・床ともに堅致である。															
*	88	8住北壁	複円形	タライ状	外傾	複円形	斜底	134×105	108×82	38			68-7		E-4
13住西壁を貼り床したところに掘り込んでいる。															

堆積状態より層序的にみた分類として次のようにした。

A-1~I, A-2~I-I'-II-III-I, A-3~I-II-III'-IV'-VI", A-4~I-IV'-II
 B-1~II-V", B-2~II-III, B-3~II-III"-VI", B-4~II-III-V-VI"
 C-1~III, C-2~III-III', C-3~III-III'-VI", C-4~III-III'-III"-VI", C-5~III-III'-VI'-VI",
 C-6~III-III'-II, C-7~III-VI", C-8~III-IV-III", C-9~III-IV-V-VI", C-10~III-IV-
 VI'-II, C-11~III-III-VI", C-12~III-II, C-13~III"
 D-1~IV, D-2~IV-IV'-V, D-3~IV-V", D-4~IV-III-III', D-5~IV-III-II, D-6~IV-V,
 D-7~IV-V-V'-III'-VI", D-8~IV", D-9~IV'-IV'
 E-1~V, E-2~V-III, E-3~V-IV'-VI"-III', E-4~V-IV"
 F-1~VI'-II
 特-1~I-VI"-III-III'-VI'-VI-III'-VI"
 特-2~II-VI-III-IV-III-III'-III-III'-VI'-VI"

土坡出土土器一覧表（復図中、大文字は整理番号、小文字は土坡番号、単位cm）

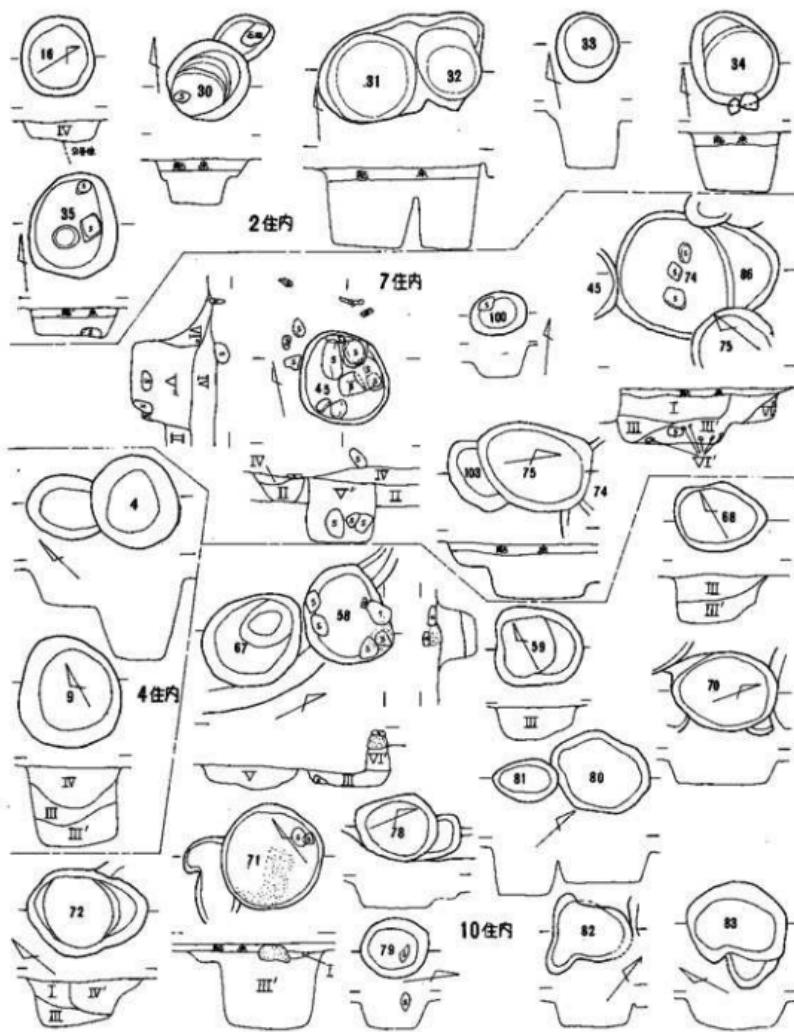
整理番号	土坡番号	形態	色調	胎土	焼成	文様	備考	
第61号-1	1	深鉢形	黒褐色	長石多し	良好	口縁～貼付溝文～斜条線、胴部～集織	口径35.4、胴径20.8（曾利Ⅱ系）	
	2	(+)	暗褐色	こまかい長石	*	口縁～貼付溝文～連続爪形文、胴部～繩文	口径34.0（加曾利系+十大系）	
	3	(+)	淡褐色	長石多し	良	胴部～單節斜繩文		
	4	(+)	暗褐色	*	*	胴部～單節斜繩文～蛇行沈繩文	（曾利Ⅱ～Ⅳ系）	
	5	5	黒褐色	砂粒	*	口縁～山形口縁～隆起貼付～想日		
	6	(+)	暗褐色	こまかい長石	良好	胴部～貼付懸垂文～結節縱軸繩文	（加曾利E系系）	
	7	(+)	淡褐色	長石多し	良	底部～沈繩懸垂文～結節縱軸繩文	底部削欠、底径9.2	
	8	7	*	茶褐色	砂粒	良好	隆起貼付～無節繩文～沈繩文	口径20.0、胴径11.4（加曾利E系系）
	9	(+)	淡褐色	紫斑、灰石、石英	*	口縁～肥厚、胴部～結節縱軸繩文～列点文		
	10	*	無頬窓	*	砂粒	口縁部～無文、胴部～貼付溝文、隆起～破損	（曾利Ⅱ系）	
	11	*	深鉢形	*	長石多し	良	口縁部～貼付溝文～結節繩文～廢り消し	（加曾利E系系）
	12	7	(+)	*	こまかい砂粒	*	胴部～貼付隆起～集織～斜繩文～沈繩文	（曾利Ⅰ～Ⅲ系）
	13	(+)	暗褐色	長石多し	*	胴部～貼付隆起～斜繩文	(+)	
	14	(+)	淡褐色	*	良好	胴部～集繩文～沈繩懸垂文	（曾利Ⅱ系）	
	15	(+)	*	こまかい砂粒	*	胴部～沈繩内文～結節縱軸繩文		
	16	*	台付土器	*	長石多し	良	台部～貼付隆起～連続爪形文	有孔
	17	*	*	淡褐色	砂粒	台部～貼付隆起	底径8.0 有孔	
	18	*	*	淡褐色	*	台部～貼付隆起～連続爪形文	底径9.4 有孔	
第62号-1	*	突起部	暗褐色	長石多し	*	U字状突起		
	2	9	深鉢形	*	*	口縁～貼付溝文～結節繩文、胴部～沈繩内文～集繩文	（加曾利E系系）	
	3	12	(+)	*	砂粒	胴部～平行沈繩文	中期初期？	
	4	(+)	*	*	*	胴部～貼付溝文～斜条線	（曾利Ⅱ系）	
	5	13	深鉢形	淡褐色	長石多し	良好	口縁～山形口縁～貼付溝文、胴部～沈繩懸垂文～斜繩文	（加曾利E系系）
	6	21	(+)	黒褐色	こまかい長石	*	胴部～貼付隆起～円形斜尖文	（大木系？）
	7	25	深鉢形	暗褐色	*	口縁～貼付溝文～結節繩文	（加曾利E系系）	
	8	(+)	淡褐色	長石多し	良	胴部～結節縱軸繩文～廢り消し		
	9	*	土輪内版	*	*	胴部～沈繩文		
	10	27	深鉢形	*	こまかい長石	良好	胴部～貼付連続凹円文～結節縱軸繩文	
	11	*	(+)	*	長石多し	良	胴部～結節縱軸繩文～沈繩懸垂文	
	12	*	耳突起	*	こまかい長石	*	隆起貼付～連続系形文	（曾利Ⅲ～Ⅴ系）
	13	32	深鉢形	茶褐色	*	胴部～隆起貼付～一条繩文		
	14	32	*	暗褐色	長石多し	良好	胴部～斜繩文～廢り消し～沈繩懸垂文	（加曾利E系系）
	15	36	(+)	淡褐色	*	良	胴部～沈繩内文～結節縱軸繩文	

第62回-16	36	深鉢形	淡褐色	長石多し	良好	胴部-沈線捺印文	底径8.0
第63回-1	41	*	*	*	*	口縁-貼付溝文-刷毛筆	(曾利Ⅱ系)
2	*	*	茶褐色	雲母、長石	良	胴部-貼付溝文-鉛条繩	(*)
3	*	*	暗褐色	長石多し	良好	胴部-結節繩文-沈線捺印文-磨り消し	(加曾利EⅢ系)
4	46	*	*	砂粒	良	胴部-沈線溝文-斜楕文	(*)
5	*	*	淡褐色	*	良好	口縁-把手付-貼付溝文-刻目-一条線	把手部分施有孔。内施溝文
6	48	鉢形	暗褐色	雲母、長石	*	口縁-貼付捺印文-懸垂文-沈線捺印文-一条線	台状の突起一目伏透文
7	61	深鉢形	*	長石多し	*	口縁-張番貼付-鉢行沈線-無文-斜楕文-懸垂文	(加曾利EⅢ系)
8	*	*	黑褐色	*	*	胴部-貼付溝文-列点文-斜楕文	
9	70	*	黑色	こまかい長石、雲母	*	口縁-列点文-沈線文	
10	71	*	暗褐色	雲母、長石	*	口縁-肥厚、張番部-貼付張番-無脚溝文-列点文	(加曾利系+大木系)
11	74	*	淡褐色	長石多し	良	口縁-貼付溝文-斜楕文	(加曾利EⅢ系)
12	(浅鉢形)	*	こまかい長石	良好	口縁-斜楕文-沈線溝文	(曾利Ⅱ-Ⅲ系)	
第64回-1	*	深鉢形	灰褐色	金雲母	*	底部-無文	底-網代、底径11.0
2	*	*	淡褐色	長石多し	良	底部-貼付懸垂文-沈線文	底-網代、底径11.0
3	*	*	*	*	*	胴部-貼付懸垂文-斜楕線斜楕文	(加曾利EⅢ系)
4	*	台付土器	淡黃褐色	*	*	貼付龍頭-列点文	有孔
5	75	深鉢形	淡褐色	砂粒	*	胴部-鐵紋、瓶底沈線文-一条線文	(曾利Ⅱ-Ⅲ系)
6	*	*	*	*	*	胴部-斜楕文-沈線連結溝文	(曾利Ⅱ-Ⅲ系)
7	84	*	暗褐色	長石多し	良好	口縁-貼付溝文-結節繩文、胴部-結節繩文	(加曾利EⅢ系)
8	95	無頭甕	灰褐色	砂粒	*	口縁-貼付溝文-一条線文	第64回-6と同一個(曾利Ⅱ系)
9	96	深鉢形	暗褐色	*	良	口縁-貼付溝文-結節繩文	(加曾利EⅢ系)
10	*	*	*	長石多し	*	胴部-貼付溝文-斜楕線斜楕文	(*)
11	98	*	*	*	良好	胴部-貼付溝文-列点文	(*)
12	*	*	淡褐色	砂粒	*	胴部-斜楕文-沈線懸垂文	
13	*	*	暗褐色	*	良	胴部-結節繩斜繩文-貼付捺印文-磨り消し	(加曾利EⅢ系)
14	99	*	淡褐色	長石多し	良好	口縁-貼付溝文、胴部-陰署貼付	内面、横合で
15	*	*	*	*	*	口縁-貼付溝文-斜楕文	(加曾利EⅢ系)
16	*	無頭甕	淡褐色	*	*	口縁-貼付溝文-一条線文	(曾利Ⅱ-Ⅲ系)
第65回-1	*	深鉢形	赤褐色	砂粒	*	胴部-貼付連結構円文-結節繩斜繩文	(加曾利EⅢ系)
2	*	*	淡褐色	*	良	胴部-斜楕文-沈線懸垂文-磨り消し	(*)
3	*	把手付上器	*	*	良好	口縁-貼付捺印文-列点文-結節繩文	(*)
4	*	台付土器	淡黃褐色	長石多し	*	台部-列点文	底径13.0、有孔
5	*	*	淡褐色	*	*	台部-列点文	底径8.8、有孔
6	107	無頭甕	灰褐色	砂粒	*	口縁-爪彫文-貼付溝文-一条線文	第64回-8と同一個(曾利Ⅱ系)
7	*	深鉢形	淡褐色	長石多し	*	口縁-貼付溝文-斜楕文	(加曾利EⅢ系)

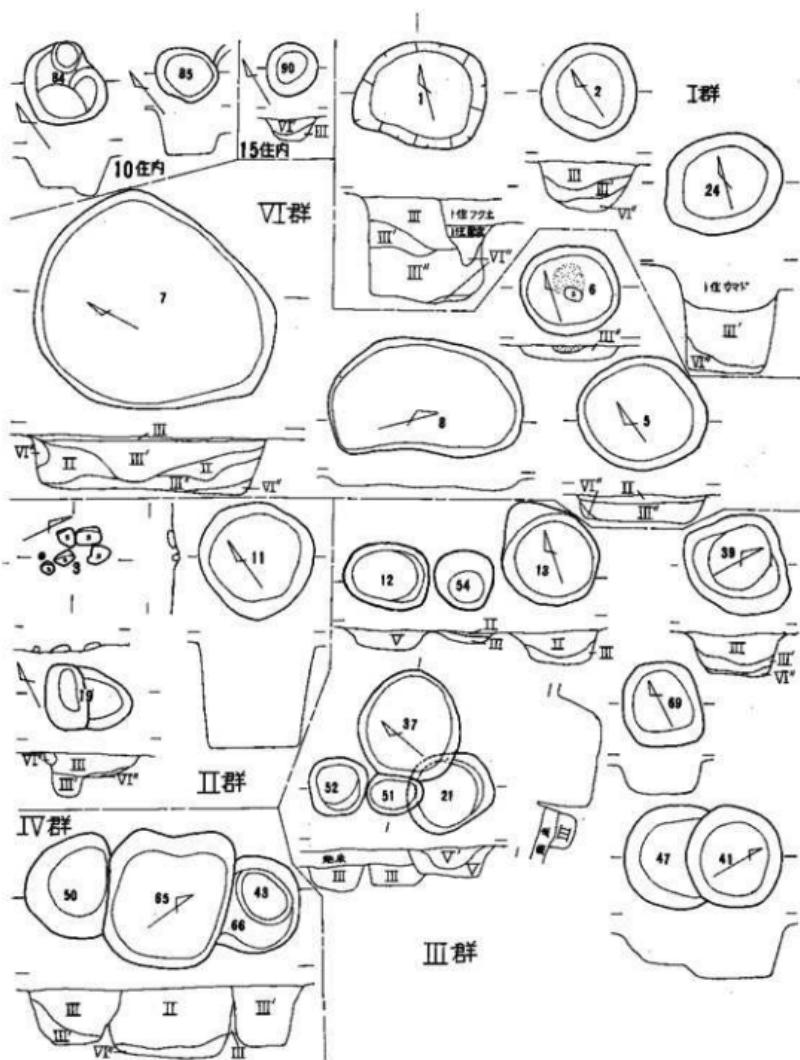
第65回-8	107	深鉢形	暗褐色	砂粒	良好	口縁～沈縫溝文	()					
9	*	*	*	長石多し	良好	口縁～列点文～貼付隆起～一条溝文	(蟹利Ⅱ～昌系)					
10	*	*	暗灰褐色	こまかい長石	*	口縁～貼付溝文～一条溝文	(*)					
11	*	*	暗褐色	砂粒	やや良	口縁～貼付溝文～斜縫文	(加賀利Ⅲ系)					
12	*	*	*	*	*	側脚部～貼付溝文～隠起～列点文～斜縫文	(*)					
13	*	*	淡褐色	雲母、長石	良好	脚部～結節線状溝文～沈縫溝文～擦り消し	(*)					
第66回-1	*	*	暗褐色	*	*	側脚部～貼付複合文～隠起溝文、底座～同じ	(*)					
2	*	*	黒褐色	*	*	口縁～無文、側脚部～貼付溝文～結節溝文	口径45.2、脚径33.0(*)					
漆器番号	上辻番号	形	態	色	調	胎	土	施成	文	様	備	考
第67回-1	37	鉢	形	淡褐色	長石多し	良好	脚部～沈縫区面文～斜縫文	(蟹ノ内系)				
2	*	*	暗褐色	*	*	脚部～淡緑区面文～斜縫文	(*)					
3	38	*	淡褐色	こまかい砂粒	*	口縁～沈縫区面文～斜縫文	(*)					
4	*	*	*	長石多し	*	口縁～沈緑区面文～斜縫文～擦り消し	(*)					
5	*	*	*	こまかい砂粒	*	脚部～沈緑区面文～斜縫文	(*)					
6	*	*	暗褐色	*	*	脚部～沈緑区面文～斜縫文～擦り消し	(*)					
7	*	*	茶褐色	あらい砂粒	良	脚部～一条溝文	(庄ノ源系)					
8	41	*	淡褐色	こまかい砂粒	良好	口縁～沈緑区面文～斜縫文	(蟹ノ内系)					
9	*	*	*	*	*	口縁～沈緑区面文～斜縫文	(*)					
10	*	*	淡黄褐色	*	*	脚部～貼付隆起～斜縫文	(*)					
11	21	*	淡褐色	砂粒	良	脚部～貞徳条痕文	(庄ノ源系)					
12	*	*	暗褐色	*	*	脚部～貞徳条痕文	(*)					
13	37	*	*	*	*	口縁～指頭押正～斜条痕文	(*)					
14	*	*	*	*	*	口縁～粘土貼付～波状口縁～斜条痕文	(*)					
15	*	*	*	*	*	脚部～貞徳条痕文	(*)					
16	*	*	*	*	*	脚部～貞徳条痕文	(*)					
17	27	壺	形	灰灰褐色	長石多し	*	口縁～粘土貼付～鋸目～貞徳条痕文	(*)				
18	*	鉢	形	茶褐色	砂粒	*	脚部～貞徳条痕文	(*)				
漆器番号	上辻番号	形	態	色	調	胎	土	施成	調	整	備	考
第68回-1	40	杯	淡灰褐色	長石	良好	凸凹顯著、口縁や外反、底～Rの凹へラ	須恵器	(8～9C)				
2	73	*	茶褐色	雲母	*	やや凹凸、口縁肥厚してやや外反、全体へラ削り	土師器	(*)				
3	*	*	淡褐色	雲母、砂粒	良	底部くびれ、底～Rの糸切り。底径5.2	* . 分	(*)				
4	77	*	赤褐色	あらい長石	*	凸凹顯著、口縁や内縁、内面一部赤色塗彩	* . 完形	(*)				
5	*	*	暗灰褐色	銀雲母長石	やや良	外側やや凸凹顯著、口縁や外反、底～Rの	土師質質感強烈、一部黒色(*)					
6	*	*	暗褐色	あらい砂粒	良	凸凹顯著、口縁外反、底～Rの糸切り	* . 分	(*)				
7	88	*	灰褐色	あらい長石	やや良	内外やや凹凸、口縁外反、底～凹凸顯著	七郎質須志器	(*)				

土塙出土石器一覧表(擇団中、大文字は整理番号、小文字は土塙番号、単位cm, g)

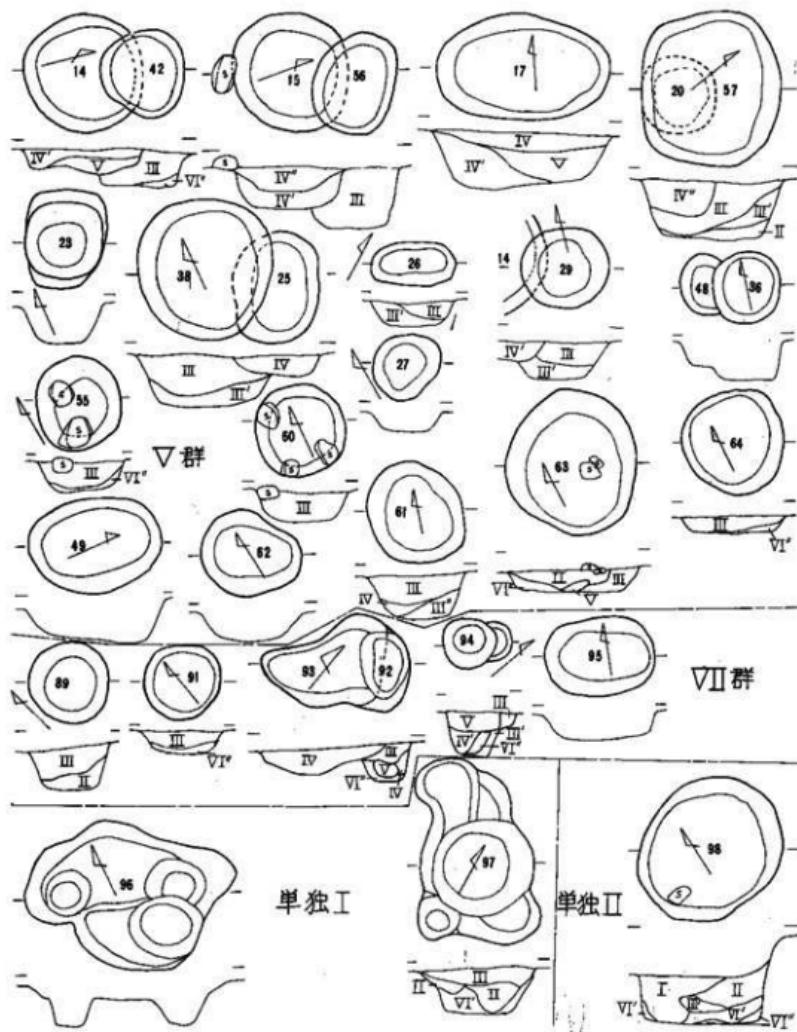
擇団番号	土塙番号	層位	種類	形態	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
第69回-1	1	覆土	打製石斧	短骨形	刃一部欠く	硬砂岩	12.3	4.1	1.3	116		
	2	*	*	*	*	粘板岩	10.5	3.6	1.2	74	剥節くびれる	
	3	*	*	*	*	安山岩	(8.6)	4.3	1.7	(108)		
	4	*	*	*	*	硬砂岩	(7.8)	5.1	1.8	(92)		
	5	9	*	*	*	完形	*	15.2	5.0	1.8	152	
	6	*	*	横刃石器	剝片		*	7.9	9.1	1.3	118	
	7	*	*	*	*			7.6	8.2	1.0	71	
	8	27	*	打製石斧	短骨形	完形	硬砂岩	12.3	4.7	1.6	116	
	9	45	*	石鍤	四块	*	*	6.3	5.1	1.5	72	
第70回-10	46	*	打製石斧	短骨形	*	安山岩	11.2	4.1	1.7	130		
	11	*	*	石鏃	有闊脚欠く	黒耀石	2.4	1.8	0.4	(3)	調整良好	
	12	*	*	搔器			*	2.4	2.0	0.6	(5)	
	13	63	*	磨り石	棒状		硬砂岩	13.3	3.9	3.5	294	体部敲打
	14	*	*		剝片		黒耀石	1.8	1.5	1.3	5	
	15	70	*	打製石斧	短骨形	完形	硬砂岩	12.2	3.4	0.4	48	
	16	95	*	磨り石	円形	半欠	*	(3.9)	7.0	3.0	(130)	
	17	*	*	敲打器	(完形)	粘板岩	12.8	6.6	5.0	728		
	18	97	*	打製石斧	短骨形	完形	硬砂岩	9.2	3.3	1.2	55	
	19	107	*	*	*	刃部欠く	*	(7.2)	4.0	1.6	(44)	
第71回	8住西壁外	*	石皿		完形	花崗岩	35.5	31.6	11.0(7.2)		裏面、凹石	



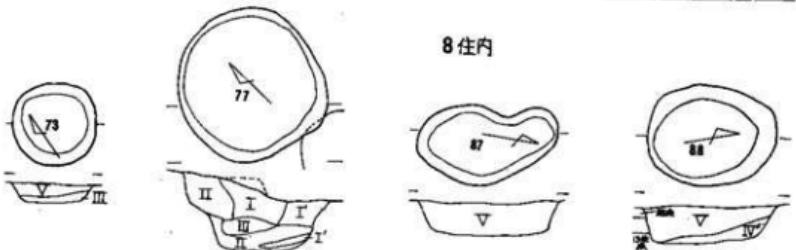
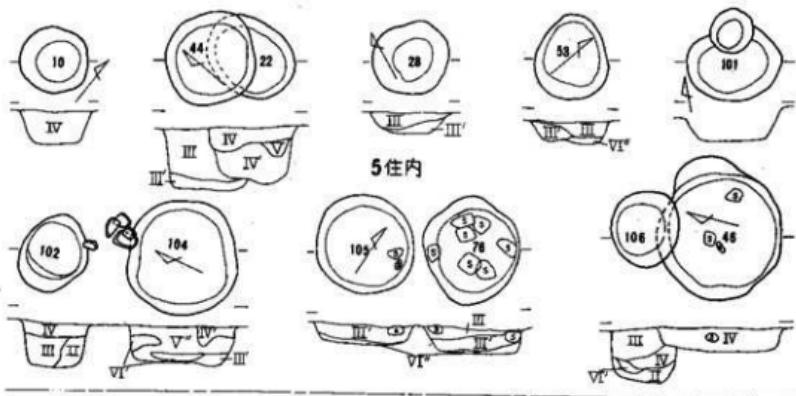
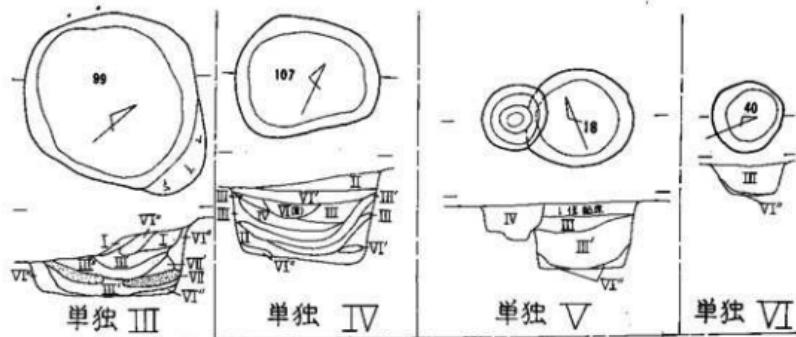
第57図 七免川B遺跡土塙夾洞図 ($S = \frac{1}{50}$)



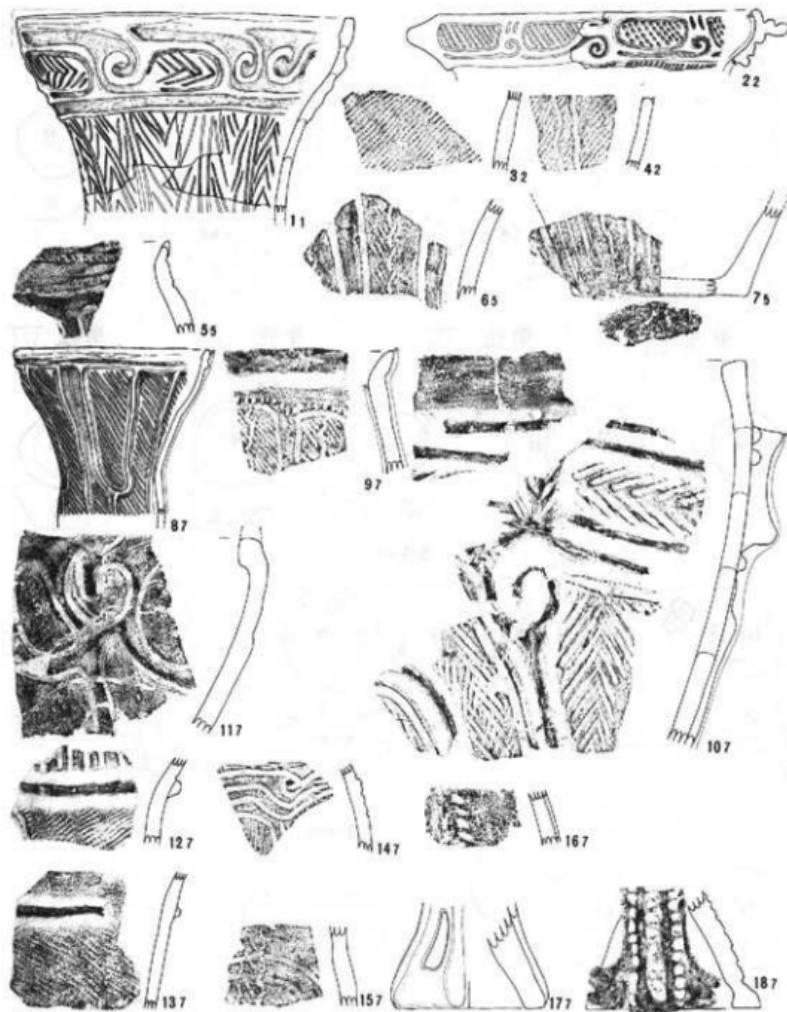
第58図 七免川 B 遺跡土塙実測図 ($S = 50$)



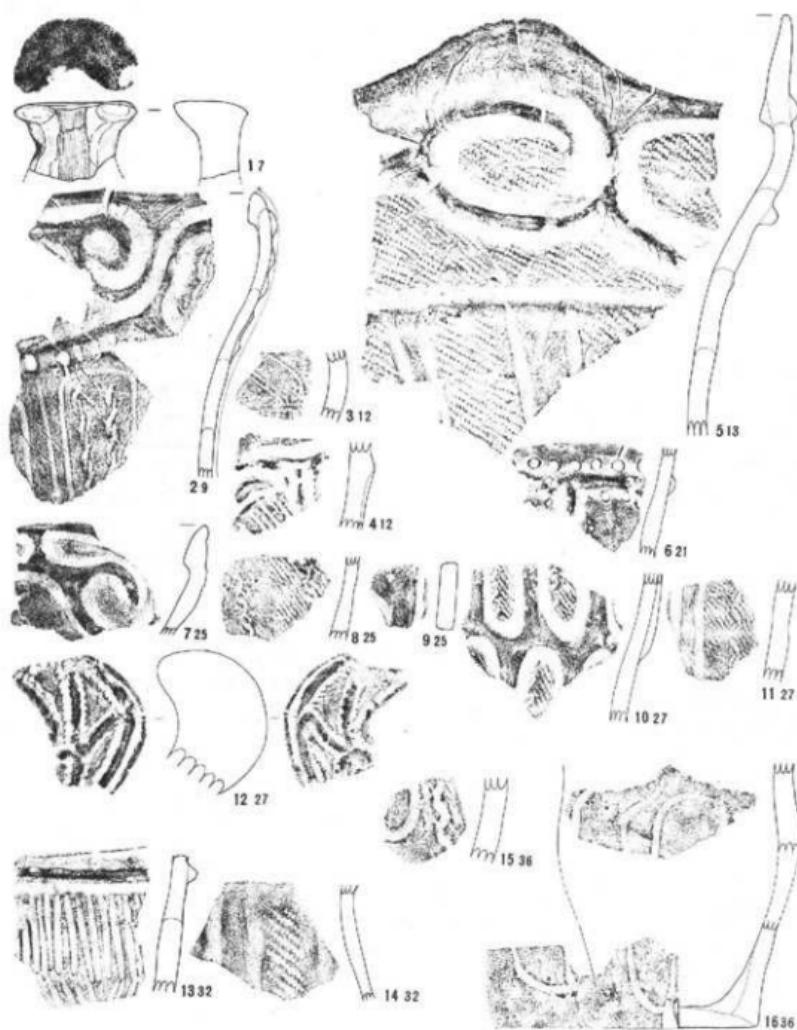
第59図 七兔川B遺跡土塙実測図 ($S = 10$)



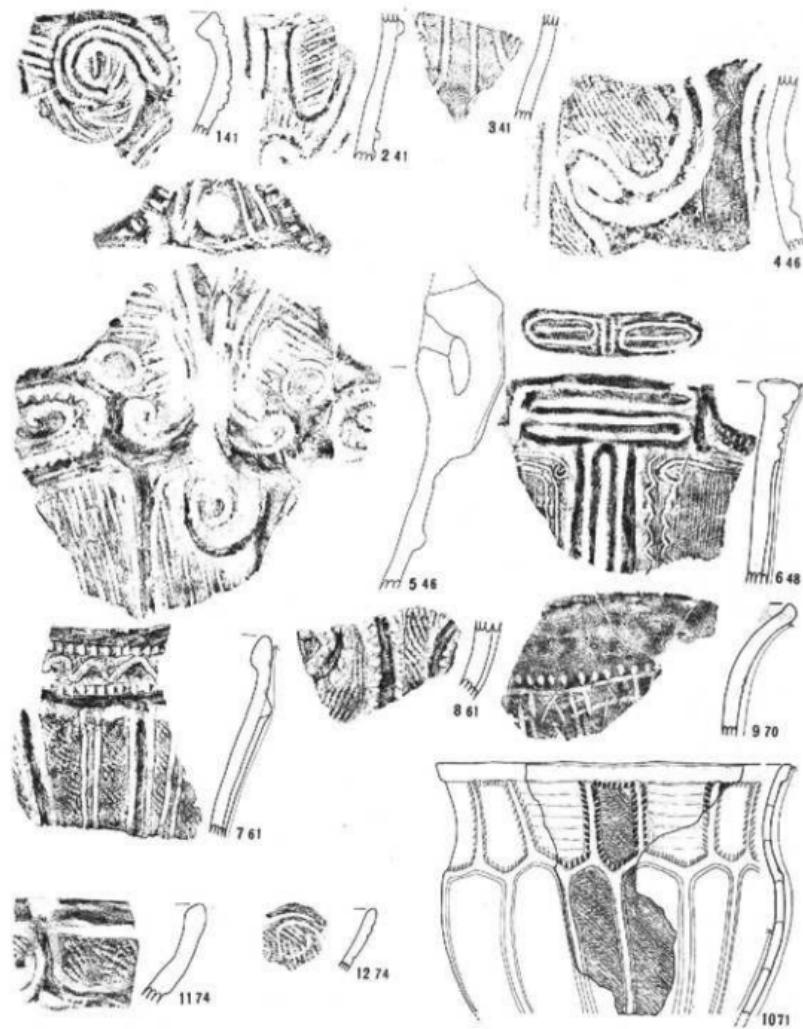
第60図 七免川B遺跡土塙実測図 ($S = \frac{1}{50}$)



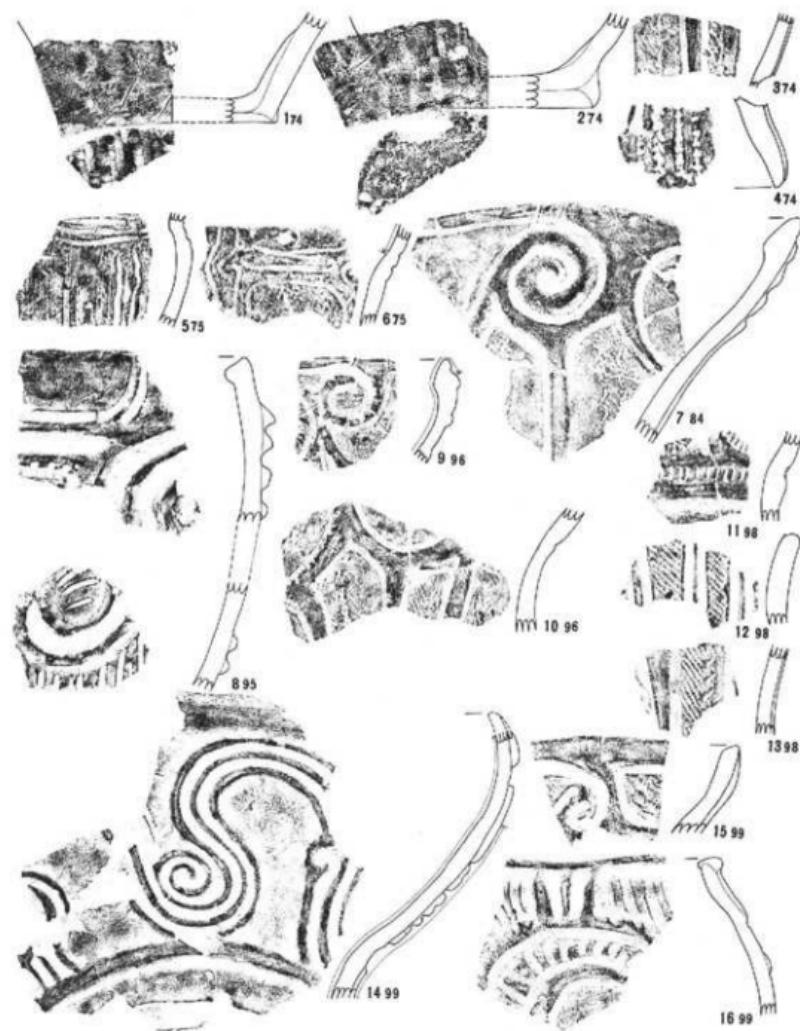
第61図 七免川B遺跡土塙出土土器 (1, 2, 6は器, その他は土)



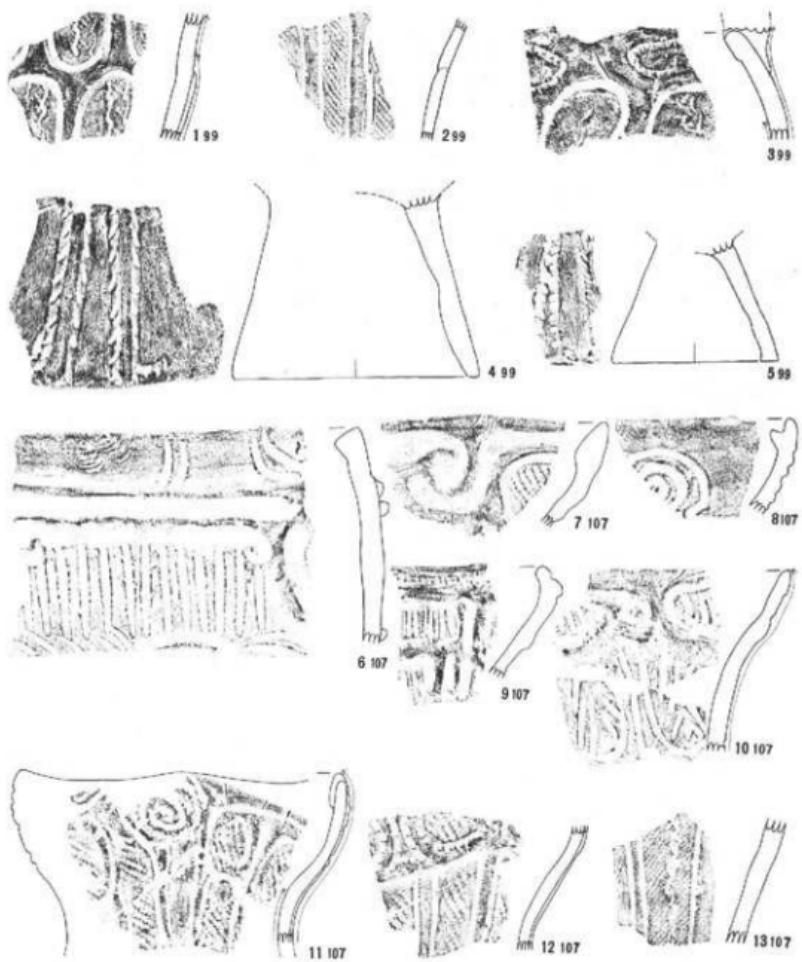
第62図 七免川B遺跡土坑出土土器 (S = 1)



第63図 七免川B遺跡土塙出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



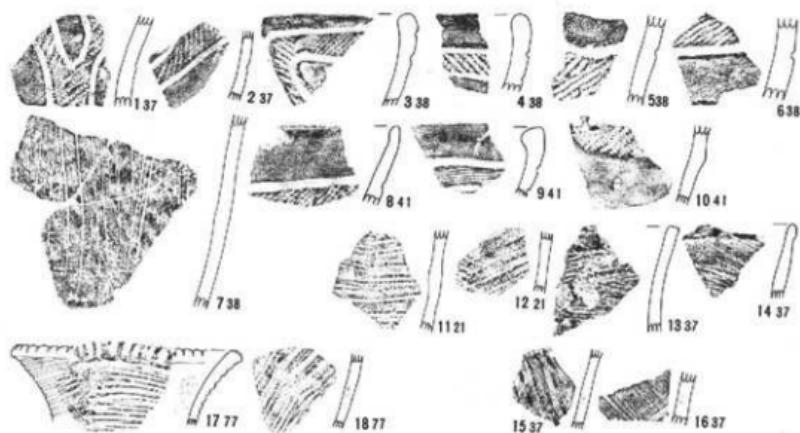
第64図 七免川B遺跡土坑出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



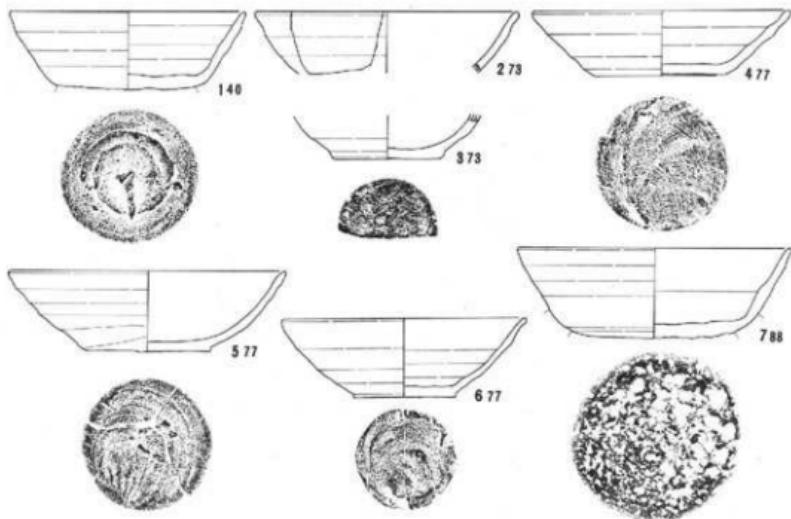
第65図 七免川B遺跡土塁出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



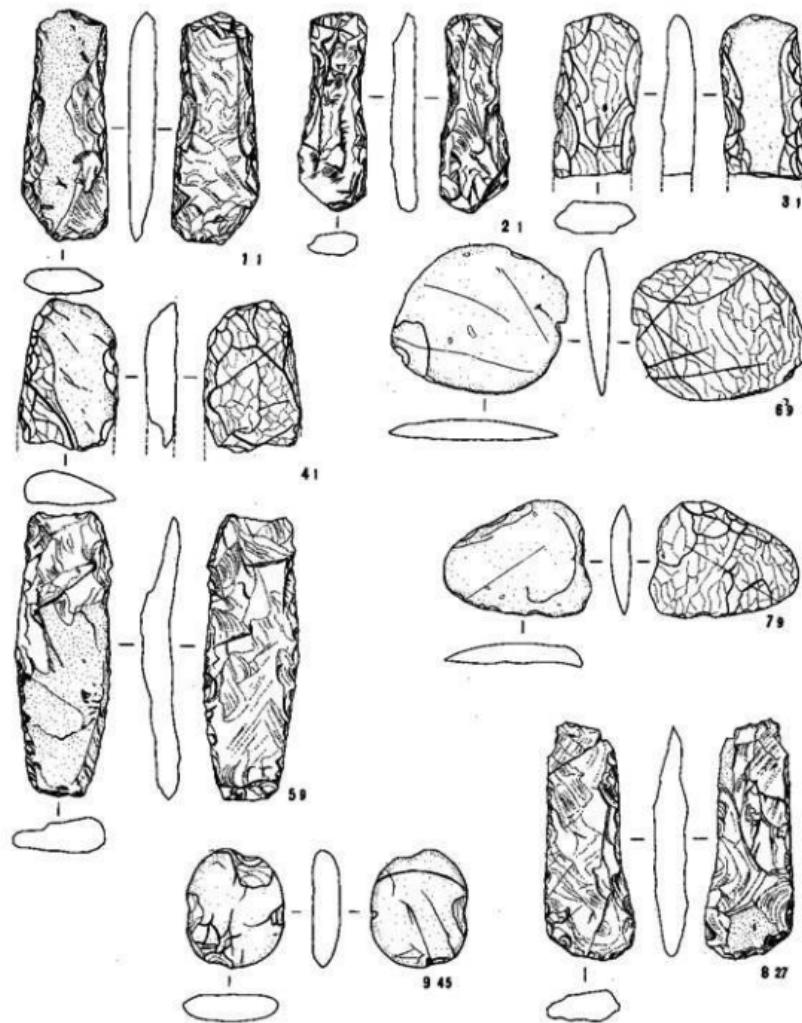
第66図 七免川B遺跡土坑出土土器（1は $\frac{1}{2}$ 、2は $\frac{1}{2}$ ）



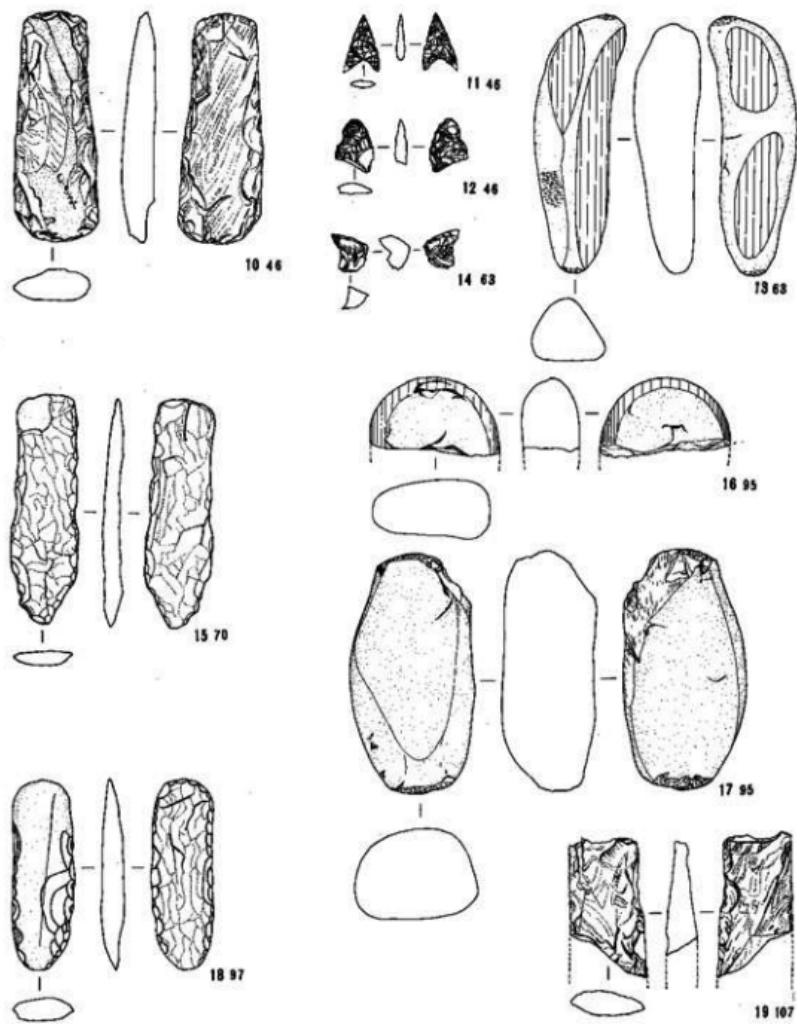
第67図 七免川B遺跡土塙出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



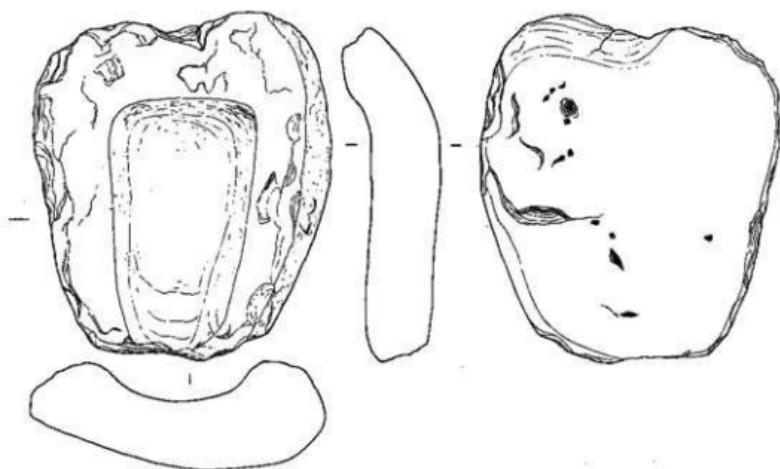
第68図 七免川B遺跡土塙出土土器 ($S = \frac{1}{2}$)



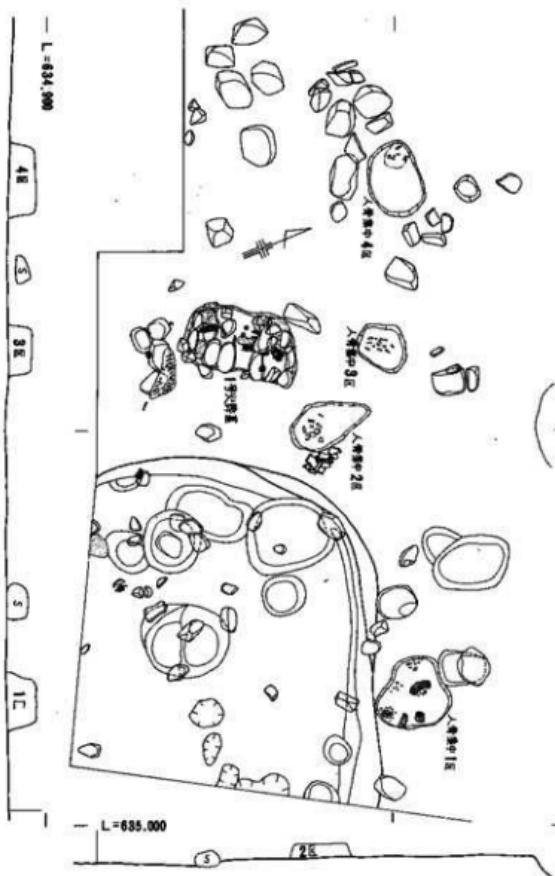
第69図 七免川B遺跡土坡出土石器 ($S = \frac{1}{2}$)



第70図 七免川B遺跡土塗出土石器 ($S = \frac{1}{2}$)



第71図 七免川B遺跡出土石器 ($S = \frac{1}{2}$)



第72図 七免川B遺跡1号火葬墓及び人骨集中1~4区実測図 (S-1)

片多く含む) — 焼土層の順に堆積していた。一部には木炭・灰層が堆積し東側にみられ、同じく骨と黒褐色土、焼土と黒褐色土の混土層もみられた。

黒褐色土(木炭・灰・焼土)と基盤の石との間にすき間がみられる点が注意される。

基盤石は総て花崗岩であり盤状及び棒状を呈し、特に北側の石は長さ57cm、幅13cmを測り、半分以上が焼土で覆わっていた。

主軸はN-54°-Eである。

3) 1号火葬墓及び人骨集中区 (第72~75図)

1号火葬墓 (第72~75図)

本遺跡より火葬墓が1基発見された。第9号住居址と第10号住居址の中間にあり、第9号住居址覆上と土塁V群寄りの地点にも人骨が集中していた。

第73図のように平面形は長方形で南北1m 30cm、東北85cmを測り断面形は舟底形を呈し基盤の石上位より深さ20~25cmを測る。

黒褐色土の上に根石とも言える基盤石を東西に平行に7個置いているもので、南北88cm東西65cmの根石の範囲が原形である。

火葬墓の層位は下層より黒褐色土層(木炭灰・焼土含む)—焼土と暗褐色土の混土層(骨

遺物（第72～75図）

人骨（第72・73図）

1号火葬墓から焼土の土層及び焼土中より1個体分と考えられる人骨が出土した。第73図を参照していただければ解かるように、17地点（単位）に分けて取り上げた。

1号火葬墓及び南域出土人骨一覧表

No.	部 位	No.	部 位	No.	部 位	No.	部 位
1	頭蓋骨	6	大腿骨	11	歯（前）、上顎骨	16	下顎骨、歯、肋骨
2	先骨、尺骨	7	膝骨、月頭骨	12	頭頂骨	17	腓骨、足根・指骨
3	上腕骨、尺骨	8	肋骨	13	骨盤？		
4	下顎骨	9	肋骨、橈骨	14	歯（奥）、頭椎、尺骨		
5	上腕骨、関節、手・指骨	10	歯（前）、下骨	15	歯（前・奥）、頭頂・頸骨		

一覧表と第73図から火葬された時の人の状態を推定すると、火葬墓の南北両端に頭蓋骨があり、北より顔部、胸部、脚部の順に遺存していた。

火葬墓南側黒褐色土層（木炭含む）中にも配石と人骨が集中していた。厚みのある盤状の自然石（花崗石）が置かれていた。人骨の散らばりは頭頂骨から脚部の膝骨まで遺存し、とくに中心部には頭蓋骨や歯が集中して検出された。

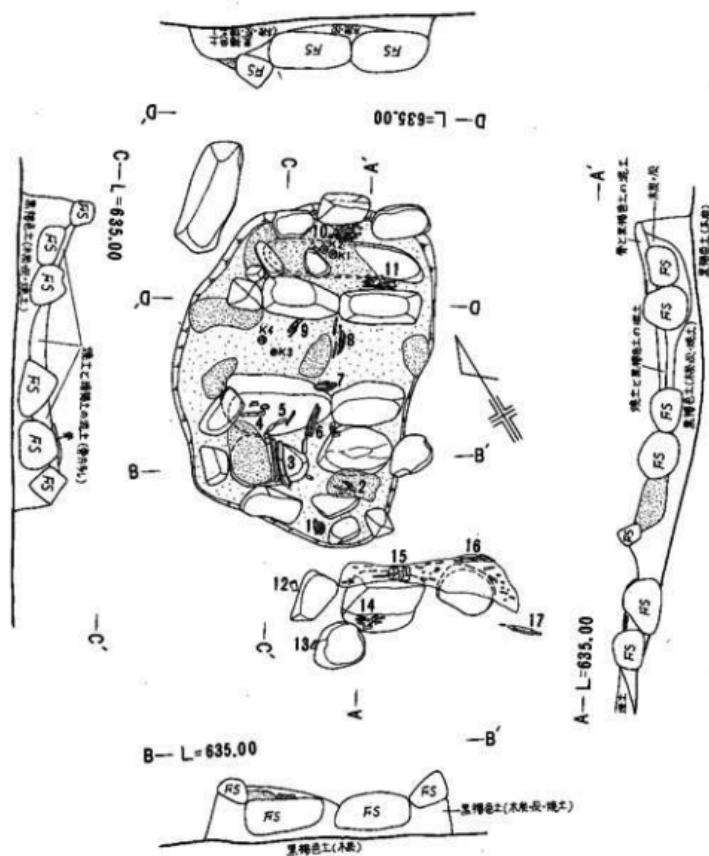
1号火葬墓と南側の人骨集中箇所との直接的な関係はつかめないものの、同一の人骨ではなく2個体のものであろうと考えられる。

人骨は、全体的に灰白色を呈しているが歯部と頭側骨は、灰青色がかった色を呈している。関節の部分はもろく、遺存状態が悪かった。

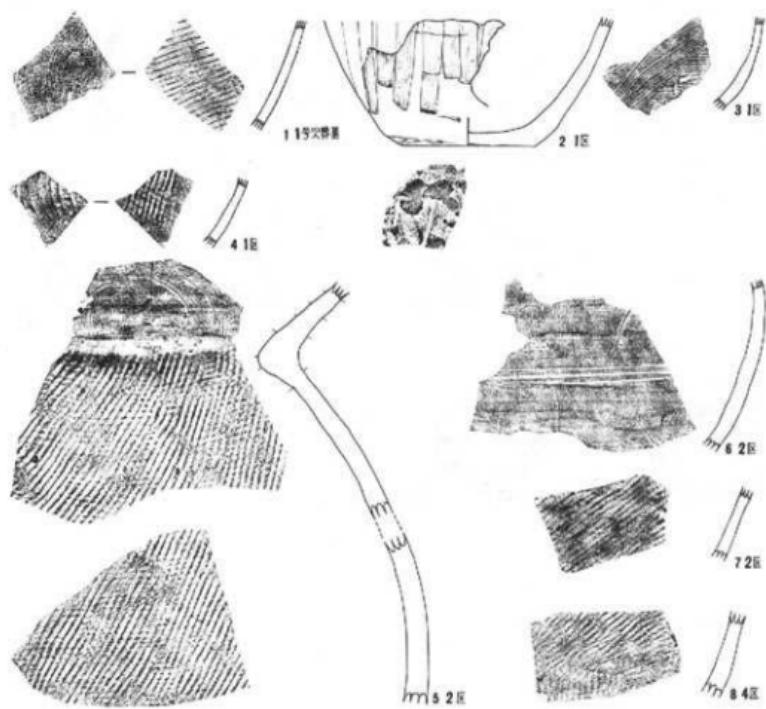
1号火葬墓から検出された人骨はその遺存状態より（北側に頭部があり南側に脚部があった点）北に頭を向けて焼かれたものと判断できる。

火葬方法については詳細に観察できなかったが基盤の石の直上もしくは上層に焼土と混じって多くの人骨が検出されたこと、さらに下層に木炭・灰が遺存していたことにより、基盤石の上に人体を寝かせ、下方から木を焚きつけて火葬したものと考えられる。

上・下伊那地域における火葬墓の発見例は、下伊那郡阿智村知里川畠遺跡・同北垣外遺跡（長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—昭和45年度 阿智・飯田・宮田地区—長野県教育委員会）、飯田市上飯田さつみ遺跡（長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—昭和45年度 飯田地区—長野県教育委員会）があげられる。その外には火葬墓の資料はあるであろうが研究不足のためご承知下さい。各々、ローム層を掘り込んで横円形及び長方形を呈する。さつみ遺跡の資料は、本火葬墓の形態と類似するが、基盤の石に整然とした配置を見い出すものではない。時間的判断は難しく本火葬墓でも古鏡と須恵器片が出土しているのみで決定的な判断は下しにくい。後述の古鏡等により室町～江戸時代のものと考えられる。



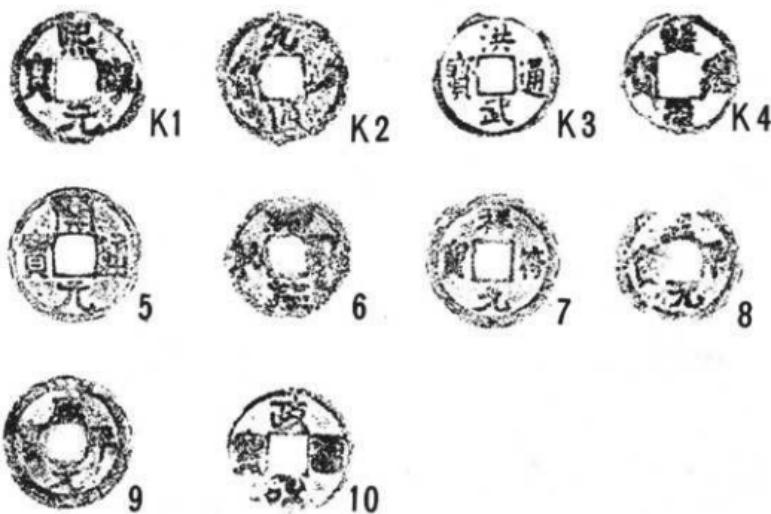
第73図 七免川B遺跡1号火葬墓実測図 (S-1)



第74図 七免川B 途跡1号火葬墓及び人骨集中1~4区出土遺物 (S-1)

掲図番号	形態	色調	胎土	焼成	調	整	備考
74図-1 -2	(壺) (×)	灰緑色 淡褐色	長石 砂粒	良好 良	脛部～外面平行印目文～内面こまかい青海波文 底部～縫のヘラ削り～底Rの糸切り 底径7cm	施釉陶器 土師器	
-3	(壺)	*	長石	良好	脛部～外面くし引き文～内面横などで		上師器
-4	(壺)	灰青色	*	*	脛部～外面格子印目文～内面あらい青海波文		須恵器
-5	壺	*	砂粒	*	脛部～外面横へラ削り、格子印目文～横などで		須恵器
-6	壺	灰白色	長石	*	脛部～外面横へラ削り～内面横などで		陶器藏骨壺
-7	(壺)	淡緑色	*	*	脛部～平面平行印目文～内面粗雑な青海波文		施釉陶器
-8	(×)	灰緑色	*	*	脛部～	*	施釉陶器

古銭（第75図）



第75図 七免川B遺跡出土古銭拓影図 (S-十)

七免川B遺跡出土古銭一覧表 (K 1～K 4 は第73図中のものである)

捲図番号	種類	出土地点	出土層位	鋳造初年代	備考
第75図-K 1	熙寧元寶	1号火葬墓	黒褐色土層	北宋熙寧元年(1068)	
* - K 2	元祐通寶	*	*	北宋元祐元年(1086)	
* - K 3	洪武通寶	*	焼土中	明洪武元年(1368)	
* - K 4	熙寧元寶	*	*	北宋熙寧元年(1068)	
* - 5	開元通寶	第6号住覆土	黒褐色土層	唐武徳4年(621)	
* - 6	*	*	*	*	(*)
* - 7	祥符元寶	*	*	北宋祥符元年(1008)	六文一括に出土
* - 8	咸平元寶	*	*	北宋咸平元年(998)	
* - 9	*	*	*	*	(*)
* - 10	政和通寶	第9号住覆土	*	北宋政和元年(1111)	周囲に骨片集中
* - (6)	(不明銘文)	第6号住覆土	*		No.5～9と一括に出土

宋銭が7枚、唐銭が2枚、明銭が1枚と不明銘文が1枚の計11枚出土したが、No.6は2枚が
浸蝕作業を受け密着しているため、1枚は不明銘文とした。 (小原 晃一)

第IV章 ま と め

昭和45年以来、県営圃場整備事業に先立って毎年行われてきた埋蔵文化財緊急発掘調査も、赤穂地区においてはほぼ終了しようとする状況である。

過去10年間にわたって発掘調査された遺跡数は22を数え、出土構構・遺物は多大な量として蓄積してきた。このことは上・下伊那地域さらには全県・全国的レベルにもあてはまるこであり、開発と緊急発掘調査のゆきをある意味で物語るものもある。

本遺跡の発掘調査もその状況の中に包括され発掘作業が行われてきた。緊急発掘調査（他の発掘調査も本質においては変わらないが）と遺跡一歴史的文化遺産の保護・保存のジレンマの中で、筆者を含め多くの担当者の方々は調査・研究をされてきている。学問的課題と社会的課題一歴史学としての考古学研究と歴史的文化遺産の保護・保存の命題を常に目的意識として調査・研究に努めてきたかを筆者自身、遺跡・遺物（史料）に問い合わせる時、努力が足りなかつたことを痛感する。

万全な調査体制、ち密で正確な調査、系統的かつ総括的な研究を遂行してきたかを本遺跡の調査に省みると必ずしも充分とは言えないが、ここで七免川B遺跡の概略を記してみたい。

住居址は全部で16軒発見され、縄文時代中期10軒、奈良～平安時代5軒、平安時代以降1軒である。

縄文時代中期後葉～末葉（曾利I～II式比定）— 2・4・7・9・12～15

奈良～平安時代（7C末～8C） — 1・5・6・8・11

平安時代以降 — 16

縄文時代の住居址については平面プランが円形なもの（2・13）、橢円形と思われるもの（10・15）、隅丸方形と思われるものの（3・4・7・9・12・14）に分かれ、さらに周溝を併うもの（2・3・9・10・13）が挙げられる。特に、2号住と13号住は二度に渡って炉が使用され、3・4号住は炉石の抜き取りが見られず、地床炉とも考えられる。10号住の炉については、時代の下る6号住の構築時かそれ以前に炉石が抜きとられた痕跡が観察できた。

住居址は北東より南西に向かって台地先端部に造られ、さらに南西方向に広がりをもつと思われる。

出土遺物は諏訪地域の曾利I～II式比定（関東地方の加曾利E I末～III式比定）の深鉢形土器の出土が多く、石器では短冊形の打製石斧が多い。また、小形深鉢形土器に台を付けた台付土器及び台部が十数片出土している点は注意をひく。黒縞石製品や剝片は割りと少ない。

奈良～平安時代の住居址は、平安プランが方形なもので4.5m四方～6.5m四方位の大きさをもつ。カマドの位置は、各住居址ごとばらばらな状態で、1号住では西壁、5号住では北壁、6号住では北壁と西壁、7号住では東壁に位置している。他の遺跡では、当地域の自然環境（西風が強い）などの影響から、東壁か西壁に位置するが、本遺跡の不統一さ、不規則さは、何を意味するか今後の問題である。

出土遺物は全体的に少なく、土師質の壺が多く、須恵質の壺も見られる。他の遺物は出土していない。

平安時代以降の住居址と考えられる住居址に、土手寄りの第16号住居址が相当し、覆土は黒褐色土で充されていたが、出土遺物は確認できなかった。

土塁は、全部で107基検出され、群構成をするものの複数と単独土塁4基に分けられる。このうち、縄文時代中期に属すると考えられるもの44基、縄文時代後期に属するもの2基、縄文時代晚期～勞生時代初頭に属するもの3基、奈良時代～平安時代に属するもの7基、不明55基である。土塁の性格や機能がはっきりとしたものが少ない中で、土塁99・107号は、堆積状態一焼土層と暗褐色土層の交互の整層などから注意を要するものがある。

土塁からのまとまった出土遺物は全体的に少ない。

最後に火葬墓及び人骨集中区についてであるが、整理研究が充分に成し得なかった情況もあり、若干の検討として記したい。

遺構は調査地区の南東隅に検出され、黒褐色土層中に構築され、また位置していた。火葬墓は1基、人骨集中区1～4区が発見された。

火葬墓の大きさは、東西65cm南北88cmの長方形を呈し、断面はやや舟底形をしていた。北より南にかけて人骨が頭から脚へと順をおい遺存していたことから、北に頭を向けて火葬されたものと考えられる。

出土遺物は、數片の施釉陶器と古銭4点が出土している。施釉陶器は藏骨器である壺形を呈するものの胴部破片とも推定できうるが確証はない。出土古銭は、熙寧元寶の初鋳造時期が、北宋熙寧元年（1068年）であることから、鎌倉時代以降のものと考えられる。

極めて概略的なまとめとなりましたが、最後に南信土地改良事務所、市教育委員会、また発掘に協力をしていただいた皆様のご厚意に心から感謝を申し上げましてまとめといたします。

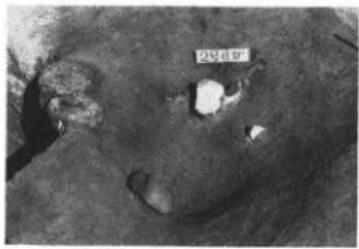
（小原 晃一）

図 版

七免川 B 遺跡



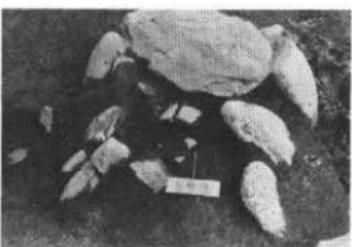
図版1 七免川B遺跡遺構全景及び第1号住カマド、第2号住



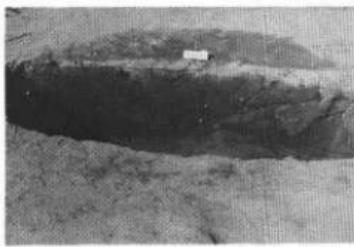
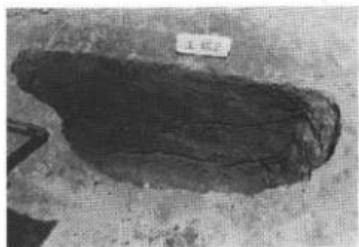
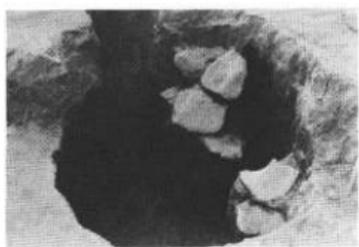
図版2 七免川B遺跡第2号住、3号住、4号住及び遺物出土状態



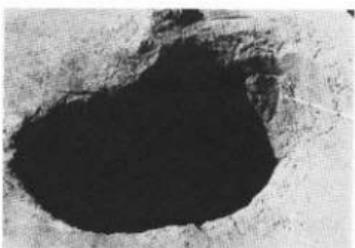
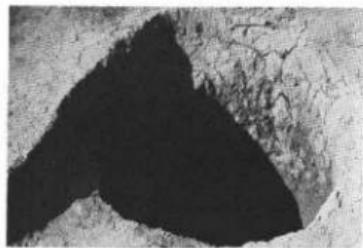
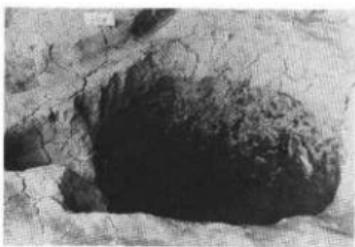
図版3 七免川B遺跡第5号～8号、10号住



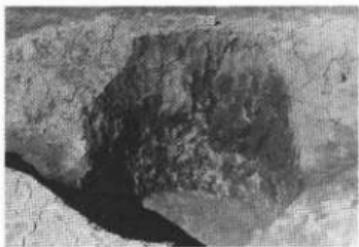
図版4 七免川B遺跡第8号、9号、13号住



圖版5 七免川B遺跡土坡1~3, 6, 7



図版6 七免川B遺跡土塁群Vと土塁11, 13, 41, 47, 68, 72



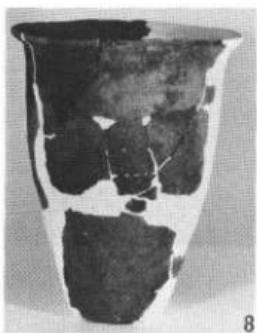
図版7 七免川B遺跡土埴83, 97, 104, 106, 107



5



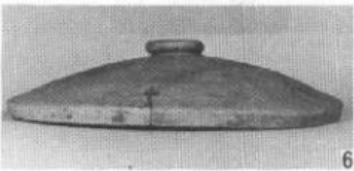
5



8



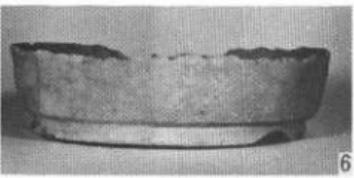
6



6

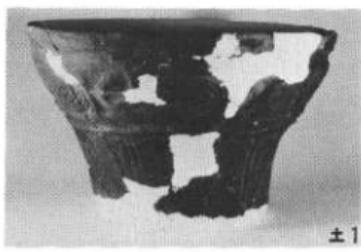


8

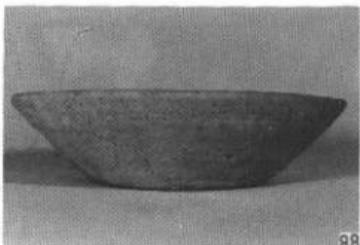
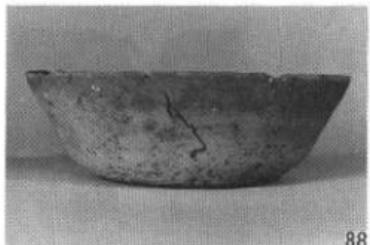


6

图版8 七免川B遺跡第5、6、8号住出土遺物



図版9 七免川B遺跡第2, 3, 13, 14号住及び土塙1, 7出土遺物



図版10 七免川B 遺跡土塁40, 77, 88出土遺物



七免川B遺跡 1号火葬墓及び人骨集中区

図版11 七免川B遺跡 1号火葬墓及び人骨集中区

日向坂・赤須城・七免川A・七免川B遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月10日 印刷

昭和55年3月20日 発行

編集 跡ヶ根市赤穂2423-6市立博物館内
県営は場整備事業大田切(3)地区
埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内
南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤穂10780-2

駒ヶ根市教育委員会

印刷 下諏訪町駅前
株式会社印刷